

地域交流センター一年報

平成27年度

VOL.18



三重県立看護大学
地域交流センター

巻頭言

地域交流センター年報平成 27 年度第 18 巻をお届け致します。平成 27 年度は、三重県立看護大学の第 2 期中期目標期間の 1 年目であり、第 1 期に企画・展開してきた様々な事業を礎とし、本学の教職員が一致団結して一層の充実に努めて参りました。

本学では、全教員が地域交流センターを兼務しており、個々の教員が様々な専門性を活かした事業を主体的に展開しています。平成 27 年度は 19 の事業が提案・実施され、そのうちの 5 件は県から委託を受けた、より期待と責任の大きい事業でした。また、本学の教員が県内各地に赴いて講演などを行う出前講座（昨年度の出前授業と公開講座講師派遣をあわせました）は 74 件、その他の講師派遣は 13 件にのぼり、高校生のための看護職キャリアデザイン講座ステップ 1 では 23 の高等学校にうかがいました。いずれの事業も有意義に展開され、本学の教育・研究の成果をお届けできたと考えています。また、地域交流センターでは、平成 26 年度に引き続き 6 回シリーズの「認知症ケア看護師養成研修」を 2 度開催し、定員を大きく上回る看護職者の皆さんにご参加いただきました。熱心に研修を受けられる皆様のご様子を拝見し、認知症看護の必要性が一層増していると痛感いたしました。平成 28 年度には、当該研修を 1 度開催しつつ、平成 29 年度に開講を計画している認定看護師教育課程「認知症看護」の準備を着実に進め、認知症看護に関わる事業を展開して参ります。さらに、今年度は 8 ヶ月間の「三重県専任教員養成講習会」を実施し、29 名の皆さんに修了いただいたことや、看護研究支援の件数や参加人数が増加したことなど事業が拡大いたしました。本学は単科の看護大学であり人的資源には限りがあります。これらの事業を達成できたことは、教職員が力を結集して取り組んだ成果であり、本年報でその内容をご報告させていただけることは誠に誇らしい限りです。これらの地域貢献活動は、三重県公立大学法人評価委員会から高い評価を受けるとともに、平成 27 年度に日本経済新聞社産業地域研究所が行い、日経グローバルに掲載された全国の大学対象の「地域貢献度調査」の結果では、総合では全国で 160 位、東海地区で 18 位と看護系単科大学としては非常に高く評価されました。

「地方創生」においては、公立大学が重要な拠点であるとの認識も広がっております。本学地域交流センターは、三重県民の皆様の健康維持増進に貢献し創生の基礎を固めることができるよう、平成 28 年度においても、教職員一丸となって地域貢献活動を充実させることを責務と考え努力して参ります。

平成 28 年 3 月

地域交流センター長
大西範和

目 次

I. 県民の健康増進事業

1. 不妊専門相談に関する人材育成および相談事業等の支援…………… 1
2. 不妊・不育症等の知識普及・啓発事業…………… 4
3. 思春期ピア活動支援事業「若年層における児童虐待予防事業」…………… 8
4. 地域の子育て支援の担い手養成サポート事業…………… 11
5. 在日外国人の子育て支援交流事業…………… 14

II. みえ看護力向上支援事業

A 看護研究

1. 看護研究支援…………… 17
2. 遠隔配信－初学者のための看護研究－…………… 20

B 教員養成

1. 専任教員養成講習会…………… 24
2. 看護教員継続研修…………… 28

C 看護実践

1. 新人助産師の臨床実践能力育成のための研修体制構築…………… 30
2. 周産期における母子・家族支援のための臨床助産師の看護実践能力育成…………… 34
3. 看護職を対象とした運動指導実践講座…………… 38
4. マネジメントリーダーの活用…………… 42
5. 臨床で活かそう看護診断…………… 44
6. ケアをめぐる哲学カフェ－立場の違いをこえて話し合おう－…………… 48
7. 初歩の電子カルテ…………… 50
8. 認知症ケア看護師養成研修…………… 52
9. 感染管理認定看護師資質向上研修…………… 57

III. 卒業生支援事業

1. 卒業生のきずなプロジェクト…………… 59
2. 医療・福祉機関と連携した看護職員確保対策事業…………… 63

IV. 地域住民ふれあい推進事業

1. 災害にそなえて～地域の防災・減災力を高めよう～…………… 65
2. アイリッシュ・マッシュポテトを作ろう…………… 69
3. やってみよう！看護のお仕事…………… 72
4. 英語で話そう…………… 76
5. 地域で知り合い・支えあうコミュニティサロン事業…………… 78

V. 講師派遣事業

- 1. 出前講座 81
- 2. その他の講師派遣 93

VI. 資料

- 1. 公開講座 95
- 2. 情報発信・広報活動 97
- 3. 新聞掲載記事 100
- 4. 各種事業の要項・申込書 106

I. 県民の健康増進事業

1・不妊専門相談における人材育成および相談事業等の支援

担当者： 二村良子、永見桂子、大平肇子、岩田朋美、松本亜希、堂本万起

【事業要旨】

不妊専門相談センターにおいて不妊や不育症に関する電話・面接相談を行う相談員への支援を行う。また、不妊に悩む方たちが集まり、お互いに悩みや疑問を語り合う場としての交流会を行い、夫婦が安心して不妊治療を行い、心身ともにより良い生活が送れるように支援を行う。その交流会に相談員も参加し、今後の不妊医療に関する課題を明確化し、具体的な支援内容の検討および相談員の質向上のための学習機会の環境を整える。

【地域貢献のポイント】

1. 不妊専門相談センター事業への支援および行政施策に基づく活動への協力を通して、不妊に悩む女性を支援する。
2. 不妊に悩む方たちへの相談等の支援を通しながら、不妊専門相談に関する人材育成、相談員の能力向上に寄与する。
3. 不妊専門相談センター相談員への支援により把握した三重県の不妊に関する現状・課題を三重県不妊相談検討会への参加など行政との連携の際に提示し、不妊に悩む女性の支援に関する行政施策に寄与する。

I. 活動計画

1. 不妊専門相談センター事業への支援および行政施策に基づく活動への協力を通して不妊に悩む女性を支援する。
 - 1) 電話相談および面接相談の件数が昨年より多く、相談件数は220件程度となる。
 - 2) 不妊相談員の疑問や問題に答えることによって、不妊相談員が不妊に悩む女性および家族の相談に対応することができる。
2. 不妊専門相談に関する人材育成への支援
 - 1) 不妊専門相談センターの相談員を4名程度確保しながら、相談員の疑問や問題に対する助言、情報提供、学習支援等を行いながら、相談員の質向上をめざす。
 - 2) 不妊に悩む方たちの交流の場を設定し、参加者とともに不妊相談員も参加し、不妊医療の現状、課題を明確にし、新たな不妊事業や支援方法について検討する。
3. 年1回開催される不妊相談検討会に委員として参加し、行政との連携を通して、不妊に悩む女性の支援に関連する行政施策の企画について検討する。

II. 活動の実際および経過

1. 不妊専門相談センター事業への支援および行政施策に基づく活動への協力を通して、不妊に悩む女性を支援する。

不妊専門相談センターにおいて不妊や不育症に関する悩み等について電話相談、面接相談を行う相談員への支援を行う。また、週1回火曜日に実施している不妊に関する電話相談における相談員への助言、情報提供、学習支援などを通して相談活動を支援する。

2. 不妊専門相談に関する人材育成への支援

- 1) 不妊専門相談センターの相談員が電話相談を行うにあたって、必要な知識が得られる書籍の紹介や電話相談時における必要な知識、具体的な相談担当業務について習得できるようにした。
- 2) 不妊に悩む方たちが集まり疑問や悩みをお互いに話し合える場として交流会を企画し、平成27年11月29日(日)13:30~15:30に開催した。不妊相談員も一緒に参加し、交流会におけるファシリテーターとしての役割をとれるようにした。交流会での話から、不妊においてどのようなことを疑問に思い、またそれらに対処しているかの実際を知る機会となった。

3. 三重県不妊相談検討会への参加などの行政との連携

三重県不妊相談検討会が平成28年2月4日(木)14:00~16:00に開催予定であり、委員として相談員2名とともに出席し、今年度の電話相談および委受託事業の実施状況を報告し、今後の課題など取り組むべき項目を提案していく。

Ⅲ. 活動の結果と評価

1. 不妊専門相談センター相談員への支援

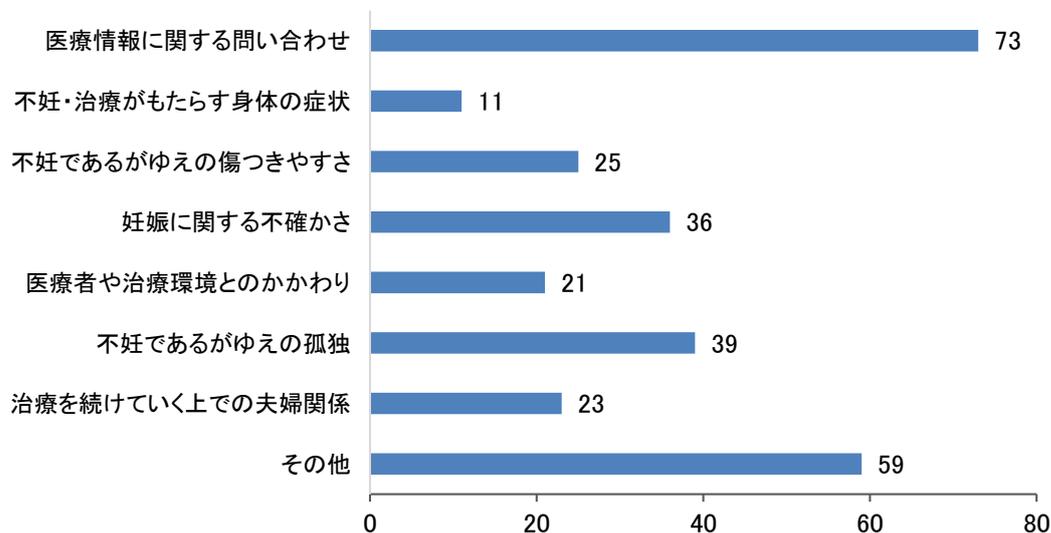


図1 三重県不妊専門相談センターにおける相談内容(件) n=189(複数回答)

今年度、平成28年1月19日までの不妊専門相談センターへの相談回数は39回、相談件数は、189件であった。昨年度の同時期の183件とほぼ同様であった。再相談は59.3%であり、昨年度の65.2%より減少傾向がみられた。相談内容については、「医療情報の問合せ」が73件(昨年度60件)であり、昨年度の同時期に比べて1.2倍程度増加した。平成26年4月から不妊治療費助成制度が一部変わり、また、平成28年4月からは、対象範囲、助成回数も変わることから、それらの問い

合わせや現在行っている治療の継続、終結等についての相談等も多くなっている。他に、不妊治療施設についての情報等の問い合わせもみられ、制度変更や治療内容、それに伴う疑問など得られた情報の確認として電話相談を利用している状況であり、これらの状況を治療施設等に還元することが必要ではないかと考える。また、相談内容として、本当に自分は妊娠するのか、自分は妊娠する人とどこがちがうのかといった悩みである「妊娠に関する不確かさ」については、平成 26 年度は前の年より件数の減少がみられていたが、今年度は、36 件（昨年度 25 件）と増加傾向であった。「不妊であるがゆえの孤独感」は、昨年度が 79 件であったのが、今年度は、39 件と約半分であった。相談件数の推移の理由・原因等については、不妊に悩む方たちの現状を把握するためにも電話相談内容の詳細な分析を行うとともに、面談や不妊の方たちが集まっての交流会で直接話しを伺うことも必要である。

2. 不妊専門相談に関する人材育成への支援

- 1) 不妊専門相談センターにおいて相談員の登録者数は、今年度新規登録者 4 名を含む 8 名（内不妊症看護認定看護師 2 名）であるが、実質相談を担当できたのは、6 名であった。電話相談等を行うにあたって、必要な書籍の紹介や必要な知識、具体的な相談担当業務について習得できるようにした。また、必要時研修に参加できるように県と調整を行った。また、相談員の人数が昨年度より 2 倍となり、相談員の経験年数に差があることから、相談の質を確保するためにも、相談員同士での情報交換や相談体制をとれるように相談状況を把握していくようにした。
- 2) 不妊に悩む方たちが集まり、お互いに不妊治療に関する疑問や悩み、日常生活の過ごし方などを話し合える機会として交流会を、平成 27 年 11 月 29 日（日）13：30～15：30 開催した。交流会では相談員も一緒に参加し、交流会で話し合われている内容から、不妊に悩む方たちの疑問点や悩み、それらの対処方法の実際について相談員が知る機会となった。交流会での主な内容は、「治療において辛いときの対処方法」、「医師、看護職者の対応について」、「夫婦関係について」、「不妊治療を行っている自分の気持ちや感情の変化」、「食生活など日常生活での工夫」、「不妊治療の終結をどのように考えているか」などであった。交流会での不妊に悩む方たちの意見は、不妊治療における女性およびその家族の現状として医療職者は理解しておく必要があり、医療職者にこの現状を伝えることが必要と考える。

また、交流会の継続的な開催の要望もあり、今年度は、平成 28 年 1 月 19 日（火）の 14：00～16：00 時間内に自由に参加できる交流会を試行的に実施し、2 名の参加があった。さらに 2 月 16 日（火）にも同様に開催予定である。

IV. 今後の課題及び今後に向けての計画

不妊専門相談センターの電話相談は、相談件数については、一定の数であり、このような場は必要であると考え。しかし、相談員の人数と質の確保が今後の課題であり、相談員の能力向上のための学習の機会としてカンファレンスの実施などを検討する。

2. 不妊・不育症等の知識普及・啓発事業

担当者： 二村良子、永見桂子、大平肇子、岩田朋美、松本亜希、堂本万起

【事業要旨】

不妊や不育症に関する正しい知識の普及・啓発を目的に講演会を開催し、不妊や不育症に悩む夫婦とその周囲の理解を促し、治療を受けやすい環境づくりを行う。

【地域貢献のポイント】

1. 不妊に悩む夫婦だけではなく、不妊に関わる周囲の人々および医療者が不妊に関する知識普及・啓発により不妊治療・医療を実践していく中で日常生活の過ごし方について見直し、よりよい生活への取り組みに寄与することができる。
2. 不育症について、正しい知識が得られ、不育症に悩む夫婦だけではなく、不育症に関わる人々および医療者の不育症に関する理解を深めることができる。

I. 活動計画

1. 昨年度の講演会終了後のアンケートで開催希望が多かった不妊と食生活との関連のテーマ設定のもと、不妊に悩む夫婦および医療者を対象に講演会を年1回開催し、出席者40名程度の参加を得ることができる。
2. 不育症について、昨年度は医療職者を対象に講演会を行ったが、今年度は、不妊治療中の方、不育症で治療を受けようと思っている夫婦など一般の方を対象に、不育症の理解を深めるために講演会を開催し、出席者30名程度の参加を得る。

II. 活動の実際および経過

三重県健康福祉部子ども・家庭局より昨年度に引き続き、不妊専門相談に関する業務委託の要請があり、不妊・不育症等の知識普及・啓発事業として位置づけ、以下のような活動を実施した。

1. 不妊講演会の開催

昨年度の不妊講演会終了後のアンケートで不妊と食生活との関連についての講演会開催の希望が多かった。この結果を受けて、不妊と食生活との関連に詳しい講師を選定し、テーマ設定を行った。

不妊治療において先駆的な取り組みをしている IVF ジャパングループの「HORAC グランフロント大阪クリニック」に講演会の開催趣旨を説明し、講師派遣の依頼を行った。そこでは、統合医療部門として食事療法、運動療法、心理療法等により、心や身体を見直す機会とし、人間の身体を全体的に捉える医療を行っている。講師としては、統合医療コーディネーター・看護師・生殖医療相談士の角元奈津子氏、生殖栄養カウンセラー・管理栄養士の鎌田紀子氏に依頼し、「妊活ライフをアップさせる栄養的アプ

ローチ～食習慣でからだは変わる～」をテーマに、平成 27 年 11 月 8 日（日）13：30～15：00 に講演会を三重県立看護大学において開催した。



図1 統合コーディネーターによる講演



図2 生殖栄養カウンセラーによる講演



図3 不妊講演会の様子

2. 不育症講演会の開催

昨年度、不育症講演会を医療職者向けに開催し、不育症（習慣流産）の知識普及を行った。今年度は、不妊治療中の方、不育症で治療を受けようと考えている夫婦を対象に不育症の講演会を開催した。講師には、不育症の専門クリニックを日本で最初に名古屋市内に開院し、「不育症」



図4 不育症講演会の様子

「着床障害」の治療に心身の両面から取り組んでいる青木産婦人科クリニック院長青木耕治氏に依頼した。

講演会におけるテーマを「不育症について理解を深めるために」とし、平成 27 年 12 月 20 日（日）14：00～15:30 に三重県立看護大学において開催した。

Ⅲ. 活動の結果と評価

1. 不妊講演会

不妊講演会の参加者人数は、事前申込者 40 名あり、当日参加者を含めて 58 名であった。講演会終了後に参加者アンケートを実施し、回収率 68.0%であった。開催日時については、「参加しやすい」94.1%、開催場所については、「参加しやすい」67.6%であった。三重県立看護大学の場所がわかりにくいようであり、案内の際に場所を示す地図等を掲載すべきであった。「講演会開催をどのような経緯で知ったか」については、「広報」11.8%、「ポスター等の案内」47.1%であった。病院等治療施設において情報提供があるところとそうでないところとがあり、案内方法については、検討が必要である。

アンケートの自由記述の内容より、「治療を始めるにあたって、食生活も見直そうと思ったから」、「体質改善をした方がいいと思い始めたから」、「治療も 3 年を超え、もう一度基本にかえって、食生活を見直すきっかけとしたかった」、「治療が長引いており、自分にできることをやりたいと思って」など実際に行っている治療に加えて、自分自身にできることを行っていきたいという意思があり、そのような内容を求めていることが伺えた。また、「妊活ライフに焦点を当てた講演会はあまりないので興味をもった」、「あまり聞いたことがない講演内容であったから」のように講演テーマに関心を持って参加したということであった。「ふだん患者と接する時、食事をきちんと摂れていないのではと疑問に思うことが多々あり、参加したいと思って参加した」、「自分自身管理栄養士であり興味があったため」、「当院では体重減少を目的とした栄養指導が中心なため、不妊患者すべてに案内できる栄養指導を行いたいと考えているため参加した」など医療職者が目的をもって参加している様子も伺えた。

講演内容について「よかった」と回答した者は 97.1%であり、全体的に講演会については高評価であった。「よかった」と回答した理由については、「食事内容等、ふだん心がけられるポイントが聞けてよかった」、「妊活と栄養的アプローチの話は聞いたことがなかったのでよかった」、「不妊治療において食生活の見直しをするきっかけになった」、「これからの生活で取り入れられる食生活を教えていただけてよかった」、「治療は主治医にまかせているが、少しでも何か自分でできることはないかと考えている」、「栄養面に気をつけているつもりであるが、自己流でわからないことが多いので」などであった。

「ご飯の量、ミトコンウォークは実践していきたい」、「ミトコンドリアに視点を当てており、妊活のことを改めて考えることができた」、「当たり前的事柄でも、実践が大事とモチベーションアップにつながった」、「三重県内ではなかなかない講演会だと感じた」、「毎日ラジオ体操をしているが、ミトコンウォークも取り入れてみたいと思った。レシピをもっと教えて欲しかった」などの意見があり、普段の生活の中でとりいれられるような実践に即した内容であり、生活を見直すきっかけとなり、また治療等の取り組みへのモチベーション向上にもつながるとして好評であった。

2. 不育症講演会

不育症講演会の参加者人数は、事前申込者 20 名であり、当日参加者を含めて 34 名で

あった。講演会終了後に参加者アンケートを実施し、「今回の講演会開催をどのような経緯で知ったか」は、「ポスター・ちらし」73.7%が最も多かった。「開催曜日・時間」については、「参加しやすい」が78.9%であった。また、「開催場所」については、「参加しやすい」が89.5%であり、概ね開催曜日・時間、開催場所については、好評であったと考える。

「不育症に視点をあてたテーマについて」の質問に対して、「よかった」が100%と高評価であり、「不育症の理解を深めるために」は関心の高いテーマ設定となっていたと考える。「よかった」と回答した理由としては、「着床障害、精神面に重点を置いた話でよかった」、「不育症のことを知ることができてよかった。知らないことが多かった」と不育症について知りたいという要望が高かったテーマであったといえる。

講演会内容については、「不育症と精神面との関わりの内容が分かりやすくよかった」であり、「精神面が影響を与えている可能性について知ることができた」と不育症と精神面とが影響し合っている点についても理解を深めることができた。さらに、「精神面のバックアップ方法をもう少し詳しく聞きたかった」や「もっと話を聞かせてもらいたい」とさらに詳細な内容の要望もあった。

3. 三重県の不妊・不育症に関連する現状に対する要望

不妊症・不育症の講演会を通して、現在の三重県の不妊・不育症を取り巻く現状について自由記述から、「治療費助成の年齢制限」や「治療費助成の助成回数」についての意見が多くみられた。また、不妊治療等を実施していく中で、「治療のために早く帰らなくてはならないことが辛い」、「不妊治療の暗いイメージがぬぐい切れていない気がする」、「現在まだ不妊イコール不幸せ（閉鎖）的なイメージがあるので、もっと若い年齢から不妊について触れる機会があればいいと思う」、「私たちの時代は妊娠について年齢や卵子の質、数の低下に対して教育がなかった。今の高校生や中学生に早いうちから教育してあげて欲しい」、「妊娠することがたいへんなことだと思っていた。基本的なところから改善していきたいと思った」というような不妊に対する社会のイメージや不妊にもっと関心をもってくれることを望む意見もあった。これらから、不妊に悩む方たちだけでなく、広く、社会全体の不妊や不育症に対する認知と理解を高める取り組みが必要なのではないかと考える。知識普及・啓発の対象の範囲を広くする試みを行うことが求められていると考える。

IV. 今後の課題及び今後に向けての計画

不妊・不育症等の知識普及・啓発は、当事者である方たちへ行うことは必要であるが、医療職者の知識普及・啓発がさらに重要である。また、社会全体としての不妊・不育症への理解を深める方法について今後、様々な職種の方たちと検討することが必要である。

今後は、不妊に関する知識普及・啓発を行うにあたっては、中学生・高校生の若い世代も含めて、知識普及・啓発をどのような対象者に行うかを明確にし、その対象者にあった知識普及・啓発の方法を考えていくことが課題である。

3. 思春期ピア活動支援事業 「若年層における児童虐待予防事業」

担当者：大越扶貴、井倉一政、北恵都子、松川真葵

【事業要旨】

三重県では、平成 24 年から若年層における児童虐待予防事業の一つとして、思春期保健事業を挙げ、ピアサポーター養成の取り組みを開始し、平成 25 年からは第 2 次「三重県自殺対策行動計画」において若年層の自殺予防の取り組みをも包摂することとなった。本事業は、三重県の委託を受け最終年度を迎えた。本学学生のピア活動の支援を関係機関等と連携し実施するとともに、思春期の性の健康を支える支援体制のあり方について提示する。

【地域貢献のポイント】

看護大学の人材（教員・学生）を有効に活用し、県内の中学の教諭および関係機関・職種と連携を図り、中学生の性の健康を支える支援体制のあり方を提示する。

I. 活動計画

1. 中学生を対象としたピア活動の企画・実施・評価
 - 1) 平成 23 年度より開始している類似活動の津市内一中学校をモデル校 A とし、関係者との連携のもと、ピア活動を継続して実践する。また、津市以外の中学校 B 校においても、ピア活動を実践する。
(目標数値：津市内モデル校 1 校、志摩市内モデル校 1 校に於いて実践)
 - 2) 事業実施推進にかかる関係者との連絡調整会議を開催する。
2. ピアリーダー（3・4 年生）、ピアサポーター（2 年生）の養成
 - 1) 講座回数：1 回以上
 - 2) 内容：今年度は、ピアカウンセリングという形態をとるため、
 - 3) 養成人数：思春期ピアサポーター 20 人以上
 - 4) 他のピアサポーター養成大学と協議をして協力体制をとって実施する
3. 思春期ピアサポート連携会議開催し、思春期ピア活動を通して思春期の健康支援体制のあり方を検討
 - 1) 目標数値：ピア活動実践校 1 校あたり 2 回程度
 - 2) メンバー内訳：ピア活動に携わる保健師、保健体育教諭、養護教諭、大学生、大学教員等

II. 活動の実際および経過

1. 中学生を対象としたピア活動の企画・実施・評価
 - 1) 中学生

[企画]

モデル校 A

(1) 事業実施に向けての連絡調整会議

中学と大学教員の話し合いの中で、4年間の実践を総括した。費用対効果、生徒のニーズという観点から、これまでの実践を見直し、今年度はピアカウンセリングという形態で10月頃から12月まで実施を企画した。事前にピアカウンセリングについての研修（講義：思春期の特徴、思春期ピアカウンセリング、ロールプレイとは、演習：事例に基づくロールプレイ）も企画した。

(2) ピアリーダーの対象校訪問による生徒との交流

ピアカウンセリング実施にあたり、A校の全校生徒が集まる場を借りて、ピアカウンセラーとなる学生の自己紹介を企画した。

モデル校 B

(1) 志摩市保健師と中学校の連携から始まった思春期保健の事業（出前健康教育）の一つとしてピアリーダーの参加を企画した。

[実施]

モデル校 A および B でピア活動を実施した。活動人数は、実人員 11 名であった。A 校では、所定の場所で、事前に開催日を生徒に知らせ学生 2 名でのピアカウンセリングを実施した。B 校では、保健師の性教育の後、各グループに学生が入り、性の予防行動等についてグループワークを実施した。ピアリーダー養成総数は 20 名であった（表 1）。活動の様子は写真 1 および 2 のとおりである。

表 1 平成 27 年度 思春期ピア養成および実施月と参加学生実人数（中学校）

| 月・対象学年 | モデル校 A | モデル校 B | 養成 |
|-----------------------|--------|--------|----------------------|
| 2015 年 9 月 | | | 9 名（4 年 7 名、3 年 2 名） |
| 2015 年 10 月～12 月 | 7 名 | | |
| 2016 年 1 月・3 年生 3 クラス | | 4 名 | |
| 2016 年 2 月 26 日 | | | 27 名（3 年生） |



写真 1 ピアカウンセリング研修



写真 2 実践校 B でのピア活動

III. 活動の結果と評価

1. 中学・高校生を対象としたピア活動の企画・実施・評価について

津市内中学校モデル校 A と志摩市内モデル校 B で教育機関、保健行政機関との連

携を図りピア活動を実践し、目標を達成した。

中学校の実践における企画は、大学生、教員、モデル校教諭、関係機関との協働のもと目的を共有する会議を実施し、実践可能な企画ができたと考える。モデル校 A については、ピアカウンセリング実施後に必ず教員との振り返りを行った。また、実践評価に関してはモデル校の担当教諭や保健師が参加生徒にアンケートを実施し、ピアは、中学・大学担当教員とともに振り返りを行った。

2. ピアリーダー（主に 3・4 年生）、ピアサポーター（主に 2 年生）の養成プログラムの検討と養成について

今年度は、主に 4 年生を対象に、ピアカウンセリングの基礎学習として、思春期の発達課題や問題行動、ピアカウンセリングのスキル、ロールプレイを行う意味の講義とともに、架空事例を用いてロールプレイを実施した。ピアカウンセリングの実施にあたっては、相談者である生徒の安全や安心を担保する上でも、小児看護、精神看護等関連科目や実習を全て終えた 4 年生であることが望ましいと考えられた。

3. 思春期ピア活動を通して思春期の健康支援体制のあり方の検討について

調整会議を適宜開催し目標は達成できた。実務者的な連携会議を開催することで、実際の活動を深めていくことができたと考える。

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

学内外関係者との試行錯誤の取り組みを経て、今年度はピアカウンセリングという個別支援の手法を用いた。生徒集団へのアプローチのみならず個別へのアプローチへの取り組みも実施し、ピア活動を展開していくために必要な関係者間の各役割やピアとなるための知識等具体的方策について一定の体系化を図ることができた。

本事業は県委託事業で、今年度が最終となる。しかし、ピアカウンセリング取り組みは開始したばかりであり、その評価も十分ではない。今後思春期ピア活動に関するニーズに応えるためにも、外部の活動助成金等を確保しながら継続していくことも検討していきたい。

4. 地域の子育て支援の担い手養成サポート事業

担当者：宮崎つた子、小池敦、水谷あや、上杉佑也

【事業要旨】

本事業は、子ども・子育て支援新規制度において実施される各事業および家庭的な養育環境が必要とされる社会的養護に関する人材を養成する行政の取り組みを応援する連携事業である。主に、一般市民に対して行政・地域・団体が実施する子育て支援事業に対して、国の定める基礎研修や専門研修の企画・運営・事業評価までをサポートする。

【地域貢献のポイント】

本事業は、①地域のニーズへの対応、②本学の専門性の活用、③地域行政との連携、④地域での子育て支援および社会的養護への貢献になる。

I. 活動計画

- 平成 27 年 5 月 企画・運営等の打ち合わせ
- 6 月 地域の子育て支援の担い手養成サポート事業開催
- 7 月 担当者反省会、企画・運営振り返り、評価方法の打ち合わせ
- 12 月 研修会参加者および行政担当者への評価方法の検討・実施
- 平成 28 年 3 月 全体集計終了

II. 活動の実際および経過

本事業は、子ども・子育て支援制度において行政が実施する「子育て支援の担い手となる人材養成」を応援する連携事業である。今年度、名張市から事業希望があり、研修希望内容の調整を行った。各研修の企画・運営等の打ち合わせを重ね、名張市が希望した6月に6日間、全17内容の講義、演習、グループワークを開催した(表1)。参加者は当初の目標参加人数(200名)を大幅に超え、延べ人数1053名であった。事業終了後に名張市関係者との合同反省会を7月6日に実施し、研修会の課題と今後の評価について検討を行った。



表1 なばり子育て支援員研修

| 月日 | 時間 | 科目名 | 内容 | 講師 |
|--------------|------------|--------------------------------|--|---|
| 6月1日 (月) | 9時～10時 | 説明会 | ・子ども子育て新制度と名張市の子育て支援について ・研修会の趣旨 ・スケジュール等 | ○名張市役所子ども部・健康支援室 |
| 6月8日 (月) | 9時～12時 | 概論①「子ども子育て家庭を取り巻く現状と子どもの育ち」 | ・子ども子育て家庭の現状 ・子ども家庭福祉 ・保育の原理 ・子どもの発育 ・対人援助の価値と論理 | ○三重県立看護大学:宮崎つた子(小児看護学)小池敦(心理学)○名張市役所:子ども部・健康支援室 |
| | 13時～14時30分 | 各論①「子どもの心理的発達」 | ・子どもの心理的発達 | ○三重県立看護大学:小池敦 |
| | 14時30分～16時 | 各論②「子どもの虐待・子どもの障がい」 | ・子どもの虐待と社会的擁護 ・子どもの障がい ・市の相談支援体制について(15:30～16:00) | ○三重県立看護大学:宮崎つた子○名張市役所子ども部:(子ども家庭室・子ども発達支援センター) |
| 6月14日 (日) | 9時～12時 | 概論②「子どもの安全」 | ・健康観察と衛生管理 ・地域保育の環境整備 ・安全確保とリスクマネジメント ・保育者の倫理と配慮事項 | ○三重県立看護大学:宮崎つた子・水谷あや・上杉佑也 |
| | 13時～14時 | 各論③「子どもの病気・事故予防」 | ・子どもの病気, 事故予防 | ○かとう小児科:加藤正彦医師 |
| | 14時～16時 | 演習①「概論①②より」 | ・衛生管理 ・事故予防 ・育児の手法 | ○三重県立看護大学:宮崎つた子・水谷あや・上杉佑也○名張市役所子ども部健康支援室(保育士・保健師・助産師) |
| 6月15日 (月) | 9時～10時 | 各論④「対応の工夫を要する子ども」 | ・対応の工夫を要する子ども | ○名張市役所子ども部(発達支援センター保健師) |
| | 10時～11時 | 各論⑤「子どもの食事と栄養」 | ・子どもの食事と栄養 | ○名張市役所子ども部(管理栄養士) |
| | 11時～12時 | 各論⑥「子どもの生活とあそび」 | ・子どもの生活とあそび | ○名張市役所子ども部(こども支援センター保育士) |
| | 13時～14時 | 専門①「地域型保育の概要/ファミリーサポートセンターの概要」 | ・地域型保育の概要 ・ファミリーサポートセンターの概要 | ○名張市役所 子ども部 |
| | 14時～16時 | 専門②「地域型保育の保育内容・ファミ | ・地域型保育の保育内容 ・ファミリーサポートセン | ○名張市役所子ども部 |

| | | リーサポートセンターの援助内容」 | ターの援助内容 | |
|--------------|----------------|----------------------------------|---|---|
| 6月21日 (日) | 9時～ 10時30分 | 専門③「地域型保育、ファミリーサポートセンターの運営」 | ・地域型保育の運営 ・ファミリーサポートセンターの役割と心得 | ○名張市役所子ども部 |
| | 10時30分～ 12時 | 専門④「地域型保育、ファミリーサポートセンターの保護者対応」 | ・地域型保育、ファミリーサポートセンターにおける保護者対応 | ○名張市役所子ども部 |
| | 13時～15時 | 専門⑤「地域型保育、ファミリーサポートセンターの援助活動の実際」 | ・地域型保育の実際（見学について） ・ファミリーサポートセンターの援助活動の実際 | ○名張市役所子ども部 |
| 6月22日 (月) | 10時～12時 | 各論⑦心肺蘇生法 | ・心肺蘇生法 | ○名張消防署 |
| | 13時～15時 | 各論⑧名張市の制度について | ・市子ども子育て事業 ・市母子保健事業 ・名張版ネウボラについて | ○名張市役所子ども部・健康支援室 |
| | 15時～17時 | 演習②子育て支援座談会 | ・グループ討議と発表 | ○三重県立看護大学：宮崎つた子・小池敦・水谷あや・上杉佑也・○名張市役所 子ども部・健康支援室 |

Ⅲ．活動の結果と評価

本事業は、「子ども・子育て支援新規制度」の指定研修であり、政策にマッチした地域貢献事業であったと思われる。具体的な地域貢献内容については、①本学の専門性の活用、②地域行政との連携の2点は達成できた。

本年度の事業の数値目標としては、①事業企画依頼1件（目標：1件以上）、②子育て支援員研修「基礎研修」3内容（目標：1内容以上）実施、③子育て支援員研修「専門研修」5内容（目標：1内容以上）実施、④子育て支援員研修「総合演習」9内容（目標：1内容以上）実施、⑤一般市民の参加者延べ1053名（目標：延べ人数200人以上）の全てにおいて達成している。

Ⅳ．今後の課題および今後に向けての計画

本事業は、「子ども・子育て支援新規制度」の指定研修であり、地域や行政の特性やニーズにあった事業であったが、以下の課題の検討が必要と思われる。

【具体的な事業課題】

- ①依頼行政（市町）と研修会開催までの地域の特性や方針について十分な協議が必要。
- ②事業評価には、実施後の経年的評価も視野に検討していくことが必要。

今年度、具体的な地域貢献内容に計画していた3つ目の「地域で子育て支援および社会的養護への貢献」については十分な取り組みができなかった。今後は、名張市と研修会参加者の子育て支援担い手としての活動評価も行っていきたい。

5. 在日外国人の子育て支援交流事業

担当者：宮崎つた子、水谷あや

【事業要旨】

本事業は、外国籍の母親や家族が、異文化・言語の違う日常生活で、子どもの成長や健康、教育等の不安を少しでも軽減できるように三重県内の行政と連携して在日外国人の子育て支援交流会を計画した。

【地域貢献のポイント】

本事業は、外国籍の母親や家族を中心に交流会を開催し、日常生活で抱えている不安の軽減につながる地域での子育て支援、社会的養護への一助となると考える。さらに、外国籍の母親および家族の子どもの健康や教育等で困っている事や生活の現状を把握することで、外国籍の子育て支援の在り方を検討する機会となる。

I. 活動計画

平成 27 年 5 月～ 8 月 教育委員会等の関係団体への情報収集
10 月～12 月 協力・連携団体と交流会開催に向けての調整
平成 28 年 1 月 外国籍の母親や家族との交流会開催
2 月 参加者の感想およびヒヤリング
協力・連携先との検討・反省会実施
3 月 全体集計終了

II. 活動の実際および経過

1. 外国籍の母親や家族の子育て支援に関する情報収集

教育委員会との検討会を 1 回（目標：1 回以上）実施、2 校の学校関係者との情報交換を実施した。外国籍の母親や家族の異文化、言語の違う生活での不安に対する具体的な支援の現状の情報収集を行い、以下の結果が得られた。

①地域全体での支援

地域で開催している日本語教室等の機会を活用する交流会は、ニーズもあり、通訳やボランティア関係者の協力が得られやすい環境である。今年度は、これらの情報を踏まえ、日本語教室等の機会を活用して交流会を企画していくこととした。

②各対象者への個別支援

各校で一人しかいない国籍の母親（家族）や日本語が全く理解出来ない母親（家族）へは個別対応のニーズはある。しかし、情報収集を進めるにあたり以下の課題が明らかになった。①母国語が様々である、②母国語の通訳等の人材が必要、③言語以外の個々の支援内容が多岐にわたる、などである。今後、在日外国人の子育て支援交流事業開催には、対象者の把握、必要条件や学校関係者との連携が重要であることが明らかとなり、次年度も継続して検討していくこととした。

Ⅲ. 活動の結果と評価

1. 開催日と開催人数

平成 28 年 1 月 23 日（土）18 時 00 時～20 時 30 分、高茶屋市民文化センターで開催。参加者 12 名、通訳ボランティア 2 名（ポルトガル語・中国語）、教育委員会関係者 4 名、学生ボランティア 1 名。母親や家族が日本語教室や交流会に参加している間、子どもの託児・学習援助をしている学生ボランティア 4 名。



写真 1. 交流会の様子①



写真 2. 交流会の様子②

写真 1 は、ブラジル人の母親がポルトガル語で話す内容を通訳のボランティアの方が説明をしている様子である。今回の交流会では、ポルトガル語と中国語のボランティア、教育委員会の方が随時通訳の支援を行った。また、学生ボランティアより、現在、幼稚園・小学校に通っている子どもの在日外国人の母親のインタビューから得られた内容を報告した。

参加者からは、日本での子育てで一番不安なのは、「病院受診の時」と答えた人が多かった。特に「子どもの体調が悪い時に、子どもの状態を説明できない」、「病院の人から言われる内容が分からない」等の話が多かった。

その他にも、学生ボランティアの報告を聞き、「私たち（在日外国人の母親や家族）の不安を気にかけてくれる医療関係者がいる事を知って嬉しい」、「私たちの不安を分かってくれる（病院で働いている）人が増えてほしい」などの声が聞かれた。

Ⅳ. 今後の課題および今後に向けての計画

今年度の情報から「母国語が様々である」、「母国語の通訳等の人材が必要」などの対応が課題となった。次年度は、これらの課題を踏まえながら、今年度同様に日本語教室等の開催団体の協力を得ながら計画をしていく。開催にあたっては、地域での支援内容や方法について継続して情報を得ながら、支援の事業内容の改善を行っていく。さらに、今後は交流会の開催にとらわれず、在日外国人の子育てに必要な支援のあり方を検討していく。

Ⅱ. みえ看護力向上支援事業

A. 看護研究

1. 看護研究支援

担当者：看護研究支援事業登録教員、地域交流センター

【事業要旨】

看護研究についての支援を希望する県内の医療機関および個人からの依頼を受け、看護研究の指導を行う。支援の内容は、一施設全体の看護研究を支援する「施設単位看護研究支援」、看護研究のテーマ単位で支援する「テーマ別看護研究支援」、看護研究のプロセスの一部を支援する「看護研究ワンポイントレッスン」、各医療機関等で行う看護研究発表会での講評・審査を行う「看護研究発表会支援」である。看護研究の基礎講座「初学者のための看護研究」については別に述べる。

【地域貢献のポイント】

看護職者が日常の看護における問題を課題として看護研究を行うことは、職業人としての意識を高め、看護の質の向上につながる。本事業により地域医療機関の看護職者の研究意欲を高めるとともに研究遂行能力や研究的思考を養い、地域の人々に対しよりよい看護を還元できるものと期待される。

I. 活動計画

＜数値目標＞ それぞれ過去3年間の平均受講件数を維持する。

1. 施設単位看護研究支援：3件
2. テーマ別看護研究支援：1件
3. 看護研究ワンポイントレッスン：2件
4. 看護研究発表会支援：3件

＜実施計画＞

1. 「施設単位看護研究支援」「テーマ別看護研究支援」

平成27年1月：上記看護研究支援の募集要項を県内各医療・福祉機関等に送付し、支援希望を募る。（2月末締め切り）

3月：支援希望のあった施設や個人に対し、全教員から支援担当者を募集する。双方の条件が合致したら実施に向けて調整を進め、支援を開始する。

2. 「看護研究ワンポイントレッスン」「看護研究発表会支援」

平成27年4月：上記看護研究支援について全教員から担当者を募集し対応可能な支援内容を確認する。

5月：県内各医療・福祉機関等へ募集要項を送付し、支援希望を募る。（11月末締め切り）

研究支援の申込み内容と教員の支援可能なテーマを照合し、条件が合致したら実

施に向けて調整を進め支援を開始する。

II. 活動の実際および経過

1. 「施設単位看護研究支援」「テーマ別看護研究支援」
 - 1) 上記看護研究支援の募集の結果、「施設単位看護研究支援」に3施設から4件、また「テーマ別看護研究支援」には7件の応募があった。これらについて全教員から担当者を募り、各担当教員を決定した。
 - 2) 4月に依頼者側に担当教員の決定を通知し、日時については直接双方が相談して実施した。
2. 「看護研究ワンポイントレッスン」「看護研究発表会支援」
 - 1) 「看護研究ワンポイントレッスン」に7名、「看護研究発表会支援」に9名の教員の登録があった。
 - 2) 「看護研究ワンポイントレッスン」「看護研究発表会支援」「その他の講師派遣」の案内をまとめたパンフレットを5月に県内各医療・福祉機関に送付した。
 - 3) 「看護研究発表会支援」に2施設から3件、「看護研究ワンポイントレッスン」に2件の依頼があり、登録された教員と調整して実施した。

III. 活動の結果と評価

各看護研究支援の実績を表1に示す。

実施件数はほぼ例年並みであったが、今年度はテーマ別研究支援の依頼が増加し、県内の看護研究のレベルアップに一層貢献できたと考える。

[表1]平成27年度看護研究支援の実施状況

| No. | 分類 | 依頼者所属施設 | 担当教員 |
|-----|----------------|--------------|-------|
| 1 | 施設単位看護研究支援 | 伊勢赤十字病院 | 大村佳代子 |
| 2 | 施設単位看護研究支援 | 伊勢赤十字病院 | 長谷川智之 |
| 3 | 施設単位看護研究支援 | 県立総合医療センター | 玉田 章 |
| 4 | 施設単位看護研究支援 | 県立志摩病院 | 中西貴美子 |
| 1 | テーマ別看護研究支援 | 松阪市民病院 | 脇坂 浩 |
| 2 | テーマ別看護研究支援 | 松阪市民病院 | 岡本恵里 |
| 3 | テーマ別看護研究支援 | 松阪市民病院 | 竹本三重子 |
| 4 | テーマ別看護研究支援 | ナーシングホームもも桑名 | 大越扶貴 |
| 5 | テーマ別看護研究支援 | 総合心療センターひなが | 脇坂 浩 |
| 6 | テーマ別看護研究支援 | 済生会松阪総合病院 | 竹本三重子 |
| 7 | テーマ別看護研究支援 | 遠山病院 | 大西範和 |
| 1 | 看護研究発表会支援 | 伊勢赤十字病院 | 長谷川智之 |
| 2 | 看護研究発表会支援 | 伊勢赤十字病院 | 永見桂子 |
| 3 | 看護研究発表会支援 | 松阪市民病院 | 中西貴美子 |
| 1 | 看護研究ワンポイントレッスン | 県立こころの医療センター | 浦野 茂 |
| 2 | 看護研究ワンポイントレッスン | 三重県赤十字血液センター | 岡本恵里 |

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

本学の看護研究支援については徐々に依頼件数が増加してきており、各医療機関や看護職者に認知されつつあると感じられる。

今年度、行政や市町村の保健師職と情報交換する機会をもち、その中で看護研究支援のニーズが高いことがわかった。今後は保健師職にも周知できるよう、広報の内容や広報先を検討していく必要がある。

2. 遠隔配信—初学者のための看護研究—

担当者： 初学者のための看護研究（遠隔配信）登録教員

運営協力：株式会社ミエデンシステムソリューション

【事業要旨】

看護職者に対する看護研究の基本となる講義の実施を通して、看護研究の基礎力を育成し、看護の質の向上に資することを目的とする。テレビ会議システムを利用して、地理的条件から来学が困難な遠隔地の看護職者を対象とした1日1講義7日間の講座を開講する。

【地域貢献のポイント】

三重県内の看護職者を対象とした看護研究の基礎講座を遠隔配信することにより、看護研究についての知識・技術の向上をめざす。参加者が本講座での学びを自身の研究への取り組みに活かすとともに、看護研究発表会での発表等を行うことにより所属施設の研究意欲を高める契機ともなる。

I. 活動計画

＜数値目標＞

過去3年間の「初学者のための看護研究」の平均受講者数（延べ400名）を維持する。

＜実施計画＞

1. 研修プログラム作成と広報

平成27年3月～4月：プログラム作成に当たり全教員より講義担当者を募集する。

4月：担当教員を決定後、日程・内容を確認し、研修プログラムを作成する。

5月：配信先施設とその近隣施設に対して講座の案内を送付し、受講者を募る。

2. 研修の実施

6月～9月に7日間7講義の遠隔配信授業を実施する。

II. 活動の実際および経過

研修内容は各講義とも昨年度と同じテーマとし、登録した教員の中から講義担当教員を決め、研修プログラムを作成した。（表1）

【表1】 初学者のための看護研究 研修プログラム

| | 開催日 | 時間 | 講義内容 | 担当講師 |
|---|----------|-------------|-------------------------|-------|
| 1 | 6月16日(火) | 18:15～19:45 | 看護研究を行う意義と文献の活用 | 岡本恵里 |
| 2 | 6月26日(金) | 18:00～19:30 | 研究計画の立て方と書き方 | 竹本三重子 |
| 3 | 7月10日(金) | 18:00～19:30 | 質的研究 | 浦野 茂 |
| 4 | 8月 4日(火) | 18:00～19:30 | 量的研究 | 長谷川智之 |
| 5 | 8月18日(火) | 18:00～20:00 | 統計解析(演習含む) | 齋藤 真 |
| 6 | 9月 2日(水) | 18:00～20:00 | プレゼンテーション (PPT 演習含む) | 白石葉子 |
| 7 | 9月11日(金) | 18:00～19:30 | 研究論文作成 | 脇坂 浩 |

配信先は県立総合医療センター、伊賀市立上野総合市民病院、尾鷲総合病院の3カ所で、それぞれの近隣施設にも参加を募った。また津市近隣に在住する看護職者が受講するにはいずれの会場も遠く不便だという声が聞かれたため、本学（配信元）での講義を聴講可能とし、10人を限度として連携協定病院に案内した。



「初学者のための看護研究」遠隔配信

III. 活動の結果と評価

1. 受講者数

本講座の受講施設は合計9施設であった。

また本学講義室での受講は2施設から10人が参加した。受講者数は延べ440人となった。(表2)

【表2】 受講施設と受講者数

| 講義内容 参加施設 ◎は配信先施設 | ① 看護 研究 を行う 意義と 文献の 活用 | ② 研究 計画書 の立て 方と書 き方 | ③ 質的 研究 | ④ 統計 解析 | ⑤ 量的 研究 | ⑥ プレゼ ンテー ション | ⑦ 研究論 文作成 | 合計 |
|---|--|------------------------------------|---------------|---------------|---------------|------------------------|-----------------|-----|
| ◎県立総合医療センター 市立四日市総合病院 小山田記念温泉病院 菰野厚生病院 | 44 | 47 | 45 | 41 | 31 | 27 | 26 | 261 |
| ◎伊賀市立上野総合市民病院 しぎさん分院上野病院 名張市立病院 | 7 | 7 | 5 | 7 | 7 | 4 | 8 | 45 |
| ◎尾鷲総合病院 紀南病院 | 14 | 6 | 10 | 7 | 9 | 18 | 9 | 73 |
| (本学での受講) 県立こころの医療センター 松阪市民病院 | 9 | 9 | 8 | 9 | 9 | 8 | 9 | 61 |
| 合計 | 74 | 69 | 68 | 64 | 56 | 57 | 52 | 440 |

2. 受講者アンケート結果

アンケート用紙は第1回目の講義資料送付と同時に配布し、最終講義の終了後各施設で回収してもらった。

◎アンケート回収数：98

1) 受講者の属性

受講者の年齢区分（図1）、経験年数（図2）、職務（図3）を示す。

年齢層、経験年数は多岐にわたり、様々な年代が基礎的な知識を必要としていることが伺われる。

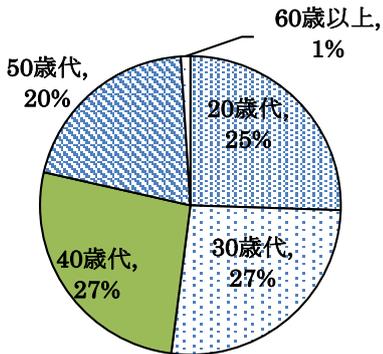


図1 年齢

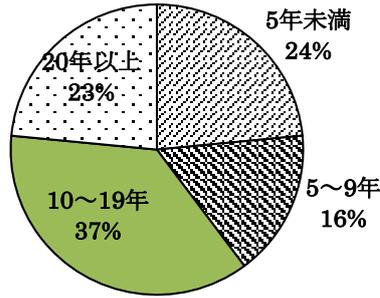


図2 経験年数

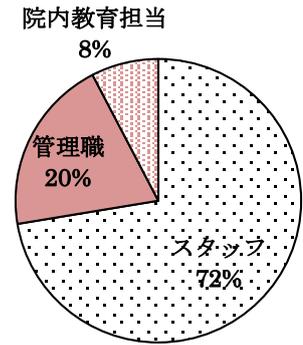


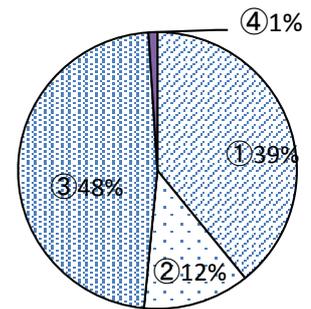
図3 職務

2) 受講動機（図4）

実際に看護研究に取り組んでいる受講者やこれから取り組みを予定している受講者が多かった。

3) 講義の理解度（図5）

テーマによって差はあるものの、全体的に80~90%の理解度であった。



- ①看護研究について学びたい
- ②人に勧められた
- ▨ ③看護研究をしている
- ④その他

図4 受講理由（複数回答）

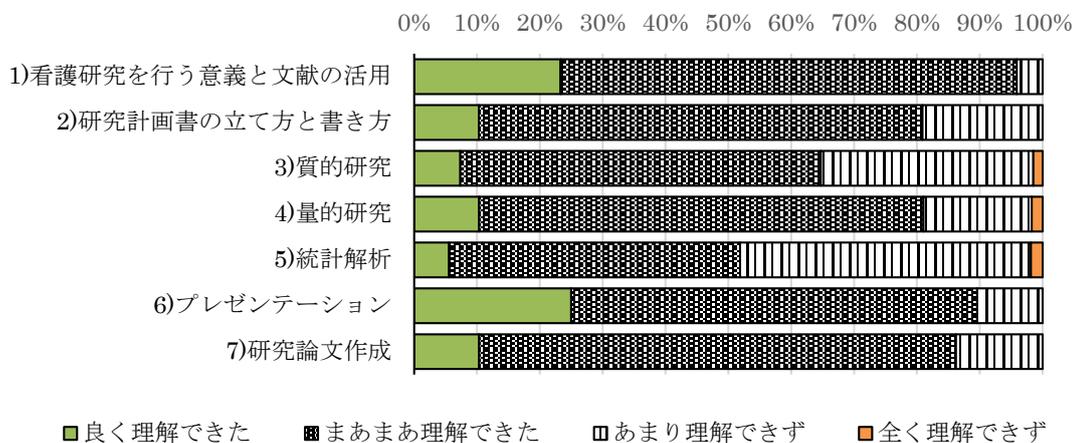


図5 各講義内容の理解

4) 研修日程・時間について (図 6)

81%が「満足」「やや満足」と回答している。また以下のような意見があった。

《研修日程・時間についての意見》

- ・ 研究計画書までは、もう少し早いと病棟での指導に活かせる。
- ・ 1回目を4月頃に聞きたかった。
- ・ 年度始まりのスタートとして考えることができた。
- ・ 場所が遠いのでいつもギリギリだった。仕事を終了してからの時間の余裕がなかった。
- ・ 開始時間がもう少し遅いと参加しやすかった。
- ・ 終了時間がもう少し早い方がいい。

5) 講座全般の満足度 (図 7)

「満足」「やや満足」の回答が88%であった。

以下のような意見があった。

《講座全般に対する意見》

- ・ プレゼンテーションの講義はこれまで受けたことがなかったので、参考になってよかった。
- ・ これまで看護研究について学ぶ機会が少なく、シリーズ化として学ぶことができてよかった。
- ・ 一人ではなかなか勉強しにくいテーマであるため、研修で事例などを交えながら考えることができ、とても分かりやすかった。
- ・ 研究の基礎がよくわかっていなかったと実感した。統計解析については難しく理解できないところもあった。
- ・ 具体的な例を挙げての説明や分かりやすい言葉で説明していただき、理解しやすかった。
- ・ 大まかな流れを理解できたと思う。しかし統計など専門的な用語を理解するのは難しいと思えた。看護研究は長い時間をかけて、いかに患者のためになるかを考えて研究するのだと思った。

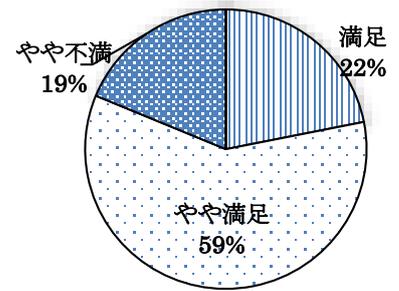


図 6 日程・時間について

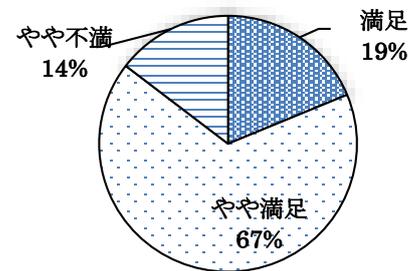


図 7 全体の満足度

IV. 今後の課題及び今後に向けての計画

看護研究の基礎講座については今年度も遠隔配信講座（初学者のための看護研究）を実施した。講義の時間帯は日勤業務が終了してから受講できるように18時開始としたが、受信施設が県内3カ所に限られているため、受講会場から遠い地域に在住する看護職者にとっては受講することが難しかったと思われる。また、本学での集合研修（看護研究の基本ステップ）は2年間休講しているが、この研修の再開を希望する声も聞かれているため、次年度以降の看護研究基礎講座については、遠隔配信講座と集合研修を毎年交互に実施したいと考えている。

B. 教員養成

1. 専任教員養成講習会

担当者：地域交流センター委員

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託を受け、5年以上看護に従事した看護職（保健師・助産師・看護師）で、看護教育に従事することを希望する者、または現在看護教育に従事している者を対象に、厚生労働省「専任教員養成講習会実施要領」および「専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン」に準拠して実施する研修で、看護教員に必要な知識・技術を習得し、看護教員として創造的に活動し得る能力を啓発することを目的とするものである。

【地域貢献のポイント】

- 看護職の養成に携わる看護教員として必要な知識・技術を習得させることにより看護教育の内容の充実向上に貢献する。
- 看護教育に携わる看護教員および看護職の教育力向上により看護の質向上に貢献する。

I. 活動計画

受講定員：30名

出願期間：平成27年2月16日（月）～3月10日（火）

実施期間：平成27年6月1日（月）～平成28年1月29日（金）

研修会場：三重県立看護大学 講義室4 他

受講料：180,000円（三重県へ納入）

II. 活動の実際および経過

1. 経緯

平成27年2月に「平成27年度三重県専任教員養成講習会募集要項」を県内の看護師等養成所および200床以上または過去に専任教員養成講習会に職員を派遣した実績を有する医療福祉機関に送付した。県外へは、委託元である三重県医療対策局地域医療推進課から送付がなされた。

受講手続締切日である平成27年3月末日までに30名（県内：23名、県外：7名）が手続きを完了した。

※三重県外内訳：福井県1、和歌山県1、奈良県1、長崎県1、宮崎県1、鹿児島県2

2. 内容

平成27年6月1日から平成28年1月29日までの8か月間にわたり、実習90時間を含む861時間の講習を実施した。

1) 教育目標

- (1) 学生のレディネスに応じた授業を工夫して展開する能力を養う。
- (2) 学校組織の一員として連携して教育環境を調整する能力を養う。
- (3) 看護教員の責務を自覚し、学生の個性を尊重して対応する能力を養う。
- (4) 自ら研鑽し、看護教育を追及する能力を養う。

2) 科目及び担当講師名

| 区分 | 教育内容 | 科目名 | 単位数 | 科目時間数 | 担当時間数 | 講師名 | 所属 | 職位 |
|----------|-------------|---------|-----|-------|--------|----------------------|-----------------|------|
| 基礎分野 | 看護教育の 基盤 | 哲学 | 1 | 15 | 15 | 早川 正祐 | 三重県立看護大学 | 准教授 |
| | | 論理学 | 1 | 15 | 15 | 齋藤 平 | 皇學館大学文学部 | 教授 |
| | | 人間関係論 | 1 | 15 | 15 | 小池 敦 | 三重県立看護大学 | 教授 |
| | | 情報科学 | 1 | 15 | 15 | 榎原 毅 | 名古屋市立大学大学院医学研究科 | 講師 |
| | | 小計 | 4 | 60 | | | | |
| 教育分野 | 教育の 基盤 | 教育原理 | 1 | 30 | 30 | 神山 榮治 | 三重大学 | 名誉教授 |
| | | 教育方法 | 1 | 30 | 30 | 佐藤 年明 | 三重大学教育学部 | 教授 |
| | | 教育心理学 | 1 | 15 | 15 | 小池 敦 | 三重県立看護大学 | 教授 |
| | | 教育評価 | 1 | 15 | 15 | 岡田 涼 | 香川大学教育学部 | 准教授 |
| | | 小計 | 4 | 90 | | | | |
| 専門分野 | 看護論 | 看護論 | 1 | 30 | 6 | 村本 淳子 | 三重県立看護大学 | 名誉教授 |
| | | | | | 3 | 大西 範和 | 三重県立看護大学 | 教授 |
| | | | | | 9 | 岡本 恵里 | 三重県立看護大学 | 教授 |
| | | | | | 9 | 辻川 真弓 | 三重大学医学部看護学科 | 教授 |
| | | | | | 3 | 豊田 妙子 | 鈴鹿中央総合病院 | 看護部長 |
| | | 看護論演習 | 1 | 30 | 12 | 若林 たけ子 | 奈良学園大学保健医療学部 | 教授 |
| | | | | | 12 | 名倉 真砂美 | 三重県立看護大学 | 講師 |
| | | | | | 12 | 坂口 美和 | 三重大学医学部看護学科 | 准教授 |
| | | | | | 12 | 豊田 妙子 | 鈴鹿中央総合病院 | 看護部長 |
| | | | | | 12 | 犬飼 さゆり | 三重県立こころの医療センター | 看護部長 |
| | 小計 | 2 | 60 | | | | | |
| | 看護学 | 看護教育論 | 1 | 15 | 15 | 箕浦 とき子 | 岐阜大学 | 名誉教授 |
| | | | | | | 箕浦 とき子 | 岐阜大学 | 名誉教授 |
| | | | | | | 小計 | 2 | 30 |
| | 看護教育課程 | 看護教育課程論 | 2 | 45 | 9 | 玉田 章 | 三重県立看護大学 | 教授 |
| 15 | | | | | 松井 妙実 | 名張市立看護専門学校 | 学校長 | |
| 6 | | | | | 大津 廣子 | 鈴鹿医療科学大学看護学部 | 教授 | |
| 3 | | | | | 大西 和子 | 鈴鹿医療科学大学看護学部 | 教授 | |
| 3 | | | | | 小松 美砂 | 三重県立看護大学 | 教授 | |
| 3 | | | | | 前田 貴彦 | 三重県立看護大学 | 准教授 | |
| 3 | | | | | 大平 肇子 | 三重県立看護大学 | 教授 | |
| 3 | | | | | 萩 典子 | 四日市看護医療大学 | 准教授 | |
| 看護教育課程演習 | | 2 | 60 | 12 | 松永 宮子 | 聖十字看護専門学校 | 教務部長 | |
| | | | | 12 | 森 和子 | 三重県厚生連看護専門学校 | 副校長 | |
| | | | | 12 | 折山 久栄 | 三重中央医療センター附属三重中央看護学校 | 副学校長 | |
| | | | | 12 | 山内 木綿子 | 三重県岡波看護専門学校 | 教務主任 | |
| | | | | | 12 | 谷中 真奈 | 津看護専門学校 | 教務主任 |
| | | | | | 12 | 植野 紀子 | 松阪看護専門学校 | 副学校長 |
| 小計 | 4 | 105 | | | | | | |

| 区分 | 教育内容 | 科目名 | 単位数 | 科目時間数 | 担当時間数 | 講師名 | 所属 | 職位 |
|--------|----------|------------|---------------|-------|--------|----------------------|--------------------------------|-------|
| 専門分野 | 看護教育方法 | 看護教育方法論 | 3 | 90 | 9 | 林 智子 | 三重大学医学部看護学科 | 教授 |
| | | | | | 21 | 田中 久美子 | 三重県厚生連看護専門学校 | 教務主任 |
| | | | | | 15 | 成瀬 美恵 | 三重中央医療センター附属三重中央看護学校 | 教育主事 |
| | | | | | 15 | 長谷川 美恵子 | 名張市立看護専門学校 | 教務主任 |
| | | | | | 15 | 志戸岡 聡子 | 松阪看護専門学校 | 教務主任 |
| | | | | | 15 | 山口 ひとみ | 四日市医師会看護専門学校 | 実習調整者 |
| | | 看護教育方法演習 | 3 | 90 | 18 | 前田 貴彦 | 三重県立看護大学 | 准教授 |
| | | | | | 18 | 豊島 泰子 | 四日市看護医療大学 | 教授 |
| | | | | | 18 | 志戸岡 聡子 | 松阪看護専門学校 | 教務主任 |
| | | | | | 18 | 田中 久美子 | 三重県厚生連看護専門学校 | 教務主任 |
| | | | | | 18 | 成瀬 美恵 | 三重中央医療センター附属三重中央看護学校 | 教育主事 |
| | | | | | 18 | 長谷川 美恵子 | 名張市立看護専門学校 | 教務主任 |
| | 看護教育実習 | 2 | 90 | 90 | 山田 節子 | 桑名医師会立桑名看護専門学校 | 副校長 | |
| | | | | 90 | 大山 直美 | 四日市医師会看護専門学校 | 副学校長 | |
| | | | | 90 | 尾崎 郁子 | ユマニテク看護助産専門学校看護学科 | 教務主任 | |
| | | | | 90 | 宮本 清子 | 聖十字看護専門学校 | 校長 | |
| | | | | 90 | 森 和子 | 三重県厚生連看護専門学校 | 副校長 | |
| | | | | 90 | 折山 久栄 | 三重中央医療センター附属三重中央看護学校 | 副学校長 | |
| | | | | 90 | 別所 幸子 | 三重看護専門学校 | 副学校長 | |
| | | | | 90 | 谷中 眞奈 | 津看護専門学校 | 教務主任 | |
| | | | | 90 | 植野 紀子 | 松阪看護専門学校 | 副学校長 | |
| | | | | 90 | 松井 妙実 | 名張市立看護専門学校 | 学校長 | |
| | 小計 | 8 | 270 | | | | | |
| | 看護教育演習 | 専門領域別看護論 | 1 | 15 | 3 | 豊島 泰子 | 四日市看護医療大学（在宅） | 教授 |
| | | | | | 3 | 若林 たけ子 | 奈良学園大学保健医療学部 | 教授 |
| | | | | | 3 | 西 泉 | 中央医療センター附属三重中央看護学校（医療安全） | 教育主事 |
| | | | | | 3 | 宮本 恵子 | 名古屋医療センター附属名古屋看護助産学校看護学科（国際看護） | 教育主事 |
| | | | | | 3 | 小野 厚子 | 伊勢赤十字病院（災害看護） | 看護師長 |
| | | 専門領域別看護論演習 | 2 | 60 | 15 | 大津 廣子 | 鈴鹿医療科学大学看護学部（基礎） | 教授 |
| | | | | | 15 | 大西 和子 | 鈴鹿医療科学大学看護学部（成人） | 教授 |
| | | | | | 15 | 長尾 淳子 | 三重中央医療センター附属三重中央看護学校（成人） | 前教員 |
| | | | | | 15 | 小松 美砂 | 三重県立看護大学（老年） | 教授 |
| | | | | | 15 | 前田 貴彦 | 三重県立看護大学（小児） | 准教授 |
| 15 | | | | | 大平 肇子 | 三重県立看護大学（母性） | 教授 | |
| 15 | | 豊島 泰子 | 四日市看護医療大学（在宅） | 教授 | | | | |
| 小計 | 3 | 75 | | | | | | |
| 看護教育評価 | 看護教育評価論 | 1 | 30 | 30 | 池西 静江 | Office Kyo-shien | 代表 | |
| | 看護教育評価演習 | 1 | 30 | 9 | 林 智子 | 三重大学医学部看護学科 | 教授 | |
| | 小計 | 2 | 60 | 9 | 井村 香積 | 三重大学医学部看護学科 | 准教授 | |
| 研究 | 研究方法 | 2 | 60 | 15 | 今井 奈妙 | 三重大学医学部看護学科 | 教授 | |
| | | | | 9 | 磯和 勅子 | 三重大学医学部看護学科 | 教授 | |
| | | | | 12 | 福録 恵子 | 三重大学医学部看護学科 | 准教授 | |
| | | | | 6 | 竹内 佐知恵 | 三重大学医学部看護学科 | 准教授 | |
| | | | | 6 | 平松 万由子 | 三重大学医学部看護学科 | 准教授 | |
| | | | | 6 | 村端 真由美 | 三重大学医学部看護学科 | 准教授 | |
| | | | | 6 | 種田 ゆかり | 三重大学医学部看護学科 | 助教 | |
| | 小計 | 2 | 60 | | | | | |

| 区分 | 教育内容 | 科目名 | 単位数 | 科目時間数 | 担当時間数 | 講師名 | 所属 | 職位 |
|---------------|-------------------------|--------|-----|-------|-------|-----------------|------------------|----------|
| 分専 野門 | 経学看 當校護 | 看護学校管理 | 1 | 15 | 15 | 松井 妙実 | 名張市立看護専門学校 | 学校長 |
| | | 小計 | 1 | 15 | | | | |
| (関連分野) その他 | 健康政策論 | | 1 | 15 | 6 | 西口 裕 | 三重県立看護大学 | 客員教授 |
| | | | | | 3 | 宮川 一夫 | 三重県健康福祉部 | 次長 |
| | | | | | 6 | 前山 和子 | 三重県立看護大学 | 地域連携特任教授 |
| | リーダーシップ論 | | 1 | 15 | 15 | 松崎 美紀 | 伊勢赤十字病院 | 看護副部長 |
| | 特別講義 | | | 6 | 3 | 早川 和生 | 三重県立看護大学 | 学長 |
| | | | | | 3 | 松月 みどり | 愛知医科大学看護学部 | 教授 |
| 小計 | | 2 | 36 | | | | | |
| 合計 | | | 34 | 861 | | | | |
| 行事等 | 開講式 閉講式 オリエンテーション | | | 9 | 9 | 阿部 敬子 鈴木 八千代 | 三重県立看護大学地域交流センター | 教育担当 |

Ⅲ. 活動の結果と評価

受講生 30 名のうち 29 名の修了を認定した。1 名は出席日数および出席時間数不足のため修了を認められなかった。

各科目は各担当講師が評価を行い、評価対象者全員 29 名が合格した。

この講習会において、教育の基礎から看護教育の実践に至るまで看護教員として必要な知識・技術を習得することができたので、今後看護教育に携わるに当たり、受講生はより質の高い教育を提供できることと思われる。これにより看護の質向上に貢献できたと評価している。

受講生のアンケート結果について主なものを記す。学習環境については「非常に満足」「満足」合わせて 100%であった。「演習や課題が重なって心身の負担が大きかった」等負担感についての記述があった反面、「充実した教育内容で質も高く勉強になった」「受け入れ態勢がしっかりしていて安心して受講できた」「多様な考え方、価値観に触れ、たくさんの刺激をもらい視野が広がった」等、評価する記述が多くみられた。

Ⅳ. 今後の課題および今後に向けての計画

この三重県専任教員養成講習会は、看護の基礎教育の向上をもって県内の看護の質向上を図るため、三重県が数年に一度実施しているもので、平成 27 年度の開講に当たり、前年度における開講準備から本学が受託した。

看護教員を主な対象としているが、教員不足の看護師等養成所が多いため、養成所の看護教員のみでは定員は埋まらず、医療機関で教育に携わっている看護職や今後看護教員となる意志のある看護職等の参加もあった。

本講習会の実施に際しては、実習の受け入れや講師の派遣など、県内の看護師等養成所との連携が不可欠であった。これまで本学は、看護師等養成所との繋がり比較的希薄であったが、今回を機会に関係性を築くことができた。今後は、これを活用し、県内の看護基礎教育の質向上に貢献できる事業を展開したい。

2. 看護教員継続研修

担当者：地域交流センター委員

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託を受け、看護師等養成所の看護教員の資質向上に向けた研修システムを構築し、研修を実施するものである。

看護教員の成長段階に応じて求められる知識・技能の習得が可能な研修システムを構築することにより、看護基礎教育の内容向上を図り、看護の質向上に貢献するものである。

【地域貢献のポイント】

- 看護教員の資質向上により看護教育の内容の充実・向上に貢献する。
- 看護教員の体系的な研修の実施を可能とすることで、看護基礎教育の質向上による看護の質向上に貢献する。

I. 活動計画

看護師等養成所において看護の基礎教育に携わる教員に対する研修は、三重県が実施している年に1回の集合研修のみであり、看護教員のキャリアアップに結びついていないのが現状である。看護教員の資質向上のためには、継続した研修が必要であり、新人、中堅、ベテラン等、看護教員の成長段階に応じた適切な研修が求められている。

本事業では、看護教員の資質向上に結びつく研修システムの構築とともに看護教員のキャリアアップおよび教員ラダーの必要性について理解促進を図る研修を実施する。

II. 活動の実際および経過

本事業の推進のため、三重県看護教育指導員、看護師等養成所教員、有識者を構成員とする「看護教員継続研修プロジェクト委員会」を立ち上げ、研修の実施・看護教員ラダー作成に取り組むこととなった。

1. 研修システム構築・ラダー作成

平成 27 年 12 月 21 日 先進地視察 広島市立看護専門学校視察
平成 28 年 2 月～3 月 看護教員継続研修プロジェクト委員会開催

2. 研修の実施

平成 28 年 2 月 21 日 看護教育における継続研修の必要性について
「看護の教育と臨床の関係」聖路加国際大学長 井部俊子氏
平成 28 年 3 月 19 日 看護教員のラダーの必要性および活用方法について
「自分育てひと育て～看護教育実践のための看護教員 FD 活用～」
広島市立看護専門学校副校長 堀百合子氏

Ⅲ. 活動の結果と評価

県からの委託が 12 月下旬であったため、事業進行中であり、現時点での評価はできない。

Ⅳ. 今後の課題および今後に向けての計画

県内の看護の質向上のためには、看護の基礎教育の充実・質向上が不可欠である。

県内の看護師等養成機関の定員 995 名のうち、大学は 360 名に留まり、多数を看護師等養成所が占める。加えて、看護師等養成所の卒業生の県内就職率は高いため、看護師等養成所における看護教育内容の充実および看護教員の資質向上は、県内の看護師等の資質向上に結びつく。

本学も看護師等の養成を担う教育機関として、県内の看護師等養成所との連携だけでなく、三重県看護協会および三重県と連携し、県内の看護基礎教育の質向上に向けた事業を展開することにより看護の質向上に貢献したい。

C. 看護実践

1. 新人助産師の臨床実践能力育成のための研修体制構築

担当者： 永見桂子、大平肇子、二村良子、岩田朋美、松本亜希、堂本万起

【事業要旨】

周産期医療の高度化、医療安全に対する意識の高まりなど、人々のニーズの大きな変化を背景に、周産期医療の現場で必要とされる臨床実践能力と看護基礎教育で修得する看護実践能力の間に乖離が生じている実態を認めない。三重県では、努力義務化された新人看護職員研修の導入・実施促進による助産師の離職・県外流出防止、資質向上が急務となっている。

本事業は、厚生労働省策定の新人看護職員研修ガイドラインにおける助産技術を支える要素「母子の医療安全の確保」、「妊産褥婦および家族への説明と助言」、「的確な判断と適切な助産技術の提供」を視点におき、三重県内の医療施設で働く新人助産師のための卒後研修体制を構築し、臨床実践能力育成を支援することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

1. 卒後教育プログラムを通じて、三重県内の医療施設で働く新人助産師の学習ニーズに応え、臨床実践能力育成を支援することにより、キャリアディベロップメントに資する。
2. 三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力を育成することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

I. 活動計画

平成 23～26 年度の 4 年間、三重県委託事業「三重県新人助産師合同研修事業」を受託し、厚生労働省策定の新人看護職員研修ガイドラインにおける助産師が就労後 1 年間で到達すべき助産技術の到達目標の達成、助産技術を支える要素および技術の修得に向けた支援を試みた。その結果、新人助産師は、助産に関する知識・技術の修得・向上だけでなく、助産師同士の交流を深め、助産師として働くモチベーションの維持につながる研修を望んでいることが明らかとなった。

そこで、平成 27 年度も引き続き、三重県委託事業「三重県新人助産師合同研修事業」を受託し、みえ看護力向上支援事業の一環として本事業を継続することとした。過去 4 年間の新人助産師合同研修における調査結果にもとづき、より新人助産師のモチベーションを高め、専門職者として積極的・主体的に自己研鑽し続ける自己教育力醸成につながる研修内容、方略を検討する。

<重点課題>および<数値目標>

1. 三重県内の医療施設で働く新人助産師のニーズ調査結果を平成 27 年度の卒後教育プログラムに反映できる。
2. 企画した新人助産師合同研修に県内新人助産師 30 名が参加し、5 日間の研修にお

- いて平成 23～26 年度の研修参加率（平均 90.0%）の水準を確保することができる。
3. 継続的な卒後教育プログラム提供に向け、三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。
 4. 卒後教育プログラムにより参加者同士の交流を深めることができ、研修実施後のアンケート結果において、自施設や他施設の助産師活動の現状や課題を共有できた、専門職者として研鑽し続けたいなどの評価が得られる。

II. 活動の実際および経過

1. 卒後教育プログラムの企画・運営・評価

6 月に県内医療施設（病院・診療所 86 施設、助産所 30 施設）に開催案内を送付し、38 名（定員 30 名）の応募があり、受講者は 38 名であった。平成 27 年 10 月 24 日（土）、11 月 14 日（土）、12 月 19 日（土）、平成 28 年 1 月 9 日（土）、1 月 31 日（日）の 5 日間の研修とした。

過去 4 年間の新人助産師合同研修に参加した新人助産師のニーズ調査をもとに、今年度も助産技術を支える 3 つの要素について臨床現場での助産活動をより焦点化できるよう演習を通して実践的・段階的に学ぶとともに、参加者同士の体験共有とネットワークづくりの一助として講師陣を交えたディスカッション・交流の機会を設けた。特に熟達助産師による「周産期のフィジカルアセスメント」、「助産師が行う胎児心拍数モニタリング」、「ハイリスク妊産婦の看護」、新生児集中ケア認定看護師による「ハイリスク新生児の看護」など新人助産師にとってモデルとなりうる助産師等看護専門職者と出会い専門的・実践的活動への役割意識を高めることをめざした研修内容とした。「助産師が行う胎児心拍数モニタリング」、「ケースシナリオ（早期新生児）を用いたグループディスカッション」、「事例にもとづく助産師の判断と看護実践」などグループワークを多く取り入れ、ディスカッションすることで、自らの課題に向き合い、参加者同士の連帯感を高める機会とした。

なお、助産師課程選択生のべ 5 名の学部生がボランティアとして参加し、卒業生（県外就業の新人助産師）5 名が聴講した。

2. 卒後教育プログラム提供のための資源確保

平成 27 年度助産師養成確保に関する懇話会（7 月 27 日開催）に参加し、平成 26 年度委託事業の評価および平成 27 年度委託事業の概要を報告した。継続的な卒後教育プログラム提供に向け、三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を図り、企画および運営に関する協力を得た。

III. 活動の結果と評価

受講者 38 名の研修参加率は、初日 92.1%、2 日目 92.1%、3 日目 100%、4 日目 92.1%、最終日 94.7%、5 日間の研修参加率の平均は 94.2% であり、平成 23～26 年度の研修参加率（平均 90.0%）の水準を確保することができた。受講者のうち看護師としての臨床経験のない者 26 名、看護師としての臨床経験を有する者 9 名、不明 3 名であり、助産師教育機関を卒業後初めて就業する者が過半数を占める状況となっている。なお、看護師としての臨床経験年数は 1 年～7 年であった。

研修開始前には、新人助産師は「助産に関する新しい知識・より深い知識の獲得」、「アセスメント能力の獲得と自らの判断にもとづく助産ケア」など助産実践能力向上のみならず、「助産師としてのやる気の醸成」、「助産師である自らを振り返る機会」、「他施設で働いている助産師との交流」といった日常業務の中での悩みの解決、助産師として働くモチベーションの維持を合同研修に期待していることがうかがわれた。

研修修了時には、研修内容についてよいと回答した者 21 名 (56.8%)、まあまあよいと回答した者 14 名 (37.8%) であった。その理由は、「いろいろな分野における学習を深められた」「実践につながる内容であった」、「臨床で活動されている医師、看護師の声が直接聞けた」、「同じ新人助産師と関わることができた」などであった。特に「母乳育児支援」、「新生児蘇生技術」、「事例検討」、「ハイリスク妊産婦・新生児の看護」などへの肯定的回答が多かった。「事例検討」についてよいと回答した者は 18 名 (48.6%)、まあまあよいと回答した者は 15 名 (40.5%) であり、その理由として「一人では考えられないようなことを意見交換できたので良かった」、「自分の中でも納得していない部分にアドバイスもらえて良かった」、「いろいろな施設の話やみんなが悩んでいることを知ることができて良かった」などであった。研修を通して「母乳育児」、「エビデンスに基づく実践」、「アセスメント能力」など助産師としての新たな課題を得ていた。今後必要だと考える卒後教育として「実践を取り入れた教育」、「今回のような研修の継続」、「同じキャリアの助産師対象の研修」などが挙げられた。

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

平成 27 年 8 月より、日本助産評価機構による「助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）レベルⅢ（自律して助産実践ができる助産師）」の認証評価制度が開始された。今回の合同研修に参加した新人助産師は、1 年目だけでなく、2 年目以降も自らの助産実践能力を高めるためには継続的な自己研鑽が必要だと痛感していることが伺えた。新人助産師がこれから臨床経験を重ね、自律して助産実践ができる助産師として成長していくためには、倦むことなく専門職者として自己研鑽し続ける自己教育力を醸成することが課題である。みえ看護力向上支援事業の一環として継続的に取り組んできた本事業が三重県の助産師の質保証に資する意義は大きく、今後も助産師の成長過程に応じた積極的・主体的な自己研鑽につながる研修を企画し、助産ケアの質向上に努めていくことが課題である。

研修初日



「周産期のフィジカルアセスメント」の
演習風景

研修3日目



「新生児蘇生技術」の演習風景

研修5日目



「母乳育児への支援の実際」の演習風景

2. 周産期における母子・家族支援のための 臨床助産師の看護実践能力育成

担当者： 永見桂子、大平肇子、二村良子、岩田朋美、松本亜希、堂本万起

【事業要旨】

助産師には妊産褥婦やその家族の多様なニーズに応じ、エビデンスに基づいた最良で有効なケアを実践していくことが求められており、周産期医療の現場が多くの課題を抱える中で、その特性に応じた役割と実践能力が問われている。平成 26 年 12 月現在、三重県においては、都道府県別にみた人口 10 万対就業助産師数が 21.2 人（全国平均 26.7 人）、全国順位 46 位である。平成 24 年に平成 14 年以降平成 22 年まで続いていた最下位を脱したものの、慢性的な助産師不足、地域特性に基づく助産師の偏在などの課題を抱えている。

三重県では、周産期医療の中心的役割を担う中堅助産師や指導的立場にある助産師の県内定着・継続就業支援が喫緊の対策として求められており、助産師の学習ニーズや成長過程に応じた研修体制を整備し、実践能力獲得を支援していくことが課題である。

本事業は、三重県内の医療施設で働く中堅助産師および指導的立場にある助産師を対象に卒後教育プログラムを提供することにより、周産期の母子とその家族を対象とした臨床実践能力育成を支援することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

1. 卒後教育プログラムを通じて、三重県内の医療施設で働く中堅助産師および指導的立場にある助産師の学習ニーズに応え、臨床実践能力や助産師を育てる力の獲得を支援することにより、キャリアディベロップメントに資する。
2. 三重県内の医療施設で働く中堅助産師および指導的立場にある助産師の臨床実践能力や助産師を育てる力の獲得を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

I. 活動計画

平成 21～23 年度には、三重県委託事業「院内助産所・助産師外来開設のための助産師等研修事業」を受託し、中堅以上の助産師は、臨床現場において助産師としての独自性・専門性を発揮するためには、助産診断能力、情報リテラシー能力、コミュニケーション能力、教育指導能力、ケアチームにおける連携・協働・調整能力等を高めることが課題であると認識していることが明らかとなった。平成 24～26 年度には、そうした中堅以上の助産師のニーズを踏まえ、三重県委託事業「助産師（中堅者・指導者）研修」を受託し、中堅者研修（助産師経験 5～15 年の助産師対象）および指導者研修（助産師経験 15 年以上の指導的立場にある助産師対象）を実施した。

平成 27 年度も引き続き、三重県委託事業「助産師（中堅者・指導者）研修」を受託し、

みえ看護力向上支援事業の一環として本事業を継続することとした。過去3年間の中堅者・指導者研修の2コース制のメリット・デメリットを分析し、より助産師の積極的・主体的な自己研鑽へとつながる研修内容、方略を検討する。

<重点課題>および<数値目標>

- 1) 三重県内の医療施設で働く助産師のニーズ調査結果を平成27年度の卒後教育プログラムに反映できる。
- 2) 企画した中堅者研修と指導者研修にそれぞれ対象とする助産師20名が参加し、3日間の研修において95%以上の出席率を確保できる。
- 3) 継続的な卒後教育プログラム提供に向け、三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。
- 4) 卒後教育プログラムにより参加者の臨床実践能力や助産師を育てる力を高めることができる。

II. 活動の実際および経過

1. 卒後教育プログラムの企画・運営・評価

1) 中堅者研修

6月に県内医療施設(病院・診療所86施設、助産所30施設)に開催案内を送付し、17名(定員20名)の応募があり、受講者は17名であった。9月6日(日)、10月3日(土)、10月25日(日)の3日間の研修とし、2日目は指導者研修との合同企画とした。

研修初日には、「グリーンケアとケアに関わる助産師を支える」、「周産期のメンタルヘルスケア—専門看護師の活動の実際—」など、周産期におけるグリーンケアの実際や母性看護専門看護師の専門的活動への理解を深めることにより、助産師を育てること(後輩教育)へのモチベーションを高めることを目指した。

2日目には、「産婦人科診療ガイドラインに基づく緊急時の対応」、「事例に基づく助産師の判断と看護実践」を合同企画とし、今年度より開始された日本助産評価機構による助産実践能力習熟段階(クリニカルラダー)レベルⅢの認証申請に活用できる研修内容とした。

最終日には「不妊症看護認定看護師の活動の実際」、「中堅助産師に求められる助産実践能力」など、不妊症看護認定看護師の活動を知り、リーダーシップ・マネジメントについて学ぶことにより、今後、助産師としてどう活動していくか、自らの課題に向き合い、参加者同士の連帯感を深める機会とした。

2) 指導者研修

6月に県内医療施設(病院・診療所86施設、助産所30施設)に開催案内を送付し、18名(定員20名)の応募があり、受講者は18名であった。9月19日(土)、10月3日(土)、11月1日(日)の3日間の研修とし、2日目は中堅者研修との合同企画とした。合同企画とした研修内容は上述した通りである。

研修初日には、「助産師に求められるリーダーシップとは」、「自分のめざす助産師像をわかちあう」など、昨年度の中堅者研修初日で台風による中止を余儀なくされ、要望の高かった内容を盛り込み、助産師を育てるうえでの自らの役割について考える

機会とした。

最終日には「日本産科婦人科学会新基準による分娩時 CTG の読み方と胎児管理方法」、新生児集中ケア認定看護師による「ハイリスク新生児の看護—周産期母子ケアの連携と協働—」など、中堅者研修同様、これまで要望の高かった内容とした。

なお、両研修には助産師課程選択生のべ 13 名がボランティアとして参加した。

2. 卒後教育プログラム提供のための資源確保

平成 27 年度助産師養成確保に関する懇話会（7 月 27 日開催）に参加し、平成 26 年度委託事業の評価および平成 27 年度委託事業の概要を報告した。継続的な卒後教育プログラム提供に向け、三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を図り、企画および運営に関する協力を得た。

III. 活動の結果と評価

1. 中堅者研修

受講者 17 名の研修出席率は、初日 100%、2 日目 80.0%、最終日 93.3%であった。修了時のアンケート結果（回答者 13 名）では、期待通り 5 名（38.5%）、まあまあ期待通り 7 名（53.8%）、あまり期待通りでなかった 1 名（7.7%）であり、期待通りであった理由は、「医療面のメインである産科出血はもちろんのこと、グリーフケアや不妊といった精神面での関わりの重要性を再認識できた」、「様々な先生や看護師の実際の体験・経験を聞くことができて良かった」などであり、あまり期待通りでなかった理由は、「中堅助産師だからこそという内容ではなかったような気がする」であった。

研修内容のうち特に「グリーフケア」、「Team STEPPS（2 日目の研修内容）」への肯定的回答が多く、研修を通して「自分の仕事に対する向き合い方を振り返り、課題を明確にしたい」、「後輩の役割モデルとなれるよう、産科救急対応をメインにやっていきたい」、「管理の視点でみてみようと思う」など助産師としての新たな課題を得ていた。今後のプログラムへの要望として「NCPR（新生児蘇生法）」、「母親教室の効果的な方法」などが挙げられた。

2. 指導者研修

受講者 18 名の研修出席率は、初日 94.1%、2 日目 100%、最終日 85%であった。修了時のアンケート結果（回答者 11 名）では、期待通り 7 名（63.6%）、まあまあ期待通り 4 名（36.4%）であり、期待通りであった理由は、「CTG や NICU、リーダーシップとは、学びたい内容・充実した内容だった」、「勉強になった」であった。

研修内容については 3 日間の研修内容それぞれに対し肯定的な回答が寄せられ、特に「リーダーシップ」、「CTG」を挙げるものが多かった。研修を通して「来年度のクリニカルリーダーを受けたいと思う」、「リーダーシップをとれる人材となる」、「研修で学んだことを取り入れながら、後輩教育の見直しも考えていく」など指導者としての自己の新たな課題を得ていた。今後のプログラムへの要望は「分娩介助に関する技術“技”」、「乳房マッサージ」などであった。

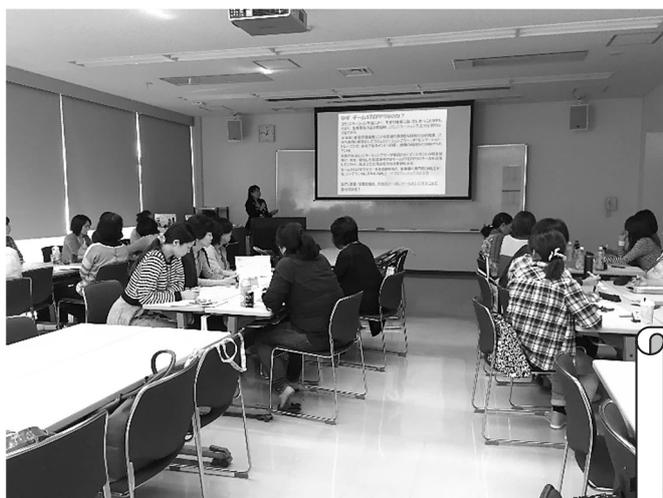
なお、研修初日に助産師学校教員 1 名が聴講した。

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

今回、子どもの行事の開催日との重複や勤務調整の困難さから、中堅者研修、指導者研修ともに研修出席率が95%を下回る日もあったが、概ね受講者の研修参加への意欲は高く、研修を通して自らの新たな課題を見出していた。

平成27年8月より、日本助産評価機構による「助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）レベルⅢ（自律して助産実践ができる助産師）」の認証評価が開始され、研修開始時点で中堅者研修受講者2名、指導者研修受講者11名が申請済みであった。申請には過去5年間の研修実績が求められており、これまで本事業を通して継続的に提供してきた卒後教育プログラムも活用されたものとする。「レベルⅢ」の認証に向けては、「NCPR（Bコース）」、「CTG」、「フィジカルアセスメント」などが必須研修とされ、関連学術団体、職能団体などが主催する研修の活用が提示されている。みえ看護力向上支援事業の一環として継続的に取り組んできた本事業が三重県の助産師の質保証に資する意義は大きく、今後も助産師の積極的・主体的な自己研鑽につながる研修を企画し、助産師自身のキャリアディベロプメントのみならず、妊産褥婦およびその家族に提供される助産ケアの質向上に努めていくことが課題である。

中堅者・指導者研修2日目



「産婦人科診療ガイドラインに基づく
緊急時の対応」の講義風景

指導者研修1日目



「助産師に求められる
リーダーシップとは」の講義風景

3. 看護職を対象とした運動指導実践講座

担当者：白石葉子（責任者）、大西範和、鈴木聡美、菅原啓太、中瀬貴子

【事業要旨】

看護職者が、運動指導のために必要な知識・技術を身につけることを目的として、三重県内に就業・在住している看護職を対象として講座を開催した。講座の開催にあたっては、三重県看護協会の後援を得た。

【地域貢献のポイント】

生活習慣病の増加や高齢社会により、運動による健康の維持増進の重要性がますます高まっている。看護職は、地域で生活する人や施設で療養生活をおくる人等に最も密に関わるため、運動指導を行う立場として適している。しかし、看護師・保健師の教育過程や、職場研修において、運動指導について専門的に学ぶ機会は殆どない。近年、全国的には看護職を対象として運動に関するテーマを中心とした学会も発足しているが、三重県においては、看護職者が運動について系統的に学ぶ環境は未整備である。本講座は、看護職者に実践的な運動指導能力を身につけてもらうことにより、県民の健康の維持増進に寄与できる。

I. 活動計画

本講座は、「健康増進編（平成 27 年度）」・「健康維持・回復編（平成 28 年度）」の 2 部で構成する。年度ごとに 2 回の講座を開き、年度内の講座を全て受講した参加者には受講証を発行する。募集人数は、実技を実施することを鑑み、1 回の講座につき 10 名とする。

II. 活動の実際および経過

1. 参加者

平成 27 年度の講座に対する応募は 47 名だった。応募者の主な所属は、市町役所(健康増進課等)・保健センター、病院（総合病院、健診センター、診療所等）、老人福祉関連施設（福祉センター、入所・通所施設）、地域包括支援センター、看護専門学校であった。

2. 第 1 回目講座

1) 日時・場所

平成 27 年 11 月 29 日（日）9：30～16：20、三重県立看護大学大講義室・体育館

2) 目的

- (1) 身体活動・運動と健康との関連について理解することができる。
- (2) 身体活動・運動が、健康増進に資する効果について理解することができる。
- (3) 健康増進のために効果的な運動の種類や方法について理解することができる。
- (4) 健康増進運動を対象者に合わせて処方することができる。

(5) 有酸素運動、筋力トレーニングを安全で効果的な方法で指導することができる。

3) プログラム

- ・ 講義 1 健康と運動、セルフチェック（握力・椅子立ち上がりテスト）の評価
- ・ 講義 2 運動生理学の基礎
- ・ 講義 3 運動処方 of 基礎・運動指導の原則
- ・ 演習 1 ストレッチング
- ・ 演習 2 有酸素運動
- ・ 演習 3 筋力トレーニング
- ・ 交流会

3. 第 2 回目講座

1) 日時・場所

平成 28 年 1 月 31 日（日）9：30～16：00、三重県立看護大学・大講義室

2) 目的

- (1) 減量を目的とした運動の種類・方法・指導ポイントがわかる。
- (2) 減量を目的とした運動を安全に実施することができる。
- (3) 老年期・痛みがある人に適した運動の種類・指導ポイントがわかる。
- (4) 老年期・痛みがある人に適した運動を安全に実施することができる。

3) プログラム

- ・ 講義 1 減量を目的とした運動指導の実際（主に青年期・中年期対象）
- ・ 演習 1 青年期・中年期の運動指導の実際
- ・ 演習 2 老年期・痛みがある人の運動指導の実際
- ・ 講義 2 老年期・痛みがある人の運動指導の実際（スポーツ傷害との相違と類似点）
- ・ 意見交換会

Ⅲ. 活動の結果と評価

1. 第 1 回目

参加者は 41 名であった。皆、熱心に聴講したり、実技を行ったりしており、質問も多かった。実施後にアンケートを行った結果、講義・演習の各講座において約 90%が、「とてもよかった」「よかった」と答えていた（図 1）。「とてもよかった」が特に多かったのは、「運動生理学」「運動処方」であった。自由記載では、「セルフチェックは自分のことであるため関心が持てた」、「演習は自分自身で体験できたことが良かった」、「高齢者向きの方法を知りたかった」、「楽しかった」等の意見があった。



2. 第2回目

参加者は30名であり、プログラムの一つの項目が終了するごとに質問があるなど、熱心に聴講していた。また、ストレッチや腹筋のトレーニングでは、参加者自身が体験したことにより効果的で正しい方法の重要性を実感していた。アンケートを行った結果、講義・演習の各講座において約90%が、「とてもよかった」「よかった」と答えていた(図2)。自由記載では、「実践的な講義であり仕事に役立てることができる」、「地域の対象者から質問が多い内容についても取り上げてもらってわかりやすかった」、「介護予防についてもっと知りたい」、「自分自身が実践しなければと思った」等の意見があった。



3. その他の意見

第1回目・2回目に開催した参加者による交流会・意見交換会では、参加動機について、「市町村の保健師として従事しており、高齢者対象に運動指導することが多いが、自分が運動についての知識が少ないため」「看護師として従事しており、検診や教室等で直接対象者に指導することがあるため」「コーチングを用いているが、動機づけ等を深く学びたかったため」「保健師に従事しており、運動講座や教室を開催する際に自分自身がモデルとなれるように」などがあつた。

本講座に対する要望としては、「高齢者対象の運動指導が多いため介護予防の内容を知りたい。」「対象者の年齢、体調等の個人差が大きいいため幅広く実践できる内容を知りたい。」「もう少し運動の種類や回数など具体的実践内容を知りたい」「運動指導の評価をどのようにまとめたらよいか知りたい」「住民同士が運動を広げる活動について知りたい」などがあつた。

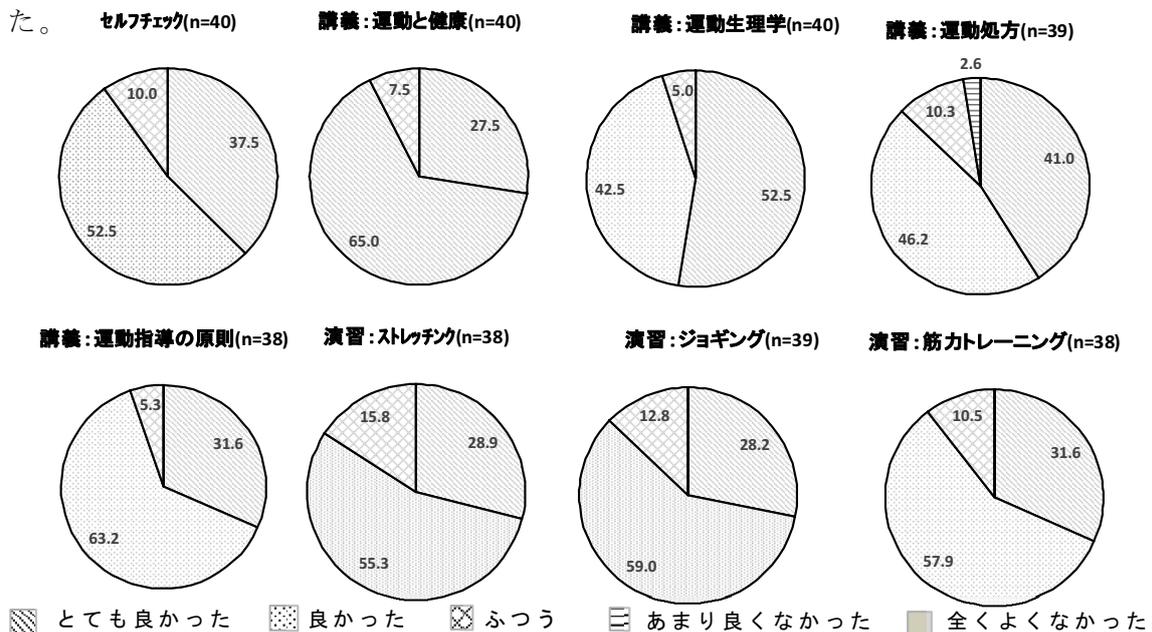


図1 第1回目講座アンケート結果(配布40名:回収率100%)

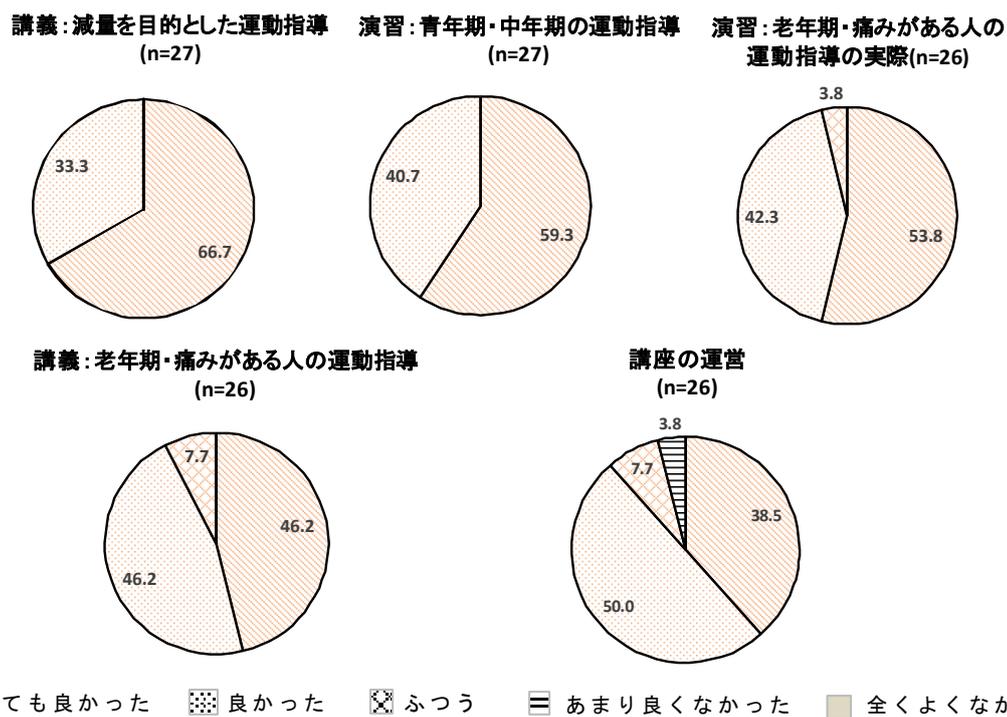


図2 第2回目講座アンケート結果（配布30名：回収率90.0%）

本講座への応募者は、当初の予定10名に対して約5倍の47名であり、看護職において運動指導の知識・技術を学ぶニーズが高いことがうかがえた。

IV. 今後の課題及び今後に向けての計画

運動指導を対象者に合わせて実施するためには、多くの知識や指導技術を身につける必要がある。本事業においては、講座の立ち上げ段階として、2年間で4回の講座を計画しているが、今後は講座の継続を視野に入れ、参加者の意見を参考にしながら、実施内容についてより専門的・実践的なプログラムになるように検討していく必要がある。

4. マネジメントラダーの活用

担当者：中西貴美子、灘波浩子

【事業要旨】

病院施設における看護管理者の重要性が増している今、マネジメント力のある看護管理者の育成は不可欠である。本事業は、看護管理者育成の院内システムとして、マネジメントラダーを構築しようとする看護部の活動を支援し、施設内での看護管理者の育成を可能とすることを目的としている。具体的には、マネジメントラダーの構築に向けて、作成・評価・運営等に対するアドバイスを行う。

【地域貢献のポイント】

看護職員教育にクリニカルラダーを取り入れている施設は年々増えているが、管理者の育成をラダーとして確立しているところはまだ少ない。現在、外部団体の看護管理者研修の利用は盛んであるが、実際に施設内での実践に結びついていないという声も多く聞かれている。本事業では、施設内で看護管理者（看護師長や主任等）を対象とするマネジメントラダーシステムの確立を支援することで、施設全体の看護の質の向上に貢献することをねらいとしている。

I. 活動計画

1. 参加病院の看護管理者の育成・教育の現状を確認し、管理者教育システムとしてのマネジメントラダーの活用について病院看護部と共通理解をする。
2. マネジメントラダーの構築を目的とする組織（ワーキンググループや委員会など）づくりを提案し、その活動を支援する。

* 重点課題

事業の初年度である今年の重点課題は、参加病院を1施設以上募り、当該施設の次年度の看護部の組織計画立案までに、マネジメントラダーについての方針を明確にし、ラダー構築のための組織の活動内容を定めることである。

II. 活動の実際および経過

1. 参加病院として鈴鹿中央総合病院を支援することとなった。看護部長と担当者との打ち合わせにおいて、当該施設の看護管理者として必要なマネジメント能力を検討し、当該施設ならではの看護管理者像を明確にしたうえで、マネジメントラダーを構築することとなった。
2. 平成28年度にマネジメントラダー構築のための委員会を立ち上げる予定であり、担当者はその委員会に参加することとなった。

Ⅲ. 活動の結果と評価

- ・ラダー構築は次年度以降であり、実際の評価も次年度以降となるが、今年度はラダー構築のための準備段階の活動であり、当初の課題は達成できた。

Ⅳ. 今後の課題及び今後に向けての計画

- ・施設主体の活動とするため、立ち上げられた委員会活動の中で、具体的な計画を立案していく予定である。次年度にラダーの項目を作成し、その後、運用方法を決定した後、試行し評価・修正していく。

5. 臨床で活かそう看護診断

担当者：脇坂浩、長谷川智之、濱崎友美、田端真

【事業要旨】

近年、病院の電子カルテシステムや看護支援システムの看護計画（看護過程）において、「看護診断（NANDA-I・NOC・NIC）」を導入している施設は増加の一途である。しかし、三重県の病院では看護診断を学ぶ機会が少なく、臨床看護師からは看護診断の習得に苦慮しているとの声が挙がっていることから、県内の看護職における看護診断研修に対するニーズは高いことが推察される。

したがって本事業では、看護診断（看護過程）を習得した教員による、講義だけでなく「事例を用いた看護計画の立案」に関する演習を行い、臨床看護師の方々が適切に「看護診断」を活用できるように支援することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

本事業の研修を受講することにより、臨床看護師が「看護診断（看護過程）」を学ぶ機会が得られ、適切な「看護診断」を展開できるようになる。

I. 活動計画

電子カルテシステムまたは看護支援システムに「看護診断」を導入している病院を対象に、「看護診断（看護過程）」の研修を開催できる（1施設以上/年）。

II. 活動の実際および経過

1. 研修の準備

三重中央医療センター看護部から、新人看護師（以下：研修参加者）を対象にした研修の依頼を受けたため、本事業の説明を行った後に、研修5週間前頃に事前課題（周術期患者（胃切除術後患者）の事例）を研修参加者に配布した（8月24日）。研修参加者は、事例に基づいた看護過程として、看護診断のデータベース（13領域の分析）、統合、看護診断（NANDA-I,NOC,NIC）を研修前に作成した。

2. 研修の開催

研修参加者47名を対象に、三重中央医療センター看護部の「看護診断研修」として、研修を開催した（平成27年9月30日13:00-16:00）。

研修内容（表1）は、看護診断の概要の説明、事例に基づく看護過程に関連したグループワーク、看護過程の模範例の紹介、自己の看護過程の振り返りという順で進行した。グループワークには、教員1名が2～3グループ（5-6名/グループ）にファシリテーターとして介入した。

看護診断（NANDA-I,NOC,NIC）の概要の説明は、依頼された病院の電子カルテシステム（看護支援システム）と最新の看護診断も含めて構成した。

Ⅲ. 活動の結果と評価

1. 研修の準備

電子カルテシステム（看護支援システム）に「看護診断」を導入している1病院に、「看護診断」の研修依頼を受けることができた。昨年度と同様の施設であったので、研修の準備は円滑に行うことができた。

2. 研修の開催

研修参加者は看護学生時に看護診断の学習経験がなかったため、本研修において看護診断の基礎を学べる機会を設けたことや、昨年度と比べて14名も多く、研修は約1ヵ月も早い日程となったが、アンケート結果から、参加者全員に満足感が得られていた（満足できた＝43%、だいたい満足できた＝57%）。研修に満足感を得られた一つの理由として、同じ課題を持つ研修参加者同士でグループワークを設けたことで、他のメンバーの意見を聞くことができたことや情報共有できたことが大きく影響していたと考えられた（アンケート結果を参照）。

Ⅳ. 今後の課題及び今後に向けての計画

本事業は2年目となるが、1年目と同様の施設からの研修しか受けることができなかった。本事業の研修方法として、複数の教員によるファシリテートを必要とするため、「日勤帯（平日）に研修を開催してほしい」という依頼側の要望への対応が難しい。次年度以降は、日勤帯に研修を開催できる方法を検討し、可能な限り多くの施設の要望に応えたいと考えている。

表1 看護診断研修の概要

研修目的：看護診断の基本を理解し、看護診断を用いて看護計画立案・実施ができる。

学習目標：看護診断とは何かを述べるができる。看護診断特定のプロセスを理解できる。

看護診断を用いて看護計画を立案できる。看護診断を用いて看護記録が行える。

事前課題：「胃切除後患者の事例」を読み、「データベース」にNANDA看護診断の13領域の主観的情報・客観的情報とパターン要約（アセスメント）を記入する。次いで、「統合」にデータベースをもとに全体像を描写して看護診断を選択する。

【タイムスケジュール】

| | |
|-------------------|---|
| 13:00～13:05（5分） | 研修の説明と講師の自己紹介 |
| 13:05～13:30（25分） | 看護診断の説明、グループワークの説明 |
| 13:30～15:20（110分） | グループワークと発表 自己紹介（5分） 各自が作成したデータベースと統合を発表（25分） 統合とNANDA-I・NOC・NICを作成（60分） NANDA-I・NOC・NICを発表（20分）※休憩は適宜 |
| 15:20～15:40（20分） | 参考例の説明 |
| 15:40～15:50（10分） | 自己の振り返り（感想を含む） |
| 15:50～16:00（10分） | アンケート記入と提出 |

アンケート結果

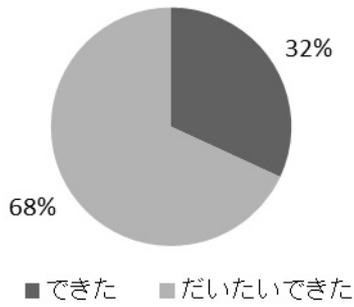


図 1 看護診断とは何か理解できたか

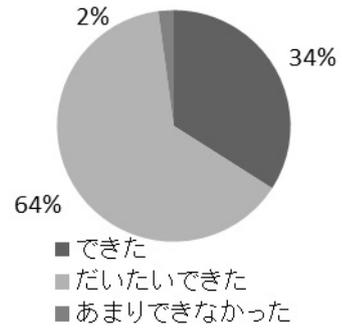


図 2 看護診断特定のプロセスについて理解できたか

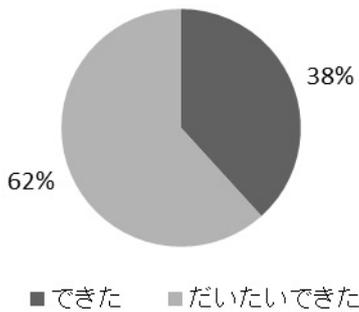


図 3 看護診断を用いた看護計画について理解できたか

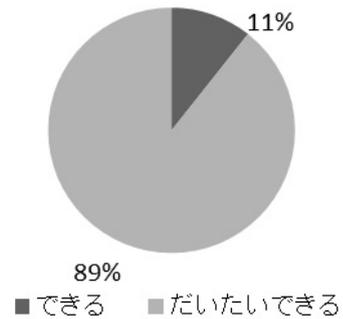


図 4 看護診断を用いて看護記録が行えそうか

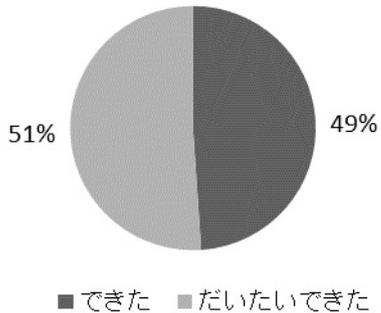


図 5 研修前に看護部教育計画書を読み、目的・目標を把握して研修に参加できたか

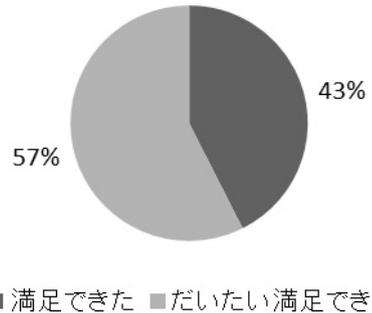


図 6 研修内容についてどのように感じたか

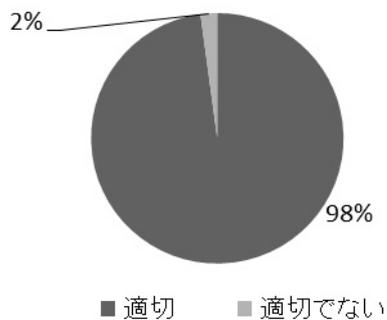


図 7 研修時期について

<研修内容に関する自由記載>

- ・学生の時にも教わったことがない NANDA を初めて知り、理解できたことが良かった。
 - ・グループワークを通して自身が気づくことが出来なかった看護問題がわかり良かった。
- (多数)

- ・グループワークを通して自身の記録を見直すことができた。
- ・グループで考えることで自分とは異なる考え方を知り、話しあいながらまとめることができた良かった。(多数)
- ・先生方に教わりながらグループワークができたことが良かった。(多数)
- ・グループで悩んでいる時に、先生に声をかけてもらえ進めることができ良かった。
- ・他のグループの意見が聞けたことで様々な考え方があることを知りよかった(多数)
- ・NIC・NOC について理解できたことが良かった。看護計画の立案を行う時に活かしたい。実際のケアにもつなげていきたい。
- ・実際に看護診断の本を開いて確認することで理解が深まった。NANDA、NIC、NOC の本の活用方法が学べて良かった。
- ・講義が分かりやすかった。(2名)今後受け持ち患者についてさらに深く考えていきたい。
- ・定義を確認する必要性が理解できた。アセスメントにより NIC・NOC が変わることが学べた。
- ・事前学習をしたことで理解が深まったと思う。(数名)
- ・研修自体が少し難しい。(数名)
- ・グループワークの時間が短い。(数名)
- ・事前課題が多いと感じた。また難しい。

<研修時期に関する自由記載>

- ・理解できる時期であり適切だと思う。
- ・入院の対応をするようになり看護計画を立案し始めているから適切だと思う。
- ・日々の受け持ち患者の看護計画の評価を行っているため、もう少し早めの時期がよい。

6. ケアをめぐる哲学カフェ —立場の違いをこえて話し合おう—

担当者： 早川正祐、浦野茂、鈴木聡美、多次淳一郎、中西貴美子、林姿穂、林辰弥

【事業要旨】

医療・福祉、また人間の生・死に関わる事柄をテーマとした哲学カフェ（哲学対話）を開催し、医療従事者・患者・患者家族・一般市民が、ケアをめぐる人間の複雑で一筋縄ではいかないあり方について、共同で探究できる場をつくる。そして共同探究の場を継続的に設けることによって、各人の考え方の違いを尊重しつつ相互理解の促進を図ることになる。この取り組みを地道に重ねていくことが、結局は、豊かなケア文化の創生につながるのではないかと考える。

【地域貢献のポイント】

医療従事者・患者・患者家族・一般市民がそれぞれの立場をこえて、医療・福祉をめぐる問題について対話をする場を設ける。より望ましい医療・福祉の実現にとってこういった共同探究の場は不可欠だが、実際にはほとんど見られないように思える。本事業はこの現状を踏まえ、異なる立場の者が協力し合い、豊かなケア文化を発信する場を作り出していくことを狙っている。

I. 活動計画

医療従事者や近隣住民の方を対象に、哲学カフェを二回開催する。テーマの設定に関しては、「誰もがそれについて専門家でないようなテーマにした方が、皆が遠慮せずに自由に発言できる」という考えから、医療・福祉の領域に関わりつつも、誰もが普段の生活を振り返りつつ考察できるようなテーマを選択することになった。

より具体的には、第1回目は2015年8月27日（13時～16時）に、「信頼ってどういうこと？」というテーマで、第2回目は2016年3月18日（16時～18時）に、「学んでどういうこと？」というテーマで開催することになった。

II. 活動の実際および経過

平成27年8月27日開催の哲学カフェに関しては、6月から8月にかけて、近隣団地等へのチラシの配布を行い、アスト津の会議室にて開催した。平成28年3月に開かれる哲学カフェに関しては、1月より募集を開始しており、今後もさらに宣伝に力を入れていく。

III. 活動の結果と評価

8月27日の「信頼ってどういうこと？」をテーマとした哲学カフェでは、「信頼と信用の違いとはなにか」「信頼することと期待することはどういう点で似ていて、また異なるの

か」「信頼と慣れ合いはどう区別されるのか」「信頼の欠如は現代社会の管理主義的な傾向とどう関係しているのか」等、信頼という事象の核心へと迫っていくような根本的な問いかけが参加者から次々と起こった。それらの難問について具体的なエピソードをもとにして話し合いが――「ああでもない、こうでもない」という形で――行われることで、信頼という言葉がもつ意味の拡がりや奥行きが十分に浮かび上がったのではないかと思う。とりわけ、信頼概念と関連しつつも区別される諸概念（信用・期待・自由等）とともに、信頼というものの本質が様々な角度から考察されるに至った。それによって信頼という事象の具体的細部に対する理解が、各参加者の中で幾ばくか豊かになったのではないかと考えられる。

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

昨年度と同様、今年度も、少人数の参加者ととともに哲学カフェを行うことになった。少人数で行うことの強みとしては、各参加者にたっぷり話す時間また他人の話に耳を傾ける時間が与えられている点、それによって、各参加者が焦ることなく自分のペースで思考を掘り下げることができる点があげられる。しかし、来年度以降は、若干参加者が増えた方がより多様な見解が出やすいことを考慮し、多少規模を拡大して活動する予定である。来年度も、性急に成果を求めるようなことはせず、時間を十分かけて、哲学カフェの場を豊かなものにしていきたいと考える。

7. 初歩の電子カルテ

担当者： 齋藤 真、長谷川智之

【事業要旨】

本事業は、電子カルテにおける操作方法や看護記録の活用について初歩から学習し、医療機関の ICT(Information and Communication Technology)への不安を軽減もしくは解消することを目的とした。本事業の対象は、結婚や産休、育休などで長期に看護職を離れていた方で初めて電子カルテに触れる方、以前に教わったものの、上手に使いこなせない方およびパソコンの操作自体が苦手な方とし、様々な対象を支援する内容とした。医療機関で導入されている電子カルテはメーカーにより操作手順が異なるため、電子カルテに共通する操作、考え方などの基本を学ぶ講座として、本事業を開催した。

【地域貢献のポイント】

2013 年の調べで三重県内の 400 床以上の医療機関で電子カルテを導入しているのは、80%と全国的平均（56%）よりもかなり高く普及している。しかし、一方で電子カルテの操作は、各自のパソコンスキルに依存するところが大きく、ICT に苦手意識を持った看護職者も多く、操作に気を取られ患者とのコミュニケーションが希薄になる、紙媒体よりも時間がかかるなど、新たな課題も出現してきている。特に中高年や長期間医療職から離れていた看護師は、電子カルテに関して研修する機会や場所もないため、本学のように機材を保有する高等教育機関が教育を担うべきである。潜在看護師の再教育は、多くの医療機関等で行われおり、主として看護技術であるが、電子カルテに関する教育は全国的にも皆無である。

I. 活動計画

本年度の重点課題は、本学が電子カルテの教育を行っていることを認識してもらうこと、また潜在看護師の再教育の一助とすること、さらに電子カルテの実用的な教育方法を開発につなげることにした。また、参加人数を 60 名とした。

II. 活動の実際および経過

1. 使用機材について

機材は、本学情報処理教室においてクラウド型電子カルテシステム”HOPE/EGMAIN-LX”を用いた。

2. カリキュラムについて

カリキュラムは、①基本操作編、②外来編、③入院編、④看護計画編、⑤看護業務編、⑥サマリ編の 6 つの項目を抽出し、120 分間の講義、演習となるように構築した。

また、電子カルテ全般あるいは普段から疑問に思っている点などについても質疑応

答の場を設けて対応した。

3. 開催日、参加費用、参加者について

開催日および参加者数は、7月11日（土）10:00-12:00の部9名、7月29日（水）10:00-12:00の部18名、同14:00-16:00の部11名で、延べ38名が参加した。参加費用は、資料代を含めて500円とした。密度の高い講義・演習とするため、1回の講座あたり20名までとした。本学卒業生1名が参加した。

Ⅲ. 活動の結果と評価

本講座終了時に参加者から無記名でアンケートを実施し、参加者の背景、理解の度合い、本講座の満足度について述べる。

1. 参加者の背景

参加者の年齢は50歳以上が54.0%、職種は看護スタッフが72.9%であった。また、本講座に参加した理由は、勤務先の医療機関が電子カルテを導入するため43.2%、過去に学んだが十分に理解できていない面があるため32.4%となった。参加者の半数が比較的年齢が高く、電子カルテへの理解不足の点があることが示されたが、パソコンの操作は普段からあまり不便を感じていないことも示された。少数ではあるが、業者からの説明が十分でなかった、あるいは研修の時間が十分とれないまま電子カルテへ移行したなど、移行体制に問題のあることもわかった。

2. 理解の度合い

カリキュラムとして掲げた6つの項目のうち、①基本操作編、②外来編、③入院編、④看護計画編については、それぞれ89.2%、86.5%、78.4%、81.1%の方が理解し、各自が操作できることを確認しているため、特に問題となることはないと思われる。一方、⑤看護業務編は、観察項目、バイタル、看護記録などの観察項目の入力、医師からの指示受け、指示確認、指示実施、ケア実施については20%程度の方々が理解不十分であることから、演習時間を多くかける、あるいは複数の模擬データを出題する、OJTのように現場でのトレーニングを入れるなど、教育の方法に何らかの支援が必要であると考えられる。さらに⑥サマリ編については、理解できた方が40.5%と低いことが示されたが、電子カルテの教育方法に関与するものか、現時点での言及は避ける。

3. 本講座の満足度

今回の参加者は、89.2%の方が満足であると回答し、演習をする時間が短いことや、研修会の回数を増やしてほしいこと、さらには模擬データを使って練習を行いたいことなど、今後の教育の方針となるデータを得ることができた。また、電子カルテの教育は、適切な教材と指導があれば十分に理解できるものであることが示された。

Ⅳ. 今後の課題及び今後に向けての計画

今後の課題として、カリキュラムの一部見直しを行い、次年度も継続して行う予定である。

8. 認知症ケア看護師養成研修

担当者：地域交流センター委員

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託を受け、三重県内の医療施設・福祉施設・行政機関等に勤務する看護職（保健師・助産師・看護師）のうち、全6日参加可能な方を対象に実施した研修で、三重県内の医療機関等で勤務する看護職が、認知症の基礎からケアについて継続して学び、適切な援助、指導が行えるようになることをめざすものである。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で認知症ケアに携わる看護職の質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や技術を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

I. 活動計画

募集人数：40名程度（1回・2回目ともに）

募集期間：第1回目 平成27年4月20日（月）～5月20日（水）

第2回目 平成27年7月14日（火）～8月14日（金）

研修開催日：第1回目 6月13日・20日・7月4日・12日・8月8日・30日

第2回目 9月5日・26日・10月4日・18日・11月14日・28日

研修会場：教育文化会館、三重県立看護大学、三重県津庁舎

受講料（資料代含む）：6,480円（消費税込）

II. 活動の実際および経過

平成27年4月に「平成27年度認知症ケア看護師養成研修」の案内を県内各医療・福祉施設、行政機関等に約400部送付した。研修内容は第1回、第2回ともほぼ同じ内容である。

1. 研修参加者人数

- 1) 第1回目：71名
- 2) 第2回目：83名

2. 研修内容

1) 認知症病態看護論①

講師：木田博隆先生（三重大学医学部附属病院認知症センター助教）

- (1) 認知症の病態
- (2) 認知症のメカニズムと種類
- (3) 認知症の経過と症状

(4) 認知症の診断

2) 認知症ケア看護論①

講師：五島シズ先生

(全国高齢者協会監事
認知症介護研究研修センター
東京センター客員上級研究員)

- (1) 認知症の理解
- (2) 認知症の看護とは



3) 認知症病態看護論②

講師：森川将行先生

(三重県立こころの医療センター院長)
佐藤正之先生
(三重大学大学院医学系研究科認知症医療学講座准教授)

- (1) 認知症をきたす疾患
- (2) 認知症と鑑別する疾患
- (3) 薬物療法・非薬物療法

4) 認知症ケア看護論②

講師：高梨早苗先生

(国立長寿医療センター
老人看護専門看護師)

- (1) 認知症ケア実践の役割
- (2) 認知症ケアの安全性



5) 認知症の医療・福祉制度

講師：村上裕基先生

(三重県健康福祉部長寿介護課)
安井裕子先生
(桑名市保健福祉部
中央地域包括支援センター)

野口美枝先生
(玉城町生活福祉部地域包括支援室)

- (1) 介護保険制度と認知症施策について
- (2) 地域の実践的な取組



6) 認知症看護と倫理

講師：若林たけ子先生

(元三重県立看護大学教授)

中西貴美子

(三重県立看護大学教授)

- (1) 看護倫理とは
- (2) 取り組みの必要性
- (3) 倫理的問題への対応方法
- (4) 倫理的葛藤をもたらす状況について

7) 認知症看護援助方法① (演習)

講師：杉本幸代先生 (村瀬病院認知症看護認定看護師)

田中徹先生

(三重県立こころの医療センター認知症看護認定看護師)

前川早苗先生

(三重県立こころの医療センター精神看護専門看護師)

- (1) 生活支援について (口腔ケア・嚥下障害・睡眠ケア・排泄ケア)
- (2) 認知症看護援助方法 (コミュニケーション)

※2回目は、第2回公開講座を研修のメニューとした。

8) 認知症看護援助方法② (演習)

講師：五島シズ先生・杉本幸代先生・田中徹先生

アドバイザー：真田富紀先生・伊藤光先生・稲澤町子先生・出口いおり先生
・黒川亜紀先生

- (1) 認知症看護援助方法 (生活支援について)
- (2) グループワーク (生活支援について・グループ発表)

9) 特別講演 I・II

講師：白石葉子 (三重県立看護大学准教授)

大西範和 (三重県立看護大学教授 地域交流センター長)

- (1) 「看護職者の腰・膝を健康に保つための運動」
- (2) 「身体運動の効能」

10) 研修の振り返り

講師：丹生かづ (三重県立看護大学 地域連携特任准教授)

11) 修了式

第1回目は64名、第2回目は73名が全日程を受講し、修了証書を発行した。



Ⅲ. 活動の結果と評価

参加者は、定員 40 名のところ、2 回とも 70 名を超える申し込みがあった。

受講者アンケート（回答率：第 1 回 93.0%、第 2 回 88.4%）によると受講者の年齢は、第 1 回は 50 代が 40 代よりも若干名多く、最多であったが、第 1 回、第 2 回を合わせると、40 代が多く、次いで 50 代、30 代であった。第 2 回も同じ傾向であった。

次に所属は 2 回とも病院が半数以上を占め、次いで福祉施設、行政等であった。看護職の経験年数は、20 年以上が最も多く 41.5%で、次いで 10 年以上 20 年未満の 34.5%と、看護経験が豊富な層であった。研修会の全体評価では、「満足」「やや満足」を合わせて 9 割以上の回答であった。

第 1 回、第 2 回の全体の主な結果は図 1～図 7 の通りであった。

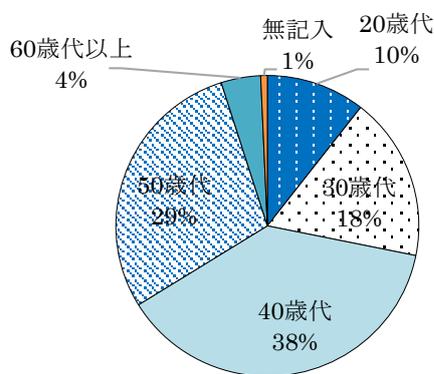


図1. 年齢

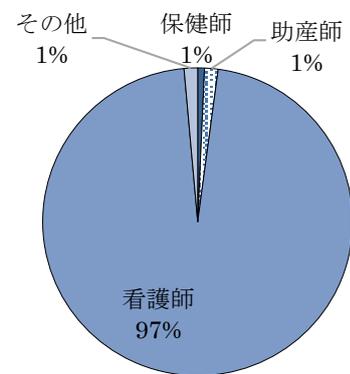


図2. 職種

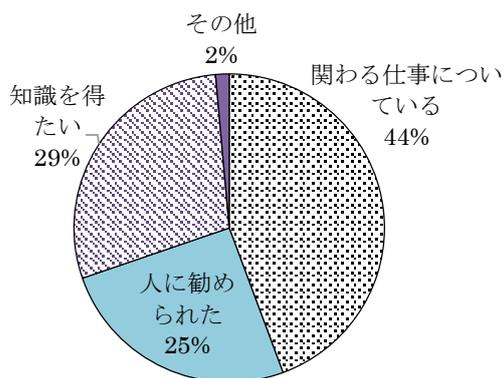


図3. 受講動機

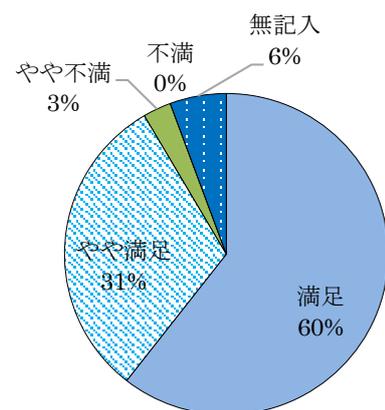


図4. 研修時期

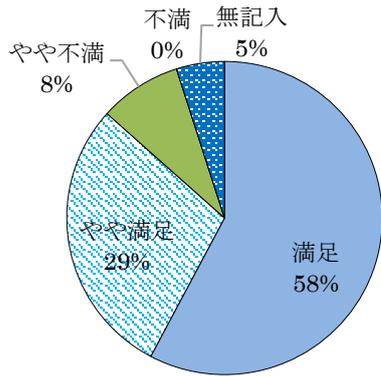


図5. 研修期間

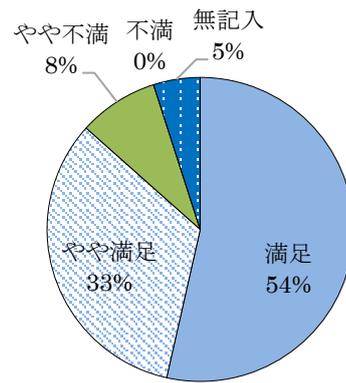


図6. 研修時間

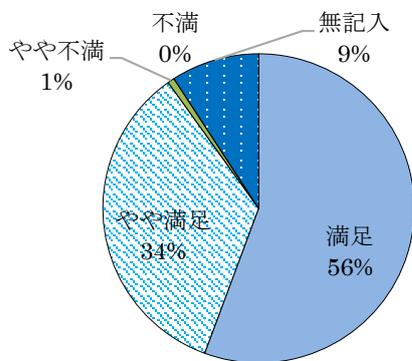


図7. 全体満足度

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

平成 27 年度は、県からの要請により 2 回研修を実施したが、次年度の開講については、他の事業の運営もあり、2 回の実施は難しい。しかし、地域の医療・福祉施設からも継続開催の希望が多いため、平成 28 年度は、研修会を 1 回開催することとする。

9. 感染管理認定看護師資質向上研修

担当者：地域交流センター委員

【事業要旨】

本事業は、三重県内で活躍している感染管理認定看護師および平成 23 年度から 25 年度に本学で開講した認定看護師教育課程「感染管理」修了生を対象に、施設内における感染予防・管理システムの構築やパンデミック等の緊急事態への対応等の感染管理の実践力向上を図る研修を実施するものである。

なお、本事業は、三重県の委託を受けて実施する。

【地域貢献のポイント】

○感染管理における先進的知識を取得することにより感染管理認定看護師の実践力向上を図り、感染予防対策の強化につながる。

I. 活動計画

平成 28 年 5 月に開催される伊勢志摩サミットを控え、アウトブレイクやバイオテロまでを想定し、症候群サーベイランスと疫学調査の最新の知識を習得できる内容とする。

県内の感染管理認定看護師の 2/3 以上に相当する参加人数を得ることをめざし、40 名程度を目標とする。

II. 活動の実際および経過

1. 経緯

本学で開講した認定看護師教育課程「感染管理」に協力いただいた県内の認定看護師や修了生とともに研修内容を検討し、運営についてもご協力いただくこととなった。

この事業は、平成 27 年度三重県計画にかかる地域医療介護総合確保基金事業（医療分）の提案募集（平成 27 年 2 月 13 日締切）に提案し、採択されたものである。

平成 27 年度 4 月から事業に取り組む予定であったが、厚生労働省からの予算内示が遅れ、県からの委託が 12 月下旬と大幅に遅れた。当初、受講者の利便性を考え、同内容の研修を 2 回開催する計画であったが、県からの委託期間が約 3 ヶ月と短くなり、2 回開催しても受講生増には繋がらないと判断されたので 1 回の開催に変更することとなった。しかし、1 回に集約して開催することで、一堂に会する参加者数が増えることとなり、情報交換できる事例数は増え、研修の効果はさらに上がると見込まれる。

2. 研修実施

平成 28 年 3 月 19 日にアスト津研修室 A にて「三重県委託事業 感染管理認定看護師フォローアップ研修」として開催する予定である。

内容については、以下のとおり。

10:00～12:00

講演「アウトブレイクやバイオテロにおける症候群サーベイランスと疫学調査」

講師 東北大学大学院医学系研究科感染制御・検査診断学分野 助教

吉田 眞紀子 氏

12:00～13:15 意見交換（ランチセッション）

13:15～14:30 事例報告・グループワーク

「自施設の清掃・環境整備の問題点と取組」

14:30～15:00 全体討議

III. 活動の結果と評価

県からの委託が 12 月下旬であったため、事業進行中であり、現時点での評価はできない。

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

認定看護師は看護における高度な専門知識を有し、各施設において看護師だけでなく多職種にも指導を行うなど、重要な役割を果たしている。

特に感染管理認定看護師は、医療施設や介護施設等における感染予防対策の推進に加え、一般社会で起こりうる感染症へのクライシスマネジメントについても主導的な役割を果たすよう求められている。こうした社会の要請に的確に応えるため、認定看護師は自己研鑽に励んでいる。しかし、常に高度化を続ける医療に対応するためには、自己研鑽だけでは限界がある。このため、今後、少なくとも数年に一度は、先進的知識の取得が可能となるような研修の開催が望まれる。

Ⅲ. 卒業生支援事業

1. 卒業生のきずなプロジェクト

担当者：林辰弥、中北裕子、長谷川智之、羽田有紀、多次淳一郎、濱崎友美

【事業要旨】

卒業生が看護職としての職責を継続して果たせるよう、様々な相談に対応し、燃え尽きおよび離職防止を図る。また同窓会と連携をとり、卒業生、同窓会との情報交換を行うことにより、卒業生と大学との関係性の維持にも努める。

【地域貢献のポイント】

仕事上の悩みや複雑な人間関係を経験し、離職を考えることが多い卒後1～2年までの卒業生を対象に、母校である大学がハード面とソフト面の資源を提供し、フォローすることで離職防止を図る。この活動によって、卒業生が持続的に質の高い看護ケアを社会に提供できることは、地域住民及び社会に対しての貢献につながると考える。

I. 活動計画

【数値目標】

- ・ 卒後1年目を対象に茶話会（夢緑祭当日、3月）の参加者各30名程度を目標とする。
- ・ 卒後2年目を対象に茶話会（3月）の参加者30名程度を目標とする。

本事業は平成23年度からの事業を引き継いだ、単年度の事業である。これまでの茶話会参加者からのアンケートをもとに、以下の茶話会を企画した。

卒後1年目の卒業生を対象とした茶話会を年2回開催（夢緑祭際開催日、3月）する。茶話会は1回30名程度の参加を見込み、数値目標とする。

また、過去4年間の活動評価より、卒後2年目になっても卒後1年目に準じた茶話会開催の要望があったため、今年度も卒後2年目の卒業生も対象とした茶話会を開催する。開催は3月に卒後1年目と合同で行うこととする。卒後1年目、2年目それぞれが1年間を振り返ると共に、2学年が同時に集うことで、横のつながりだけでなく、学年を超えた縦のつながりも深め、次年度への活力をつける機会とする。

広報活動として、卒業生の就職先に茶話会開催通知と案内チラシを配布し、就職先の理解を得る。対象の卒業生に対しては、在学中に使用していたYahooメールにて周知を行う。開催後には、就職先の本会に対するご理解ご協力へのお礼と共に参加者の様子について、文書を郵送する。また、対象の卒業生にYahooメールにて参加者の近況・メッセージを伝える。

II. 活動の実際および経過

1. 第1回茶話会「三看大に来て話をしませんか？」の開催のための広報活動

卒後1年目の卒業生の就職先45か所に対して、夢緑祭の開催日程が決まった5月初旬

に茶話会の案内を郵送した。卒業生には、昨年度同様に在学中に使用していた Yahoo メール のアドレスを活用し茶話会への参加を呼びかけた。学内の教員に対しては茶話会の開催について掲示、メール等で周知した。

2. 第1回茶話会「三看大に集まって話をしませんか？」の実施

平成27年6月13日（土曜日）14:00～16:00、本学多目的講義室にて、本学の学園祭である「夢緑祭」に合わせて開催した。開催日は、多くの後輩や教員と再会でき、かつ卒業後3か月目は4月からのことを振り返るよい時期であると考えられたことから夢緑祭と同日とし、開始時刻は本学にバスで来校する卒業生への配慮から設定した。会の内容は、参加者（卒業生・教員）同士の交流と歓談を中心とした。

開催後には、参加者の就職先19か所に本事業へのご理解、ご協力へのお礼と共に、参加者全体の様子を文書にて郵送した。また、参加者から欠席者へのメッセージを、「卒1の三看大同級生のみんなへ メッセージ 2015.6」にまとめ、Yahooメールにて、卒1へ配信した。

3. 第2回茶話会「三看大に集まって話をしませんか？」の開催のための広報活動

第2回茶話会は、平成28年3月5日（土曜日）14:00～16:00を予定しており、平成28年1月に卒業生（卒1、卒2）の就職先73か所への案内状の発送と教員への周知、卒業生にYahooメールの配信を行い、徐々に参加申し込みのメールが届いている。第2回は、卒業後1年目と2年目の卒業生が同時に集う会となるため、それぞれが2年目あるいは、3年目に向けて自己を振り返り、また学年を超えて同窓生としての絆を深められる機会とする。

また、卒業生から卒業生支援に対するニーズ調査を事後アンケートとして実施する。

Ⅲ. 活動の結果と評価

1. 第1回茶話会開催のための広報活動の結果及び評価

茶話会について知ったきっかけで最も多かったのは「看護部から配布の案内ちらし」であり、次いで「本事業からのメール」であった（図1）。

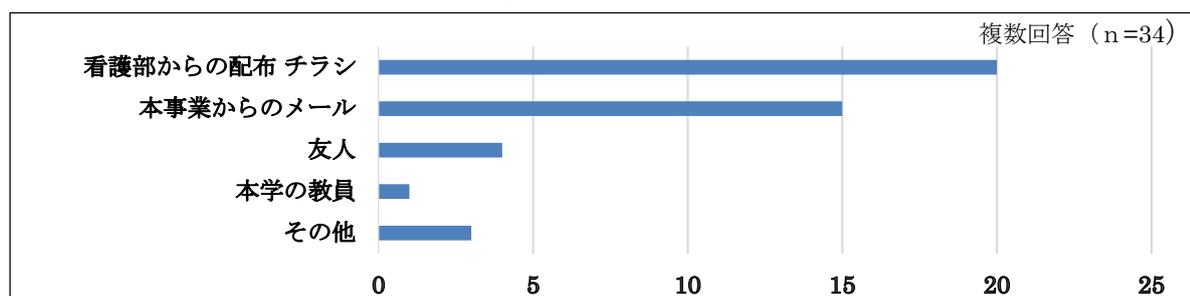


図1. 茶話会を知ったきっかけ

就職先への広報活動として、就職先の施設に開催のお知らせと卒業生の人数分の案内チラシの送付を行った。開催通知を受け、就職先の管理者から直接本事業宛てに参加について連絡を頂くケースがあった。加えて、卒業生本人に対して、「行っておいで、楽しんでおいで」と声をかけていただいたり、参加しやすいように勤務の調整、遠方の場合には出張扱いや旅費の支給等、就職先の協力が得られていた。過去の結果では本事業からのメールにて開催を知った場合が多かったことから、就職先において、本学の継続した卒業生支援への理解が、広まってきている結果であると考えられる。

開催後には、参加者の就職先の看護部長宛に、事業へのご理解とご協力へのお礼と共に茶話会の様子を文書にて伝えることで、今後の本学における卒業生支援に対する更なる理解につながっているのではないかと考える。

2. 第1回茶話会の結果及び評価

平成27年6月13日（土曜日）「夢緑祭」の開催に合わせて実施した。参加人数は卒業生39名、教員7名の計46名であった。2名からメールによるメッセージが届けられた。会場設営は、参加者が歓談できるよう、テーブルを卒業生と共に配置し自由に着席できるようにした。

卒業生は順番に、仕事上の悩みや自己の成長を近況報告に交えながら和やかな様子で話していた。アンケートには、「先生や同期に会えて嬉しかった。」、「当日参加でも暖かく受け入れてくれて、母校の温かさを改めて感じました。」、「こうして皆が会える場を提供していただけてとてもありがたいです。」、「当日参加だったのにケーキを用意していただき嬉しかったです。」などという感想が書かれていた。

会の終わりに、参加できなかった卒業生に対してのメッセージを記入してもらい、次回開催日時と共に、Yahooメールにて卒業生全員に配信した。メッセージには、「思っていたより卒業生が多く来てくれていたので、いろんな人に会えて嬉しかったです。また3月にもあるので、今日会えなかった人にも会えたらいいなと思っています。」、「久しぶりに大学に来て、皆の顔が見られて話せて楽しかったです。頑張ろうと思いました。」「みんな何も変わってなくて、学生に戻ったような感じがしてほっとしました。色々な子と話せて楽しかったです。これからも仕事頑張れそうです。」「今は大変な時期ですが、早く慣れて仕事楽しみましょう！」など、茶話会の感想や参加できなかった卒業生とも会いたいというメッセージが多く寄せられた。

茶話会の内容に対する参加者の満足度は、アンケートより72.7%の参加者がとても満足、21.2%の者が満足であったという結果を得た（図2）。また、3月に同様の企画を行うことについては、参加者の67.8%が「とてもいい」、23.5%が「ややいい」と答えた（図3）。会の終了後には、終了時間を過ぎてから玄関口で話し込む光景や、お互いに抱き合って別れを惜しむ卒業生の姿も見られた。

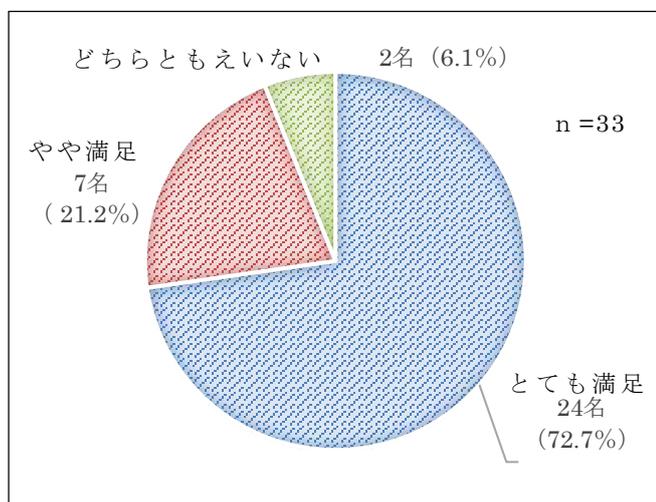


図2. 会の内容について

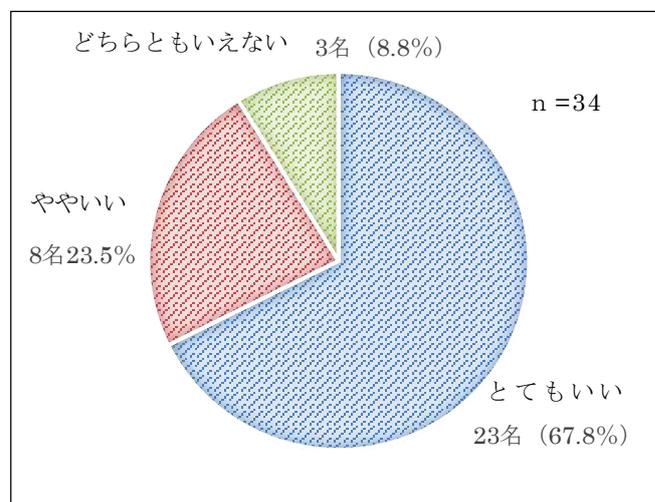


図3. 3月に同様の内容を行うことについて

3. 第2回茶話会の開催に向けて

第2回茶話会「大学に来て話をしませんか？」を平成28年3月5日（土曜日）に開催する。就職先への案内の送付、卒業生へのYahooメール配信、学内教員への周知は1月に終えている。すでに数名の卒後1年目、2年目の卒業生から参加の連絡が届いている。

それぞれの学年同士、先輩後輩でも交流が図れるように企画を行う。また、本日事業への満足度についても調査し、今後の卒業生支援を検討する際の基礎資料とする。

4. 本事業の評価

第1回茶話会のアンケートで、後輩にも就職2～3か月後に同様の企画を行うことには、参加者の76.5%が「とてもいい」、20.6%が「ややいい」という結果であった（図4）。また、大学が行う卒業生支援として希望されるものについては、「今回のような茶話会・懇親会」が最も多く、次いで「再就職支援」であった（図5）。自由記載には、「今後も今のように暖かく迎えて入れてほしいです。」「卒業式以来に来ました。今日来られてよかったです。」「時間も楽しみにしています」という意見があった。以上のアンケート結果より、本事業による卒業生支援は、卒業生からの評価を得ていると考えられた。

また、卒1、卒2だけでなく、職場での人間関係や再就職等についての相談のため、今年度対象以前の本事業対象であった卒業生も本事業担当教員のもとに10名余りが来学しており、本事業の継続的な卒業生支援の成果であるものと評価できる。

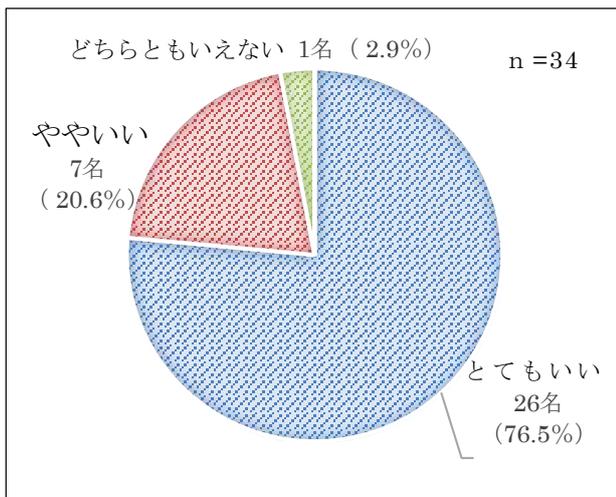


図4. 後輩にも同様の企画を
することについて

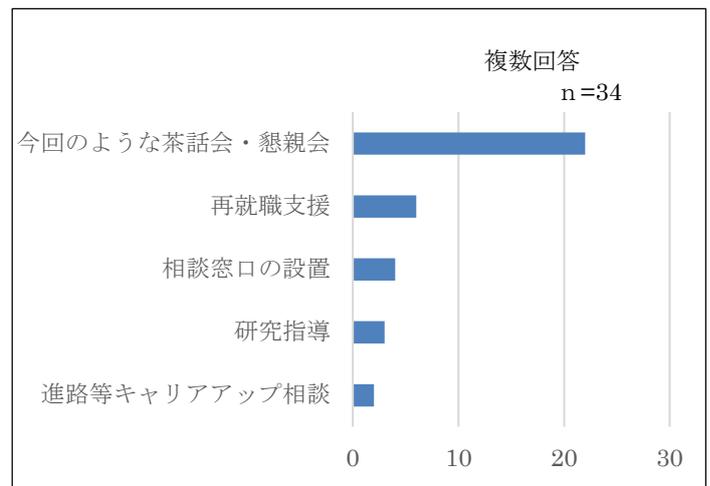


図5. 大学が行う卒業生支援として
希望されるもの

IV. 今後の課題及び今後に向けての計画

本事業は単年度の事業であるが、第1回茶話会に参加した卒業生からのアンケート結果による満足度や、過去4年間の結果等から、本事業による卒業生支援は卒業生のニーズに合致していると考えられる。本事業は卒業生の離職防止を目的としているが、今年度1回目のアンケートにて、就職3か月の時点で「再就職支援」を望む回答があったことから、継続的な支援の必要性が、再認識された。今後は、今年度開催の第2回茶話会のアンケート結果を含めて本事業の課題を抽出し、その課題を踏まえて次年度以降の卒業生支援に繋げていく。

2. 医療・福祉機関と連携した看護職員確保対策事業

担当者：地域交流センター（宮崎・阿部・丹生）、事務局（藤谷・上田）、高大接続プロジェクトチーム

【事業要旨】

本事業は、医療・福祉機関と連携した看護職員確保対策事業—本学卒業生の就業および復職支援—として立ち上げた事業であったが、平成 26 年度に本学が文部科学省に採択された「大学教育再生加速プログラム」の事業内容の重なりを考慮して、高大接続プロジェクトチームと連携して取り組んでいる。平成 27 年度は、事業の 2 年目にあたり、計画に沿って「卒業生就労状況調査」を実施した。今年度中には、調査結果の集計を終了予定である。

平成 28 年度には調査結果の詳細をまとめ、各取り組みへのフィードバック、リカレント研修、復職支援活動に活かす基礎資料の整理をしていく。今後は、調査結果をもとに、卒後教育における課題を抽出し、卒後教育を充実させるとともに、キャリア教育をはじめとする学生への教育内容の充実に活用するほか、卒業生のキャリアアップ支援等にも活かしていく事業である。

【地域貢献のポイント】

- 卒業生の現状から看護職の定着促進やキャリア形成支援にあたっての課題を明らかにし、看護の質向上に貢献する。
- 各取り組みへのフィードバック、リカレント研修、復職支援活動を企画する基礎データとし、看護の質向上に貢献する。
- 連携病院等へ離職防止や復職支援に関する情報を提供し、看護の質向上に貢献する。

I. 活動計画

| | |
|-----------------|----------------------------|
| 平成 27 年 5 月～7 月 | 「卒業生就労状況調査」調査項目および発送方法等の検討 |
| 7 月 | 調査発送・集計委託業者決定 |
| 8 月 | 調査票確定 |
| 9 月下旬 | 調査票発送 |
| 11 月末 | 調査回答締切 |
| 平成 28 年 2 月 | 単純集計 |
| 3 月 | 全体集計終了 |

II. 活動の実際および経過

本事業は、平成 26 年度に本学が文部科学省に採択された「大学教育再生加速プログラム」の事業内容の重なりを考慮して、平成 27 年度も継続して高大接続プロジェクトチームと連携して取り組んでいる。今年度は、事業の 2 年目にあたり、「卒業生就労状況調査」を中心に事業展開を行った。

具体的には、平成 26 年度中に作成したアンケート骨子を元に、高大接続プロジェクトチーム会議とともに検討を重ね、調査項目は、卒後支援、キャリア教育だけでなく、学部のカリキュラムの充実にもフィードバックが可能な内容とした。また、事務局と協力して発送方法もより卒業生に届くような手法を検討し、アンケート作成・印刷・発注・発送を行った。

アンケートは、卒業生が看護職者としてどのようにキャリアを形成し、現在、どのように働き、今後どのようにキャリア形成していくことを希望しているかを把握する内容とした。発送については、同窓会との連携により、同窓会名簿により本人宛に送付するとともに、同窓会から調査への協力を呼びかけていただいた。また、同窓会が現住所を把握していない卒業生もいるため、卒業時の保証人のもとへも送付した。この際、既に本人に調査が届いている可能性があるため、その旨を明記した文書を同封した。

加えて、卒業生が多く所属している病院の看護部の協力を得て、当該病院の看護部から卒業生に直接配付いただいた。このように卒業生に届くような手法を検討した結果、690 件の回答があり、回収率は約 46.1%となった。これは、郵送法を用いた他の大学の卒業生調査の回答率と比較して非常に高い回収率といえる。

本事業の予算に関しては、事業に必要な査票の印刷、発送、集計等の全てを文部科学省から委託する予算「大学教育再生加速プログラム」から得ることができた。

III. 活動の結果と評価

単純集計結果の一部を紹介する。

卒業時における居住地について、三重県内は 55.1%であったが、現在は 47.0%と減少していた。

卒業後初の就業については、看護師が 81.7%、助産師が 10.1%、保健師が 7.4%、養護教諭が 0.4%、その他が 0.4%、無回答が 0.3%であった。また、就業者のうち、98.1%が正規雇用であった。勤務先については、91.6%が病院に就職し、そのうち 200 床以上の病院に勤務しているのは 81.4%であった。本学の卒業生の多くが、看護師や助産師として比較的大きな病院で看護職者としてのスタートを切ったことがわかる。また、その勤務先の所在地については、51.2%が県内であった。その勤務地を選んだ理由（複数回答可）については、「勤務地」が最も多く 66.5%、次いで「教育体制（新人）」36.2%、その次が「実習時の印象」19.6%であった。

現在の就業状況については、就業しているが 89.6%、無職が 10.0%であった。現在の勤務形態については、正規・フルタイムが 72.0%、正規・時短勤務が 5.1%、非正規・フルタイムが 2.8%、非正規・時短勤務が 9.3%であった。勤務先の所在地については、42.8%が県内、46.5%県外、無回答は 10.7%であった。

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

今後、さらに統計解析を行い、離職・休職の要因究明や復職への支援策、キャリア形成に向けた研修や支援の手法等を検討し、事業へ繋げていく予定である。

IV. 地域住民ふれあい推進事業

1. 災害にそなえて ～地域の防災・減災力を高めよう～

担当者：多次淳一郎、大村佳代子、中北裕子、井倉一政、田中晴香、松川真葵

【事業要旨】

三重県では大規模な地震災害が予測されるなど地域に暮らす人々の災害に対する関心は高い。本学は一時避難所の機能を担っており、看護教育研究機関としての専門性を活かし日頃から地域住民の方たちが自ら「災害に遭遇しても心身の健康を保持できる」ための備えをしておけるよう働きかけていく役割があると考えている。

そこで、看護の専門性を活かし、災害時の健康管理の側面から日頃の備えについて地域住民の方たちに考えてもらうことにより、地域の防災力向上の一助となることをめざす。

【地域貢献のポイント】

1. 地域住民が健康管理の視点から災害の備えを考える機会を得ることで、特に避難した後の減災の面で地域の災害対応力の向上に資することができる。
2. 事業を通じて地域住民の災害への備えの実状やニーズなどを把握できることにより、本学が一時避難所として適切に機能を果たすことにつなげることができる。
3. 事業に本学学生の参加を得ることで、学生が災害時の看護の役割について考える教育的効果につなげることができる。

I. 活動計画

1. 地域イベントでの防災・減災に関する普及啓発ブースの開設
地域住民が集う夏祭り等のイベントにおいて防災・減災に関する普及啓発ブース（以下、ブースと略す）を開設する。（年2回：学内・1回、学外1回）
2. 本学学生との連携
 1. のブース開設時、本学学生にボランティアとして協力を得る。（各回5名程度）

II. 活動の実際および経過

1. プログラムの企画
メンバー間で検討し、災害時の状況（災害の種類・季節・時間・天候等）により想定される被害が異なることから、それらに応じた減災を住民に考えてもらうことができる体験型のプログラム（例：避難リュックに詰める物品を選び、詰めた状態で実際に歩いてもらう）を実施することとした。
2. ブースを実施する地域イベント等の情報収集・依頼および調整
 - 1) 本学学生自治会との連携
夢緑祭でのブース開設にあたり、学生自治会とブース設置場所等の調整を図った。

2) 社会福祉協議会との連携

災害時に何らかの支援が必要となる可能性が高い高齢者、障がい者および幼児・学齢期の子どもがいる親世代への働きかけを念頭に、津市社会福祉協議会にブース開設可能な地域イベントの紹介を依頼した。(平成 27 年 4 月～5 月)

その後、紹介を受けた津市高茶屋地区元気祭り実行委員会の打ち合わせ会議に 3 回出席し、当日のプログラムを調整した。(平成 27 年 6 月～8 月)

3) 連合自治会との連携

一身田地区自治会連合会から依頼を受け、敬老会でのブース開設の調整を行った。

3. 協力学生の募集

講義・実習等の予定を勘案し 4 年生を対象に協力者募集を行うこととした。

イベント毎に①学内メールでの一斉周知、②メンバーからの個別周知を行った。

III. 活動の結果と評価

1. ブースの開設

年度当初の計画決定後、追加で依頼を受けて合計 3 回ブースを開設した。

イベント毎の実施結果は以下の通り。

| | | |
|--------------------------|---------|--|
| 夢緑祭 【写真 1】 | 日時 / 場所 | H27.6.13 / 本学 |
| | 内容 | ・防災グッズの展示 ・オリジナルの防災リュックづくり体験 |
| | 来場者数 | 約 20 名 |
| | 協力学生数 | 2 名 |
| 高茶屋元気祭り 【写真 2】 | 日時 / 場所 | H27.8.22 / 津市高茶屋市民センター |
| | 内容 | ・ミニ講義 (テーマ: 避難後の健康管理) ・参加者 4 チームによるオリジナルの防災リュックづくり体験と全体共有 |
| | 来場者数 | 約 40 名 |
| | 協力学生数 | 4 名 |
| 一身田地区敬老会 | 日時 / 場所 | H27.9.13 / 三重県人権センター |
| | 内容 | 敬老会参加者への防災グッズの展示と説明 |
| | 来場者数 | 約 200 名 |
| | 協力学生数 | 0 名 |



【写真 1】 夢緑祭でのブースの様子



【写真2】 高茶屋元気祭りでの防災リュックづくり体験

2. 参加者の気づきや感想

各イベントの参加者からブースの見学や体験を通じての気づきや感想を聞き取った。

各自が用意しているリュックの内容と比較し、その内容選択に抜けていた視点の気づきや実際に一定の重さがある物を持って避難所まで急いだ状態で歩けるか、など状況を想定した準備の必要性に気づき、見直すきっかけを提供できたものとする。

聞き取った気づきや感想の一部を以下に示す。

| | |
|---------------|--|
| 夢緑祭 | (7.5 kgのリュックに) 必要だと思って目いっぱい詰めてもこれを背負って歩くのはしんどい。(高齢者) |
| | リュックは用意しているけど、こんな視点で何があるかまでは考えていなかった。(大学生) |
| 高茶屋地区 元気祭り | 季節や天気のことまで考えて用意してなかった。 季節で中身が違うのね。ずっと入れっぱなしだから。 ああ！カロリーメイトとか乾パンだと確かに余分に水がほしくなりそう。全然思いつかなかったわ。 孫はアトピーあるから軟膏も予備で要るな。 いっぱい詰めると重くなっちゃうからどれがほんとに必要なのか選ばなきゃいけないのね。一人では選ぶのが難しいわ。 便利なもの(歯磨きシートなど)があるのね。知らなかったわ。 5 kmも歩かなあかんのやろ？俺はこんなに持って逃げれへん。 |
| 一身田地区 敬老会 | ピルケースはいいね。今は薬は(リュックに)入れてへん。これだったらかさばらへんし、入れるようにするわ。 携帯に連絡先とか全部入れているけど、動かんくなったら困るね。この(NTT配布の)連絡帳に書いといたらいいね。 |

3. 地区役員からの評価

高茶屋元気祭りでは自治会連合会長、民生委員地区会長、等の役職の方からも「逃げた後のことを考える機会となりとてもよかった」、「一般的な避難の用意をしているだけでは不十分だということがわかり、今後の活動に活かしたい」等の肯定的な評価と、今後も本学に協力を求めたい旨の言葉もあり、今後の地域貢献はもとより教育研究活動に

もつながる良好な関係の構築につながったと考える。

4. 協力学生の感想

イベントに協力をしてもらった学生から気づきや感想を聞き取った。

住民のリュックづくりのサポートを通じて、自身の災害への備えを振り返るとともに、専門的知識を有する立場としてどのような点に留意して準備することを住民等に勧めていくかの気づきまでなされており、看護の実践を体験的に学ぶ教育的効果もあったと考える。その一部、代表的な意見を以下に示す。

いざ避難となったときに重いリュックを担ぎ、子どもを抱く可能性も考えると、リュックに物品を詰め過ぎることで母親の負担が増えるので、それを持って逃げられる重さになるように厳選して用意する必要があると感じた。

考えれば考えるほど全部が必要に見えて、どんどん荷物が重くなってしまった。

医療を学んでいない人にとっては一人で本当に必要なものを選定していくことはかなり難しいと感じた。

背負って避難するという過程が頭から抜け落ちている人が多く、実際に背負ったりすることでどこまでの重さなら大丈夫か実感でき、避難過程をより具体的に想像して準備できると思った。

IV. 今後の課題及び今後に向けての計画

今年度ははじめて地区組織や学生との協働により活動を進めた。

地区組織との協働では、彼らの持つ情報発信、集客力により、昨年度までの事業では情報を届けられなかった住民層にも発信ができ有効であったことから、次年度は新たな地区組織を対象に活動を継続する。

また学生の協力については、学生自身の学びの場としても有効であると考えられた一方で、実際に参加した学生は4年生5名と少なかった。次年度は周知対象を他学年に広げることも視野にさらに多くの学生に協力をしてもらうように改善を図る。

2. アイリッシュ・マッシュポテトを作ろう

担当者： Myles O'Brien、林辰弥、林姿穂、水谷あや、中村真弓

【事業要旨】

大学近隣の住民、本事業に関心を持っている人々、本学学生と教員が一緒になってアイルランドの代表的なじゃがいもを使った料理であるマッシュポテトを、時々英語を使いながら楽しんで作る。出来上がったマッシュポテトをアイルランドの食文化に関する話を聞きながら味わう。

【地域貢献のポイント】

地域住民と本学の教員及び学生との交流を図るとともに、地域住民に英会話を楽しんでもらい、異文化に対する理解を深めてもらう。

I. 活動計画

①数値目標：開催回数 1 回 参加人数 15 名以上

②活動スケジュール：

10 月 大学近隣住民へ案内チラシを配布

11 月 必要物品の調達と会場準備

11 月 15 日（日）参加者とともにマッシュポテトを調理・試食

マッシュポテトにまつわるアイルランドのお話

II. 活動の実際および経過

1. 広報活動

11 月 15 日（日）の開催までに、数回にわたり担当者と打ち合わせを行い、案内チラシを作成し、大学近隣住民に配布した。日本では料理の付け合わせとしてのイメージが強いマッシュポテトであるが、アイルランドではポテトが日本の米のような、主食となる食材であることが伝わる概要と、マッシュポテトを主食として撮影した写真を案内チラシに載せた。参加申し込み方法は、案内チラシに必要事項を記入し、Fax で申し込むか、もしくは大学へ E-Mail で申し込んでいただくように案内チラシに載せた。10 月に大学近隣住民へ案内チラシを配布し、当活動に興味を示してくれる方々へ直接声かけもを行い、参加者を募った。

2. 必要物品の調達と会場準備

9 月中旬に担当者がマッシュポテトを試食し、参加者にマッシュポテトを美味しく試食していただくための付け合わせとなる食材を検討した。11 月 15 日（日）の一週間ほど前から担当者と分担し、調理に必要な物品と食材を調達した。

アイルランドで食されているマッシュポテトの食べ方に、より近いものにするため、

マッシュポテトの付け合わせとしてアイリッシュソーセージを準備した。参加者の中には肉が苦手な方もいることを考慮し、野菜の付け合わせも準備した。マッシュポテトの材料は、じゃがいもにミルク、バター、塩と、アイルランドのレシピに基づいたものを準備した。

前日に会場となる本学生生活援助室を清掃し、鍋、マッシャー等の調理器具を準備した。

当日は、アイルランドの歴史についての話の際に使用する液晶 TV とパワーポイント、アイルランドの音楽を流すための CD デッキを準備した。

3. 開催

平成 27 年 11 月 15 日 (日) 9 時 30 分～12 時に、本学生生活援助室で開催した。初めに、参加者に向けて、担当者がアイルランドの食文化についての話をした。その後、参加者全員と担当者がマッシュポテトの調理を行った。担当者が準備したソーセージとともにマッシュポテトを盛りつけ、アイルランドの音楽を聴きながら試食した。試食の際には、参加者からの質問に答えたり、交流を図ったりした。

写真 1、写真 2 に当日の風景を示す。



写真 1



写真 2

Ⅲ. 活動の結果と評価

当日の参加者は、6 名であった。目標である 15 名の参加人数には達しなかった。本学学生の参加はなかった。この結果について、マッシュポテトやアイルランドの食文化は、日本人にとってはイメージしにくく、実際の活動についての理解が得られにくかった可能性がある。また、「興味はあったが、1 人では参加しにくく、近所の友人を誘って参加した。」という声が参加者から聞かれた。広報活動として、近隣住民へ案内チラシを配布し、参加者を募った。しかし個々への広報活動では、興味はあるが参加者の概要がわからず参加しにくかったのではと考える。集会所など大勢が集まる場所で参加者を募る等、誘い合わせて参加しやすい広報活用が必要であったと考える。

当日は、マッシュポテトを白く仕上げるコツや、材料の割合などを説明しながら、参加者と担当者が一緒に調理したことや、参加者同士で 1 つの鍋の中のポテトをマッシュする工程を行うことは、特に互いに親近感を得やすい効果があったのではないかと推察する。

アンケートの集計結果にも「楽しいひと時でした。」「おしゃべりしながら、皆さんと楽しく作らせていただきました。」などのコメントがあり、参加者全員から、「とても楽しかった」との回答が得られた。

また、地域貢献のポイントにもあった、「異文化に対する理解を深めてもらう」ことについては、アンケートの「イベントを通してアイルランドの文化に対する理解が深まったか」という質問に対して、「かなり理解が深まった」が5名、「まあまあ理解が深まった」が1名という結果であった。この結果から、出来上がったマッシュポテトをアイルランドの食文化に関する話を聞きながら味わうことで、本催しの地域貢献のポイント内容は、達成できたと考える。よって、本催しを通して、近隣住民との交流が促進され、アイルランドの食文化の話を聞き、マッシュポテトの調理・試食を行うことで、参加者の異文化に対する理解を深めることができたといえる。

IV. 今後の課題及び今後に向けての計画

基本的には、住民が楽しい時間を過ごしながら外国文化の勉強になるようなイベントができたので、形としてよかったと言えるだろうが、参加者の人数が少なかったところは残念であった。今回は近くの住民への配布にかなり漏れがあったようで、漏れなく配布することが望ましいと考える。したがって、次回は広報活動を改善し、さらにアピールするチラシのデザインについても再度検討する必要がある。

3. やってみよう！看護のおしごと

担当者： 名倉真砂美、竹本三重子、濱崎友美、田端真

【事業要旨】

みえこどもの城で実施される子どもを対象とした職業体験イベントに参加し、看護体験を通して、子ども（主に小学生）が看護という仕事に興味・関心を持つように働きかけることにより、看護活動の周知と将来の看護職志望者の増加につなげる。また、本学の PR 活動を行う。

【地域貢献のポイント】

本事業では、子どもの職業体験として、みえこどもの城で開催された「みえこどもの城 キッズ☆おしごと広場」において、三重県立看護大学の看護体験ブースを設営した。看護体験として「包帯法体験」「聴診器での聴診体験」「ナース服試着体験」の3種類を準備し、これらを体験することで三重県内に在住する子どもへの看護の紹介と看護の仕事の理解への喚起を目的として実施した。また、看護の職業体験は看護への興味・関心を高めることができ、看護職が将来の進路選択のひとつとなり、三重県における看護をめざす人材の育成に貢献できると考える。

I. 活動計画

数値目標：「みえこどもの城 キッズ☆おしごと広場」に参加し、150名程度の子どもの（主に小学生）が看護体験をすることをめざす。本事業は3年目の事業で、イベント参加者数が増えていることもあり、数値目標を昨年度よりも増加する。

II. 活動の実際および経過

1. イベント参加依頼

7月4日、5日にみえこどもの城で開催される「キッズ☆おしごと広場」（以下おしごと広場）に本学への参加要請があり、看護体験ブースの設営を依頼された。看護体験ブース設営のため、計画を立てて準備を開始した。当日のボランティア学生の募集も開始した。

2. 看護体験内容の検討

当日のイベントで実施する看護体験内容について検討した。体験数の制限や他の企業ブースでの体験人数制限、予約時間等を踏まえて、本事業では1つの体験時間を短く設定し、予約なくいつでも体験できる内容として、昨年度に引き続き「包帯法体験」「聴診器での聴診体験」「ナース服試着体験」の3つの体験を準備することとした。

3. おしごと広場での看護体験ブースの設営

7月4日におしごと広場に参加し、身近にある仕事のひとつとして看護を知ってもらうための看護体験ブースを設営した。「包帯法体験」「聴診器での聴診体験」「ナース服試着体験」の3つを随時体験できるように配置した。

4. 当日の様子

当日のイベントの様子を図1～3に示す。みえこどもの城により全体的な運営や会場準備が整えられ、協力企業は2日間の合計で33社であった(表1)。職業体験した子どもの人数は2日間で1253人、体験おしごと数は3133体験であった。

また、本事業では本学学生ボランティア4名(図4)が参加し、看護体験ブースの運営や体験する子どもとのかかわりを積極的に行った。



図1. 会場の様子



図2. 体験の様子①



図3. 体験の様子②



図4. ボランティア学生

表 1. 協力企業（医療系体験抜粋）

| 企業・団体名 | 体験イベント名 |
|----------------|------------------------|
| 万協製薬株式会社 | ハンドマッサージ |
| 三重県歯科医師会 | 歯医者さんのおしごと体験～虫歯をなおす～ |
| 松阪市シルバー人材センター | ちょっとママ体験 |
| ケアステーションたきび | 車いすを押してみよう！食事を食べてもらおう！ |
| 長寿会 なでしこ苑 | ゴホゴホ！むせない飲みものづくり体験 |
| 伊勢赤十字病院 | ドクター&ナース体験 心臓の音を聴いてみよう |
| 三重県歯科衛生士会 | 歯科衛生士になってみよう |
| 子育て・女性健康支援センター | 助産師ってどんなお仕事？ |
| 三重県立看護大学 | やってみよう！看護のおしごと |

他 2日間で合計 33 社

表 2. やってみよう！看護のおしごと体験者のアンケート結果（抜粋）

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・みんなが優しく教えてくれて楽しかったです。また来たいです。（小学3年・女の子） ・服を着せてくれてありがとうございました。また来ます。（小学5年・女の子） ・看護師体験のみなさんへ 看護師体験をさせていただきありがとうございました。楽しかったです。（小学3年・女の子） ・ナースで心臓の音を本物の聴診器で聞けて、妹の心臓ははやかった。（？・女の子） |
|--|

Ⅲ. 活動の結果と評価

本学が設営したブースには、主に小学生を中心とした子どもとその保護者が来場し、約 200 名の子どもが看護体験し、数値目標は達成した。

看護体験ブースでは、3 つの体験（包帯交換法・聴診・ナース服試着）を実施した。他の企業・団体とは異なり、体験時間の予約や体験人数の制限等を行わなかったために、多くの子どもが看護体験することができた。子ども、保護者への対応は主に本学学生ボランティアが行い、多くの子どもとかかわることで看護体験を通して看護活動の周知に努めた。子ども（特に女の子）には、ナース服試着体験が好評で「かわいい」「大きくなったら看護師さんになる」といった声も聞こえ（表 2）、看護という職業に興味・関心を持つきっかけになったと考える。また本学を知っている保護者もあり、このイベントを通して本学の PR 活動にもつながった。この看護体験を通して子どもが将来看護職を選択するかどうかは未知数だが、少なくとも「看護」という職業を知る機会になったと考える。

Ⅳ. 今後の課題及び今後に向けての計画

おしごと広場のイベントは平成 25 年より開催され、年々参加者数や協力企業・団体数が増加しており、子どもおよび保護者の職業に対する関心は高い状況であると言える。おしごと広場は県内 33 の企業・団体が参加するイベントであり、多くの子どもの参加者の確保につながった。子ども対象の事業は開催場所の吟味が重要であり、自治体や地域企業・団

体との連携を考慮して開催することが重要であると考えます。

また、本事業は今年度で3年目となり終了する。3年間の合計で約600名近くの子どもとかかわり、看護活動の内容を伝えてきたことは、看護職につくことを希望する子どもを育成することにつながったと確信する。地域貢献という点からも本事業は有意義であり、看護職および本学のPRのためにも同様のイベントが開催されるのであれば、参加を検討する必要があると考えます。

4. 英語で話そう

担当者：Myles O'Brien、早川正祐、林姿穂

【事業要旨】

津市在住の方々へネイティブ教員による「英語で話そう」という英会話の授業を行う。リラックスした雰囲気の中で基本的な英語表現を学びながら、同時に参加者同士の交流も楽しむ。参加者の関心に応じて話題を提供する機会も設ける。

【地域貢献のポイント】

津市住民が「英語を楽しむ」という活動を通して、英語に対する親しみを持つようにする。夢が丘の在住の方だけでなく、津市住民への、本学の周知と、地域の方々との交流の機会を広げている。また様々な世代の方に参加いただくことで世代を超えた交流も視野に入れている。

I. 活動計画

① 数値目標

参加人数：8名程度

授業回数：全7回

② 授業内容：初心者向けの基本的な語彙や表現を教授し、日常英会話を楽しめるようにする。

II. 活動の実際および経過

1. 参加募集時期

平成27年9月から11月にかけて、近隣団地へのチラシの配布や大学のHPにて広報を行い、6人の応募があった。

2. 開催期間

平成27年11月12日から12月24日の毎木曜日11時～12時（計7回）

3. 授業

毎回、「週末をどのように過ごしたのか」等を受講者に質問して、受講者が自分の体験や気持ちを英語で積極的に表現できるようにサポートした。また受講者が話した内容に関連する事柄に関して、その英語らしい表現を検討しホワイトボードに書き記すことで、英会話力の向上を図った。

III. 活動の結果と評価

参加者の英会話のレベルには多少の差はあったが、受講者全員が英語を話すことに積極的であったため、大きな問題になることはなかった。また、受講者がときおり英語表現に

詰まる場面もあったが、そういった場合は他の受講者がその人に助け舟をだすことで、円滑なコミュニケーションが図れた。終始和やかな雰囲気の中で授業が進行し、皆がリラックスして英会話を楽しむことができたと考える。

授業の具体的な内容としては、毎回、参加者全員にその週に起こった身近な出来事を英語で表現してもらい、それを題材にして英会話を展開するという方法をとった。この方法には二つの大きな利点があった。第一に、英語で話す時間が参加者間で偏ることなくほぼ均等に分配された。つまり英会話の能力の優劣に関係なく、皆が同じぐらい英語で話す機会に恵まれた。第二に、参加者全員が、自分の日々の関心事を英語でどう表現するかを具体的に、かつ各参加者のレベルに応じて、学ぶことができた。

さらに今年度より、ホワイトボードを有効に活用するようにした。英語を話すスタッフとは別に、そこで用いられた英語表現をホワイトボードに書き留める書記のスタッフを置いた。その結果、役に立つ英語表現を、受講者により確実に覚えてもらうことができるようになった。

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

受講者は6名という少人数であったため、受講者それぞれのペースとレベルに合わせて、英会話指導を行うことができた。また受講者一人あたりが、自分のことを英語で話すことができる時間を長めに設定することができた。さらに（本学担当者を含めた）参加者同士が英会話を通じて様々なテーマに関して関心を分かち合うことで交流を深めることができた。来年度も引き続き、同じ事業を展開したいと思うが、今回の成果に満足することなく、英語に不慣れな受講者でもリラックスして（間違いを恐れず）英語をアウトプットする機会、また英会話を楽しむことを通じて交流を深めることができるような機会を提供していきたいと考える。

5. 地域で知り合い・支えあうコミュニティサロン事業

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、井倉一政

地域交流センター協力者：阿部敬子、丹生かづ

【事業要旨】

本事業は、地域の介護保険施設や地域包括事業所を拠点に、各事業所、団体、地域と連携して、子どもから高齢者、健康な方から障がいをもった方やその家族が集まるコミュニティづくりを応援する事業である。このような活動を行う事業所等と協力して、全体の企画運営の協力を行うと共に、地域住民の健康チェックを行う事業である。

【地域貢献のポイント】

本事業は、本学の看護・保健の専門分野としての協力、地域交流センター所有の機材の活用、本学の地域貢献活動への広報的効果などが期待できる。さらに、地域で開催するコミュニティづくりの活動の場で、健康チェックを行いながら、事業全体の企画・運営・評価を行い、地域のコミュニティを活性化することにも貢献できる。

I. 活動計画

| | |
|-----------------|----------------------------------|
| 平成 27 年 5 月～7 月 | 企画・運営等の打ち合わせ |
| 8 月 | 第 1 回地域で知り合い・支えあうコミュニティサロン事業・反省会 |
| 10 月 | 企画・運営等の打ち合わせ |
| 11 月 | 第 1 回地域で知り合い・支えあうコミュニティサロン事業・反省会 |
| 平成 28 年 3 月 | 全体集計終了 |

II. 活動の実際および経過

今年度 5 月に津中部東地域包括支援センターより依頼を受け、8 月 2 日（日）・11 月 1 日（日）に開催されたコミュニティサロン事業の中で地域住民の健康チェックを実施した。第 1 回目の 8 月開催時で、会場・機材の準備に時間がかかること、整理券を早くから並んで待っている人がいたことの反省から、第 2 回目の 11 月開催時は会場・機会準備を 1 時間早めて 8 時から機材調整、整理券は 8 時 30 分から配布した。

当日の地域コミュニティサロンには、地域住民の 100 名以上の参加があり、本事業の「地域住民の健康チェック」は整理券 30 枚配布、希望者全員の健康チェックを実施出来た。

【健康チェック時の意見（一部抜粋）】

- 3 日間血圧の薬を飲んでいなかったけど、今日の測定値が高かったの、やっぱり薬は大事だと思った。今日からちゃんと再開します。1 日 1 回 1 錠、血圧の薬だけなので、忘れやすい（70 代男性）。
- 健康に気を付けているから、血圧も貧血の値もいいでしょ？（60 代女性）
- 血圧の薬を内服しています。かかりつけの先生から言われてちゃんと毎日飲んでます（80 代男性）。
- ストレスもためないように、ストレッチをしたり、親族や友人と運動したりと工夫しています（70 代女性）。

- 貧血の測定は、初めての体験でした。手軽に測定できてよかったです（40代女性）。
- 血圧も貧血もはじめて測定しました（10代女性）。
- いろいろタダで見てもらえてよかったですわ。今年は測定が充実してますね（60代男性）。
- 血圧が私はいつも低いので、いろいろ気を付けてるわ（60代女性）。
- 健康って大事ですよ。食事は青魚中心に食べるように心がけています（60代女性）。
- 病気がばかりなので、病院に行かずに気軽に測れるのでうれしい（70代女性）。
- 病気のあとやで、体のことが心配なのでこさせてもらった（60代男性）。
- 結果を見て安心しました（60代女性）。
- 自分でもストレス溜まっているんちゃうかなあと思ってた。やっぱり高かったから、気を付けますわ（60代男性）。
- もっとストレスが高いかと思ってたけど、ストレスに対応できているってこっちな（40代女性）。
- この結果で悪かったら、医者に行ってみやなあかなあ（70代女性）。
- やっぱり疲れとる感じはする。気をつけなあかなあ。（60代男性）。
- こんなんでストレスが測れるんや、すごいなあ。こんなは始めてやな（60代男性）。
- 病気のことがあるから、ストレスが高いんかなあ。気をつけなあかなあ（80代女性）。
- この結果でどっか悪いところあるの？特にないか、なら安心や（70代男性）。



Ⅲ. 活動の結果と評価

8月・11月実施の事業とも、①実施事業に関する企画・運営等の打ち合わせ（3回）、②当日健康チェック担当として参加（血圧・体脂肪・貧血・骨密度・ストレスチェック等実施）、③健康チェック参加者30名のアンケートの実施・集計、④反省会実施（1回）を具体的計画内容の通り実施出来た。

参加者の感想からも、事業所等と協力して地域住民の健康チェックを行う事業は、子どもから高齢者、健康な方から障害をもった方やその家族が集まるコミュニティづくりを応援する事業として地域貢献できていたと思われる。

Ⅳ. 今後に向けての計画

本事業は、本学の看護・保健の専門分野の協力、本学の地域貢献活動の広報的効果などが期待できるため、次年度も地域のコミュニティの活性化に貢献していきたい。

V. 講師派遣事業

1. 出前講座

担当者：出前講座テーマ登録教員、地域交流センター

【事業要旨】

教員が、自身の教育研究、社会活動の内容や成果をもとに対処可能な出前講座のテーマを提案し、小・中・高校生から看護職者や一般の人々まで広く県民を対象とした講座を出張して行う。

【地域貢献のポイント】

本学教員の持つ知識や技術、研究の成果を県民に還元することによって、より多くの県民の看護や医療、健康に対する関心を高めるとともに県内の看護の質向上に貢献する。

I. 活動計画

<数値目標>

過去3年間の出前授業と公開講座講師派遣の平均実施件数（73件）を維持できる。

<実施計画>

平成26年度まで実施していた出前授業と公開講座講師派遣を一本化し、出前講座として下記のスケジュールで実施する。

- ・平成27年3月～4月：全教員より出前講座のテーマを募集する。
- ・4月中旬：出前講座の案内ブックレットを作成し県内各所に送付、およびホームページに掲載し広報活動を行う。
- ・4月中旬～11月30日：申し込みを受け付ける。
- ・5月頃～平成28年3月末：依頼があれば随時担当教員との日程調整を行い、実施する。
- ・講座の開催案内を外部にも広報することについて依頼者から了解が得られた場合は、依頼者側と本学との共催による公開講座として実施する。

II. 活動の実際および経過

1. テーマ募集

平成27年3月、全教員より出前講座のテーマを募集した。4月に新規採用教員から応募されたテーマを追加し、今年度は43題のテーマが登録された（表1）。

2. 広報

4月中旬、登録された出前講座のテーマと看護職キャリアデザイン講座ステップI（高等学校への出前講座）を一覧表にして案内ブックレットを作成し、県内各所に送付した。同時に本学ホームページに掲載した。

3. 募集および実施

広報開始後から申し込みの受け付けを開始し、申込期限は11月30日までとした。申し込みのあったテーマのうち担当教員との日程が調整できたものが実施に至った。

また、看護職キャリアデザイン講座ステップⅠの申し込み期限は4月30日とし、4月から7月初旬に実施した。

講師料は無料で、交通費のみ依頼者側の負担とした。(ただし、高等学校からの依頼で大学広報を兼ねるものについては交通費を本学負担とした。)

Ⅲ. 活動の結果と評価

平成26年度まで実施していた出前授業と公開講座講師派遣を今年度から出前講座として一本化した。

今年度も県内の医療機関、自治体、学校などから多くの依頼があり、講座の参加者も一般人から学生、専門職業人まで多岐にわたった。申し込み件数は100件で、そのうち97件を実施することができた。この中の23件がキャリアデザイン講座であった。また13件は講座の依頼者側と本学共催の公開講座として本学のホームページ等で外部にも広報した。

出前講座に対する満足度は平均98%、キャリアデザイン講座の満足度は平均93%といずれも高く、ニーズに応えることができたと考える。実施した出前講座を表2に示す。

一部の教員の登録テーマに対して申し込みが集中したものがあり、年度当初に案内した出前講座のテーマ43件のうち15件については申し込み期限を待たずに受け付けを終了した。(受け付け終了の基準は一教員の実施件数が5件を超えた場合とした。)

Ⅳ. 今後の課題および今後に向けての計画

出前講座の満足度は非常に高く、地域住民のニーズに応えることができたと思われる。担当教員には、学部の授業、臨地実習、会議等多忙な業務の中で講座を実施してもらったが実施件数は著しく増加しており、中には土・日・祝日や夜間(19時、20時等)の依頼もあった。教員に過度の負担がかからないよう、実施日数上限の引き下げや実施時間帯の限定など、今後何らかの対策が必要であると考えられる。

[表 1]平成 27 年度 出前講座テーマ一覧

A<健やかな暮らしのために>

| No | テーマ | 対象者 | 概要 |
|------|----------------------------|----------------------|---|
| A-1 | 日常生活の中で運動を | 一般 | 特別な道具を使わずとも日常生活の中でできるエクササイズ（有酸素運動・筋力トレーニング）の方法を身につけましょう。 |
| A-2 | もっと知りたい認知症～認知症本人と家族介護者の語り～ | 一般 | 認知症になる方は増え続けています。認知症の方や家族介護者が語った音声や映像を通して「認知症という病の体験」について考えてみたいと思います。 |
| A-3 | 血栓症の発症原因とその治療薬 | 一般 | 近年、エコノミークラス症候群（旅行者血栓症）に代表される深部静脈血栓症の患者数が激増しています。本講座では、種々の血栓性疾患について、個々の発症原因と共に、それぞれの治療薬や日常的予防法を分かりやすく解説します。 |
| A-4 | 薬に関する四方山話 | 一般 | 近年、巷には薬の情報が氾濫し、薬局でも様々な薬を容易に入手ができますが、その使用に際しての知識は十分とは言えません。本講座では、風邪薬等の一般的によく使われる薬の正しい使い方等について、その発見・開発の経緯を含めて解説します。 |
| A-5 | 避難リュックづくりから防災・減災を考えよう | 自治会などの地区組織、学校関係 | 季節や時間、年齢や健康状態、家族構成などによって災害の備えは変わります。避難リュックに入れる物品の検討を通して災害時の健康管理を皆さんで考えましょう。 |
| A-6 | ICFの視点を活かしたケアプランづくりのコツ | 主に在宅分野で従事する医療職・介護職の方 | 「ICFってなに？」という基礎編から、ICFを用いた記録の書き方といった応用編まで、ご要望に合わせた内容で実践での活用のヒントをお伝えします。 |
| A-7 | アデイクションについて知ろう | 中学生 高校生 | たばこ・アルコール・薬物等が人体に及ぼす影響についての知識を深め、自身や周囲の健康について考えます。 |
| A-8 | 女性の健康—女性特有の悩みを解消— | 成人女性 | 毎日を笑顔で過ごすために、月経と上手に付き合う方法を一緒に考えましょう。リラクゼーションや軽い運動を取り入れた講座です。 |
| A-9 | 大切な人のこころの SOS 見逃していませんか | 一般 大学生 高校生 | うつ症状や不眠やイライラなど、こころの病に見られる症状と対応について、自分や周りの人のために学んでみませんか。 |
| A-10 | ストレスをぶっ飛ばせ | 中学生 | ストレスに関する正しい知識を持ち、態度・習慣を身につけることは大切です。実際にストレスの解消方法（ストレッチ・呼吸法・音楽）の体験もします。 |
| A-11 | 思春期精神保健の早期支援ネットワークの構築 | 教育、行政、医療機関の関係者 | 教育委員会・保健所・医療機関などが連携した、四日市の子どものこころの健康を支援するネットワーク活動を紹介します。次世代を担う子どもの健やかな成長のためにできることを模索します。 |
| A-12 | 心肺蘇生法をマスターしよう！ | 一般 | 心肺蘇生法は、いざという時に実践できなければ助かる命を救うことはできません。簡易的な一時救命処置（心臓マッサージおよび AED の取り扱い）について、実際に体験していただきます。 |

| | | | |
|------|-----------------------|--------------------------|---|
| A-13 | 救急車の適切な利用について 知ろう！ | 一般 | 救急車は病院までのタクシーではありません。救急要請をする際に、確認するべき症状について理解し、救急要請が必要か否かを判断できるようにする必要があります。 |
| A-14 | 乳幼児の成長発達とやる気を育てる関わり方 | 乳幼児の子どもの保護者、子育て支援者、職員等 | 乳幼児期の子どもたちの生活習慣を科学的にデータからみると「なるほど」がいっぱい。子どもの「ころ」と「からだ」の成長発達を学びましょう。 |
| A-15 | 子どもの自己肯定感を育てる関わり方 | 小・中学生の保護者および教職員等 | 事前に対象学校等の依頼に応じた生活のデータを具体的に示しながら、一緒に児童・生徒の自己肯定感を育てる関わり方を考えていきましょう。 |
| A-16 | タッピングタッチで子どもと体をリフレッシュ | 幼児～高齢者 | 家族、友人、同僚同士、お互いのケアの方法としてタッピングタッチを行い、心と体をリラクゼーションさせ、ストレスを減らしたり、関係性をよくするために使います。 |
| A-17 | 効率的な英語学習方法について | 英語の学習方法に興味のある方 | 英会話や資格試験の学習方法をご紹介します。受講生の英語のレベルは問いません。英語を効率よく習得する方法や資格試験の対策にご興味のある方は是非ご参加ください。 |
| A-18 | 知っておきたい！「女性のころとからだ」 | 一般女性 | 女性自らが自分のころとからだからだに向き合い、女性特有の心身に生じる変化を把握することは充実した人生を送るうえでとても重要です。健康管理・QOL 向上の視点からセルフケアについて学びましょう。 |
| A-19 | 月経と上手につきあおう | 月経にまつわる症状で悩んでいる女性 | いろいろな心身のサインを正確にキャッチすることが月経と上手につきあう第一歩です。月経にまつわる症状についてセルフチェックし、月経との上手なつきあいを学びましょう。 |
| A-20 | 思春期男子のころとからだを理解しよう | 主に中学生や高校生の男子に関わる方 | 思春期は「ころ」も「からだ」も大きく変化する時期です。しかし、男子は女子ほどその変化に注目されていなかったり、性教育の不足さも指摘されています。思春期男子の特徴を知り、皆さんでよりよい関わり方を考えていきましょう。 |
| A-21 | 楽しく・おいしく減塩しましょう！ | 一般 | 健康増進、生活習慣病予防のためにも減塩は重要です。そこで、地域にお住まいのみなさんに無理なく簡単に減塩できる秘策をお教えします。 |
| A-22 | ノーマライゼーションの実践 | 一般 | 「ノーマライゼーションって、実践レベルではどうしたらいいの？」という疑問について、様々な事例から学び、一緒に考えてみましょう。 |
| A-23 | 子どもからおとなまでの眠りと健康 | 一般 | 睡眠に着目し、ふだんの日常生活を振り返りながら、健康をめざして、ぐっすり眠るための工夫や食事、呼吸法、体操についてご紹介いたします。 |
| A-24 | 知ってるようで知らない感染看護 | 医療施設・保健福祉関係機関の職員から一般の方まで | 最新の感染症の話題をまじえて、感染症対策とその看護についてお話致します。ご要望に応じて授業しますので、お気軽にご依頼ください。リピーターも歓迎します。 |
| A-25 | 職場のメンタルヘルス | 医療職 | 感情労働といわれる医療職のメンタルヘルスについて解説します。 |
| A-26 | 社会的活動としての話すと・聴くこと | 高校生・一般県民 | 当たり前のように行っている話すと・聴くことですが、じつはとても精密な方法にもとづいて作り上げられています。このことを具体的なコミュニケーションの事例検討を通じ、振り返ってみましょう。 |
| A-27 | 身振りから見た社会 | 高校生・一般県民 | 普段私たちが何気なく行っている身振りに注目することで、私たちがどのような社会に暮らしているのかを理解していきましょう。 |

B < 将来の職業選択のために >

| No | テーマ | 対象者 | 概要 |
|-----|----------------------|------------------|---|
| B-1 | 助産師を知ろう | 中学生、高校生 | 看護職に興味のある中高生を対象に、助産師がどのような仕事をしているのかについて紹介し、いのかの誕生に携わるだけでなく女性の一生を支える助産師の魅力をお伝えします。 |
| B-2 | 看護職（保健師、助産師、看護師）のしごと | 中学生、高校生 | 保健師、助産師、看護師の社会における役割（就業場所・内容を含む）を説明し、将来の職業選択の一助になるような授業にしたいと思います。 |
| B-3 | 看護師になるために～看護大で学ぶこと～ | 中学生、高校生 | 看護の仕事の内容や看護師になるためにの方法についてお話しします。また、看護大学でどのようなことを学ぶのか、大学での生活についても紹介します。 |
| B-4 | 保健師・助産師を知ろう！ | 中学、高校生 | 看護職の中でも保健師、助産師に焦点を当てて紹介します。保健師、助産師がどのような場で、どのような対象にどのような働きかけをしているのかを紹介し、看護職としての職業イメージを明確にします。 |
| B-5 | 男性看護職者を知ろう | 看護職をめざす男子中学生・高校生 | 看護職をめざす男子中学生・高校生の方に看護職の魅力や男性看護職の現状についてお話しします。 |
| B-6 | 大学で学ぶこと | 高校生 | 希望者は、誰でも選ばなければならぬ大学に入学できる状況の今日、改めて大学で学ぶことの意義について考えます。 |
| B-7 | 看護の仕事について | 小中学生 | 将来の職業選択の一助となるように、小中学生を対象に、一般病院に勤務する看護師の仕事を中心に話します。 |

C < 高めよう看護の力 >

| No | テーマ | 対象者 | 概要 |
|-----|----------------------|--------------|--|
| C-1 | 安全・効果的な運動指導の方法 | 医療・福祉関係者 | 安全で科学的な運動指導方法の基本（有酸素運動・筋力トレーニング）を確認しましょう。 |
| C-2 | 対象者にやさしい！持ち上げない移乗介助 | 医療・福祉関係者 | 用具を積極的に用いる、対象者に優しい移乗介助技術を体験しましょう。 |
| C-3 | はじめの臨地実習指導 | 看護職者 | 看護にとっての臨地実習の位置づけや、看護学生の現状、臨地実習指導者としての役割等、はじめて実習指導を行う看護職者の方に実習指導の基本について解説します。 |
| C-4 | 母子保健における医療と地域の連携について | 勤務助産師、小児科看護師 | 地域でフォローが必要な乳幼児、その保護者はどのように地域で生活しているのか、入院中からの地域との連携方法、必要性について学ばせセミナーです。 |
| C-5 | 高齢者虐待予防（基礎編） | 在宅・施設専門職 | 社会的問題である高齢者虐待の予防について具体的に考えていきます。虐待の特徴（虐待者・被害者・専門職）を踏まえ、基本的な介入方法についてお話しします。 |

| | | | |
|-----|-----------------------------|------------------|--|
| C-6 | 高齢者虐待予防（保護・分離編） | 自治体関係部署専門職・在宅専門職 | 高齢者虐待対応において、高齢者の生命危機などから保護・分離をする際のアセスメントの視点と介入方法についてお話しします。 |
| C-7 | 見取り図から生活や家族の関係を捉える | 在宅専門職 | 見取り図は、そこに住んでいる人の生活状況や家族の関係を捉えるときに有効な方法です。幾つかの見取り図を使いながら生活等の捉え方を学びます。 |
| C-8 | 個人・家族を支える保健師の役割とは | 自治体保健師 | 実践事例における個人や家族の健康問題について、家族理論やモデルを用いて検討し、保健師としての支援の方向性を明らかにします。 |
| C-9 | 患者さんの思いに寄り添えるコミュニケーションをめざして | 看護職者 | 参加者の苦手な場面のコミュニケーションについてプロセスレコードを用いて振り返ります。自分のコミュニケーションのクセや改善のポイントについて考えましょう。 |

D<<看護職キャリアデザイン>>

| 学習内容 | 対象 | 概要 |
|--|-----------------------|--|
| 「看護とはどんな仕事」 「看護師・保健師・助産師の職務内容」 「看護の社会の現状」 「勤務体制・給与」 「看護師のキャリアアップ」 「仕事を続けるためのサポート体制」 など | 看護系大学への進学に興味を持っている高校生 | この授業は、看護職をめざす皆さんがどのようにキャリアを積んでいくかを学ぶ講座です。看護のすばらしさのみでなく、「看護の道」を進むための基本となる姿勢や学習方法を学んでください。この授業を通して、「親や先生に勧められたから」という理由だけでなく、あなた自身で「看護職をめざそう！」という気持ちを持ってもらえたらと思います。 |

[表2] 1)平成27年度 出前講座の実績

(平成28年2月1日現在)

| 開催日 | 依頼主 | テーマ | 参加人数 | 地域貢献からみた成果（担当教員の報告による） | 担当教員 |
|----------|----------------------|-------------------------------|------|--|-------|
| 1 6月15日 | 三重県社会福祉協議会 | 職場のメンタルヘルス | 47 | 県内の医療・福祉分野に従事されている人々に、メンタルヘルスの重要性を説明し、意識喚起の契機となった。 | 小池 敦 |
| 2 6月22日 | 津市立のむら幼稚園 のびっこクラブ | 乳幼児の成長発達とやる気を育てる関わり方 | 21 | 「のむら幼稚園のびっこクラブ」の機会を利用して地域の未就園児の保護者の皆さんに子どもの発達や健康について理解していただく機会となった。地域の幼稚園を活用して取り組めた「子どもの健康」「感染予防」は、衛生管理の意識の醸成と知識の涵養を高めるためのきっかけを提供でき、家庭での衛生管理の啓発にとっても有意義であった。 | 宮崎つた子 |
| 3 6月24日 | 第二岩崎病院 | 心肺蘇生をマスターしよう！ | 30 | 医療および介護職を対象に、最新の心肺蘇生ガイドラインに沿った一次救命処置の方法を実際に体験してもらったことで、急変場面に遭遇した時に対応できる能力を身に付けてもらった。また、定期的な研修の必要性も理解していただけたので、地域貢献として妥当であったと考える。 | 長谷川智之 |
| 4 6月27日 | 東藤原小学校 | 心肺蘇生をマスターしよう！ | 27 | 一般的な一次救命処置に加え、溺水時の対応について教授した。AEDの取り扱いや胸骨圧迫および人工呼吸を体験していただき、いざという時の対応能力および定期的な研修の必要性を理解いただけたので、地域貢献として妥当であった。 | 長谷川智之 |
| 5 7月7日 | 三重県健康福祉部医療対策局健康づくり課 | 個人・家族を支える保健師の役割とは | 21 | 保健師の力量形成に必要な家族アセスメント能力のスキルのアップの一助となったと考える。 | 大越扶貴 |
| 6 7月8日 | 四日市消化器病センター | はじめての臨地実習指導 | 11 | はじめて臨地実習を受け入れる施設であるとのことと、参加者の関心は高く、臨地実習指導の基礎はお伝えすることができたと考えます。 | 名倉真砂美 |
| 7 7月9日 | 特別養護老人ホーム百楽 | 心肺蘇生をマスターしよう！ | 23 | 医療および介護職を対象に、最新の心肺蘇生ガイドラインに沿った一次救命処置の方法を実際に体験してもらったことで、急変場面に遭遇した時に対応できる能力を身に付けてもらった。また、定期的な研修の必要性も理解していただけたので、地域貢献として妥当であったと考える。 | 長谷川智之 |
| 8 7月14日 | 大紀町地域包括支援センター | ●薬に関する四方山話 | 29 | 出席者のうち、高血圧や血行障害の既往のある方々に対しては降圧薬や血栓症治療薬を使用する際の注意点を解説することができ、それ以外の出席者の方々には薬に関する一般的なことを概説できた。 | 林 辰弥 |
| 9 7月15日 | 老人保健施設シルバークア 豊壽園 | 知っているようで知らない感染看護 | 225 | 高齢者介護施設と保育園の職員を対象にした感染管理研修の講師を担うことができた。参加人数が、申込みいただいた時の5～6倍となっていたので、参加者に興味のある研修を開催することができたと考えられる。 | 脇坂 浩 |
| 10 7月22日 | 四日市消化器病センター | 対象者にやさしい！持ち上げない移乗介助 | 15 | 身体活動が不自由な患者さんの移動に関して看護・介護の負担が大きき問題になっているとのことであった。本講座をきっかけとして、シートやボードを用いた方法を少しずつ取り入れ入っていきたいとのことである。 | 白石葉子 |
| 11 7月26日 | 相賀補婦人会 | ●もつと知りたいたい認知症～認知症本人と家族介護者の語り～ | 89 | 人口が600人弱で高齢化率50%を超えた地域において、住民の15%を超える参加者があったことから、住民の関心が高いテーマを提供できたと思われる。 | 岡本恵里 |
| 12 7月27日 | 南島メデカイカルセンター | 知っているようで知らない感染看護 | 50 | 医療施設と高齢者介護施設の職員を対象にした感染管理研修の講師を担うことができた。講義内容の希望であった食中毒予防に関する講義を実施することができた。 | 脇坂 浩 |
| 13 7月30日 | 津市委公民館 | ●子どもからおとなまでの眠りと健康 | 13 | 健康な生活を送るために、自身の日常生活を振り返る機会となり、呼吸法や運動を取り入れたいとの参加者の意見があり、暑い夏の寝苦しい時期におけるよりよい眠りのために、生活を見過し、具体的な工夫を知る機会となった。 | 二村良子 |
| 14 8月4日 | 快晴クラブ | 薬に関する四方山話 | 33 | 出席者のうち、高血圧や血行障害の既往のある方々に対しては、その方々からの質問に丁寧に回答することにより降圧薬や血栓症治療薬を使用する際の注意点を解説することができ、それ以外の出席者の方々には薬に関する一般的なことを概説できた。 | 林 辰弥 |

●は公開講座

| | | | | | | |
|----|-------|----------------------------------|---|----|--|-------|
| 15 | 8月5日 | 菟野町教職員研修協議会 | 避難リユクづくりから防災・減災を考えよう | 9 | 菟野町の特性、学校の構造など基盤となる条件、また個人特性、場面（季節、曜日、天候等）、様々な条件を想定し、実効性のある準備を日頃から行っていく必要性を理解していただくとともに、養護教諭の立場から学校（児童・生徒、保護者、教職員）、地域に防災・減災の観点でどのように働きかけていくかを話し合ったことができた。このことは菟野町における防災拠点と一部となる学校での実効性のある準備を進めていただくことに寄与しうるものであったと考える。また、参加した学生にとっても地震の防災対策を振り返るだけでなく、看護職として災害発生時に備えるどのような準備が必要かを考える機会ともなったと考える。 | 多次淳一郎 |
| 16 | 8月6日 | みえアカデミックセミナー (三重県生涯学習センター) | ●予防医療に貢献する中高年齢双子の研究 —双子の研究からみえる長生きの秘訣— | 75 | | 早川和生 |
| 17 | 8月7日 | 津市社会福祉協議会 一志支部 | タッピングタッチでどこをと体をリフレッシュ | 11 | 「老人会でもやってみようと思う」というご意見をいただき、今回の講座を通じて、より多くの方への波及を期待できる。 | 中北裕子 |
| 18 | 8月18日 | 津市地域包括支援センター 社会福祉士部会 | 高齢者虐待予防（基礎編） | 9 | 専門職のスキルアップによって、虐待の早期発見や早期対応がより確実となったと考える。 | 大越扶貴 |
| 19 | 8月20日 | 津市立豊津小学校 | 子どもの自己肯定感を育てる関わり方 | 15 | 学校側と事前打ち合わせや希望内容を取り入れて準備することで期待される研修会効果に結びついていたようであった。 | 宮崎つた子 |
| 20 | 8月20日 | 四日市羽津医療センター | はじめての臨地実習指導 | 12 | これから臨地実習指導を担当する参加者が多く、具体的な質問もあり、臨地実習指導の基礎はお伝えすることができたと考えます。 | 名倉真砂美 |
| 21 | 9月3日 | 津市立黒田小学校 | 子どもの自己肯定感を育てる関わり方 | 12 | 学校側と事前打ち合わせや希望内容を取り入れて準備することで期待される研修会効果に結びついていたようであった。 | 宮崎つた子 |
| 22 | 9月6日 | 健康かわごえ・推進協議会 (上吉公民館) | ●タッピングタッチでどこをと体をリフレッシュ | 24 | 災害やストレスの多くがかかる場面での、共助としてのリラクゼーション法を伝えることができ、万が一の備えにはなっていないかと考える。 | 中北裕子 |
| 23 | 9月11日 | 伊賀市立新居小学校 | 助産師を知ろう | 57 | 助産師の仕事を通じている生命の大切さを伝えることにより、児童が自分のことを大切にし、人への思いやりを持てるようになることが期待される。また、助産師の魅力を伝えることにより、助産師に興味関心をもつ児童の増加が期待される。 | 岩田朋代 |
| 24 | 9月25日 | 県立津西高等学校 | 大学で学ぶこと | 15 | 看護への進学を考えている高校生を対象に、看護の魅力を伝えた。 | 小池 敦 |
| 25 | 9月26日 | くわな生き生き教育研究協議会 保健教育部会小学校②グループ | 避難リユクづくりから防災・減災を考えよう | 34 | 実施校での既習の防災に関連した知識と児童個々の生活体験をもとに“避難した後”のことを児童同士で考え深め合ってもらったことができた。実施校は古くから代々住み続ける世帯の多い地域であるとのことで、児童が今回の学びを家庭で共有したり、また学校内で下級生に伝達することで地域全体のいわゆる“減災力”の向上につなげられるのではないかと考える。 | 多次淳一郎 |
| 26 | 10月3日 | 総合心療センター ひながし | 患者さんの思いに寄り添えるコミュニケーションをめざして | 60 | 精神科看護師に必要とされる自己理解や、治療的な患者看護関係の振り返りが、日々の実践への参考になったと考えられる。 | 北 恵都子 |
| 27 | 10月5日 | 県立昂学園高等学校 | タッピングタッチでどこをと体をリフレッシュ | 8 | 参加者した6名の学生は、医療及び福祉関係への進学就職内定者であり、就職してからのケアに役立てられるものだと考える。 | 中北裕子 |
| 28 | 10月9日 | いなべ市健康研究会 | 大切な人のこころのSOS見逃していませんか | 23 | 精神疾患の症状や早期治療の意義についての新たな知識の獲得となっていたと考えられる。 | 北恵都子 |
| 29 | 10月9日 | 県立名張高等学校 定時制 | アディクションについて知ろう | 30 | 対象者に、依存症についての理解を講義することで、依存症の予防、また対象者の周りにいる依存症者への支援について、考えてもらうことができたと思われる。 | 羽田有紀 |

●は公開講座

| | | | | | | |
|----|--------|--------------------------|----------------------------|----|---|-------|
| 30 | 10月14日 | 国立三重病院 | 高齢者虐待予防（基礎編） | 20 | 家庭内の虐待の現状を伝え、病院が早期発見・介入の場であることを再認識していただいたことは、今後の高齢者の権利擁護の取り組みに繋がっていくと思われ。 | 大越扶貴 |
| 31 | 10月17日 | 南小松町婦人会 | 楽しく・美味しく減塩しましょう！ | 36 | 参加者から、減塩について積極的に取り組もうとする声が多く聞かれた。参加者が減塩を意識し、日々の食生活を改善することで参加者の家族を含め地域住民の健康維持・増進に貢献できたと考える。 | 前田貴彦 |
| 32 | 10月17日 | 健康かわごえ・推進協議会 (当新田公民館) | ●大切な人のこころのSOS | 23 | 対象者の多くは高齢者であったが、家族や自分自身のことの変調に気づくための知識獲得の場になったと考えられる。 | 北恵都子 |
| 33 | 10月19日 | 松阪市社会福祉協議会 在宅福祉サービス課 | 知っているようで知らない感染看護 | 71 | 高齢者介護施設関連の職員を主な対象に、感染管理研修を担うことができ、参加人数が申込みのときより、20名ほど多くあったので、参加者の興味のある研修を開催することができたと考えられる。 | 脇坂 浩 |
| 34 | 10月19日 | 津税務署 | 楽しく・おいしく減塩しましょう！ | 50 | 参加者から、減塩について積極的に取り組もうとする声が多く聞かれた。参加者が減塩を意識し、日々の食生活を改善することで参加者の家族を含め地域住民の健康維持・増進に貢献できたと考える。 | 前田貴彦 |
| 35 | 10月21日 | 県立四日市南高等学校 | 大学で学ぶこと | 24 | これから進路を決定する高校2年生に対して、看護の魅力を伝え、共に、進路選択に役立つ情報の提供を行った。 | 小池 敦 |
| 36 | 10月22日 | 明和町長寿介護課 地域包括支援センター | 見取り図から生活や家族の関係性を捉える | 23 | 見取り図の描き方の習得は、住宅改修や見取り図を用いた事例検討に有効である。また見取り図や居住環境から利用者や家族の何をアセスメントするのかが理解できれば、精度の高い対象者把握が可能となる。 | 大越扶貴 |
| 37 | 10月22日 | 県立津東高等学校 | 保健師、助産師を知ろう！ | 92 | 高校生が、今後の進路を考えるにあたり、参考としてもらえると考える。 | 中北裕子 |
| 38 | 10月24日 | 三重県行政薬剤師会 | タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ | 7 | 医療職である薬剤師の方にお伝えできたことで、専門職種の方々から浸透していくきっかけづくりに寄与できたと思う。 | 中北裕子 |
| 39 | 10月24日 | 熊野病院 | 乗に関する四方山話 | 30 | 出席者の方々に乗に関する一般的なことを概説できた。 | 林 辰弥 |
| 40 | 10月25日 | ナーシングホームもも・いなべ | もっと知りたい認知症～認知症本人と家族介護者の語り～ | 12 | 本講座は一般の方々（地域住民）を対象に開講していたが、今回はヘルパーやケアマネジャー等の有資格者が対象であった。しかし講義終了の雑談や、アンケートの自由記述欄への記載内容から、日頃の業務において多くの認知症の方々と接している体験を通して、講義内容を理解し、今後に向けての課題を見出し下されたものと思われた。 | 岡本恵里 |
| 41 | 10月28日 | 津市社会福祉協議会 | 知っているようで知らない感染看護 | 31 | 高齢者介護施設関連の職員を主な対象に、感染管理研修を担うことができ、事前に講義内容の希望を頂いていたので、希望に沿った研修を開催することができたと考えられる。 | 脇坂 浩 |
| 42 | 10月31日 | 北小松婦人会 | 子どもからおとなまでの眠りと健康 | 30 | 呼吸法や運動を取り入れたらいいとの参加者の意見があり、また、これまでのラジオ体操などの実施してきたことの継続の重要性がわかった。との意見があり、健康な生活を送るために、自身の日常生活を振り返る機会となった。 | 二村良子 |
| 43 | 11月9日 | 中勢森林組合 | 大切な人のこころのSOS見逃していませんか | 44 | 事業所における管理者と従業員とのメンタルヘルスへの意識の向上に貢献できたのではないかと考えられる。 | 北恵都子 |
| 44 | 11月10日 | 健康かわごえ・推進協議会 (亀崎公民館) | ●子どもからおとなまでの眠りと健康 | 30 | 健康な生活を送るために、呼吸法や運動、リラクゼーションにより講座終了後、「体がすっきりした」「ふだん体がかたくなった」と、睡眠とご自身の日常生活を振り返る機会となった。 | 二村良子 |
| 45 | 11月11日 | 鈴鹿市手話サークル とちの実 | ノーマライゼーションの実践 | 20 | ノーマライゼーションの中でも実現が難しい人間関係などのソフト面について、住民の方と話し合う中で具体的に考えることができた。 | 大村佳代子 |
| 46 | 11月17日 | マーチの会 | 大切な人のこころのSOS見逃していませんか | 7 | 一般市民に対するうつ症状、睡眠障害に関する正しい知識の普及と、こころの健康に関する意識づけにつながったものと考えられる。 | 北 恵都子 |

●は公開講座

| | | | | | | |
|----|--------|--------------------------------|-------------------------------------|----|---|-------|
| 47 | 11月18日 | 三重県地域包括・在宅介護支援センター協議会 | ICFの視点を活かしたケアプランづくりのコツ | 29 | 地域包括ケアの中核を担う地域包括支援センター職員へのケアマネジメント能力の向上に寄与する機会となり、このことは今回の対象地域である中勢地域における地域包括ケアの推進の一助にもなるかと考える。 | 多次淳一郎 |
| 48 | 11月20日 | デイサービスセンター げいのう逢春園 | 薬に関する四方山話 | 40 | 出席者の方々に薬に関する一般的なことを概説できた。 | 林辰弥 |
| 49 | 11月22日 | みえアカデミックセキナー移動講座 (桑名市中央公民館) | ●認知症について考える | 78 | 年配の方や介護しているご家族など、複数の方々から質問があったことから、認知症に関する課題が山積していると実感しました。今回の移動講座は短い時間でしたが、参加者の方々にご自身やご家族の認知症について考えて頂く機会となったのではないかと思います。 | 小松美砂 |
| 50 | 11月24日 | 下友田老人クラブ | タッピングタッチでどころと体をリフレッシュ | 31 | タッピングタッチと共に、保健師としてミニ健康教育も行ったことで、地域住民の健康増進に寄与できたと考える。 | 中北裕子 |
| 51 | 11月25日 | 県立神戸高等学校 | 看護の仕事について | 34 | 将来の仕事として「看護職」も選択肢の一つと考えている高校生に対して、本講座を行ったことで、具体的な将来像を考え、大学で学ぶことができたこと等に準備しておくこと等をイメージしてもらったことができています。 | 灘波浩子 |
| 52 | 11月25日 | 鈴鹿市立鼓ヶ浦公民館 | ●日常生活の中で運動を | 21 | 本講座の方法を、自宅でも、また家族と共に実施してみようという反応が多くあり、地域住民の健康づくりの役立ちと考えると考えられる。 | 白石葉子 |
| 53 | 11月26日 | 三重県いなば園 | タッピングタッチでどころと体をリフレッシュ | 42 | タッピングタッチを受けている施設利用者の様子から、リラックスしていただけなのか？と感じられたが、効果は推測にすぎない。職員にも、タッピングタッチを受けていただけたのではなないかと振り返る。 | 中北裕子 |
| 54 | 12月7日 | 松阪市立中部中学校 | ストレスをぶっ飛ばせ | 23 | 学校の保健委員会の生徒に行った。今後、クラスの持ち帰り、内容を伝えていくように話したので、地域の生徒全員に貢献できると考えられる。 | 井倉一政 |
| 55 | 12月8日 | 輪中地区養護教諭委員会 | 思春期男子のころとからだを理解しよう | 7 | 参加者からは、「今まで知らなかったことが理解できた」「思春期男子への関わりを振り返る機会になった」との発言が聞かれ、養護教諭にとって有意義な機会であったと考える。また、今後思春期男子の身体・精神・社会的特徴を踏まえたより有効な関わりが期待できる。 | 前田貴彦 |
| 56 | 12月13日 | 三重県鍼灸マッサージ師会 | ●薬に関する四方山話 | 30 | 鍼灸師及び一般の方々々に薬に関する一般的なことを概説できた。 | 林辰弥 |
| 57 | 12月14日 | デイサービスセンターげいのう逢春園 | 楽しくおいしく減塩しましょう | 30 | 参加者から、減塩を前向きに考える声が多く聞かれた。参加者はもとより施設職員の減塩に対する意識が高まることで、地域住民とその家族、施設利用者の健康維持・増進に貢献できたと考える。 | 前田貴彦 |
| 58 | 12月15日 | 子育て支援マーチの会 | 社会的活動としての話すこと・聴くこと | 8 | アンケートでの感想によると、意図通りの講義が実施的だと考える。 | 浦野茂 |
| 59 | 12月16日 | 鳥羽市健康福祉課 地域包括支援センター | 知っているようで知らない感染看護 | 30 | 鳥羽市健康福祉課地域包括支援センター主催の「平成27年度第5回ケアマネ・サービス事業所研修会」の講師を担うことができた。 | 脇坂浩 |
| 60 | 12月19日 | 伊賀市立新居小学校 | ストレスをぶっ飛ばせ | 59 | アンケートの中に、聞いたり体験した内容を家族にも伝えてくださる旨の記載が見られ、波及効果が認められた。 | 井倉一政 |
| 61 | 12月21日 | 津中部西地域包括支援センター | ●社会的活動としての話すこと・聴くこと | 21 | ボランティア活動として傾聴を行っている方も多く、積極的に聴いていただいたように思う。 | 浦野茂 |
| 62 | 1月8日 | 宗教法入 彰見寺 | 知っていいおきたい！「女性のころとからだ」 | 20 | 老年期にある女性が自らの心身に生じる変化を理解し、セルフケア能力を高めることにより、QOL向上に寄与するものと考える。 | 永見桂子 |
| 63 | 1月15日 | 障がい者支援施設 れんげの里 | ●心臓蘇生をマスターしよう！ ●救急車の適切な利用について知ろう | 11 | 救急車の利用に関する情報提供、119番通報するための判断および心肺蘇生法を体験していただいた。定期的な研修の必要性も理解していただいたので、地域貢献として妥当であったと考える。 | 長谷川智之 |

●は公開講座

| | | | | | | |
|----|-------|-----------------------|-----------------------------|----|--|-------|
| 64 | 1月20日 | 津市豊里公民館 | ●楽しく・おいしく減塩しましょう！ | 17 | 参加者から、減塩について積極的に取り組もうとする声が多く聞かれた。参加者が減塩を意識し、日々の食生活を改善することとで参加者の家族を含め地域住民の健康維持・増進に貢献できたと考える。 | 前田貴彦 |
| 65 | 1月27日 | 津市豊里公民館 | ●もっと知りたい認知症～認知症本人と家族介護者の語り～ | 22 | 参加者は70～80歳代の方が多く、認知症の介護経験のある方も含まれていて、最後の質問も「認知症にならない方法、専門医のいる病院の紹介」等であり、住民の関心が高いテーマを提供できたと思われ。 | 岡本恵里 |
| 66 | 1月29日 | すずか生涯学習 インストラクターの会 | 救急車の適切な利用について知ろう！ | 22 | 救急車の利用に関する情報提供、119番通報するための判断および一次救命処置のAEDの使用方法について理解いただいた。緊急時対応の必要性を理解していただいたので、地域貢献として妥当であった。 | 長谷川智之 |
| 67 | 1月29日 | 県立杉の子特別支援学校 石薬師分校 | 月経と上手につきあおう | 11 | | 永見桂子 |
| 68 | 1月29日 | 県立杉の子特別支援学校 石薬師分校 | 思春期男子のこことからだを理解しよう | 23 | 思春期の年代にある自己の体や心の特徴を知ること、疑問の解決や不安の軽減につながったと考えられる。また、この年代は性に関する逸脱行動も多くなるため、本出前講座が自己の性行動を見つめなおす機会となることが期待できる。 | 前田貴彦 |
| 69 | 2月10日 | 津市立美里小・中学校 | 児童・生徒のやる気を育てる関わり方 | | | 宮崎つた子 |
| 70 | 2月14日 | ナーシングホームもも・いなべ | ICFの視点をいかしたケアプランのコツ | | | 多次淳一郎 |
| 71 | 2月16日 | 津市立一志小・中学校 | 児童・生徒のやる気を育てる関わり方 | | | 宮崎つた子 |
| 72 | 2月18日 | 亀山市学校保健会 | 思春期男子のこことと体を理解しよう | | | 前田貴彦 |
| 73 | 2月22日 | 津市立黒田小学校 | 子どもの自己肯定感を育てる関わり方 | | | 宮崎つた子 |
| 74 | 3月4日 | 津市立豊津小学校 | 子どもの自己肯定感を育てる関わり方 | | | 宮崎つた子 |

●は公開講座

2) 平成27年度 キャリアデザイン講座ステップⅠの実績

| | 開催日 | 開催場所 | 参加人数 |
|----|-------|-------------|------|
| 1 | 4月16日 | セントジョージ女子学園 | 22 |
| 2 | 5月15日 | 高田高校 | 47 |
| 3 | 5月15日 | 桑名西高校 | 20 |
| 4 | 6月2日 | 三重高校 | 20 |
| 5 | 6月9日 | 四日市四郷高校 | 21 |
| 6 | 6月9日 | 松阪高校 | 28 |
| 7 | 6月12日 | 津高校 | 1 |
| 8 | 6月12日 | 皇学館高校 | 41 |
| 9 | 6月12日 | 白子高校 | 29 |
| 10 | 6月12日 | 川越高校 | 18 |
| 11 | 6月12日 | 四日市西高校 | 25 |
| 12 | 6月16日 | 宇治山田高校 | 39 |
| 13 | 6月16日 | 亀山高校 | 17 |
| 14 | 6月17日 | 桑名高校 | 29 |
| 15 | 6月17日 | 津西高校 | 38 |
| 16 | 6月17日 | 津東高校 | 44 |
| 17 | 6月17日 | 鈴鹿高校 | 35 |
| 18 | 6月17日 | 尾鷲高校 | 31 |
| 19 | 6月18日 | 伊勢高校 | 35 |
| 20 | 6月24日 | 相可高校 | 29 |
| 21 | 6月27日 | 神戸高校 | 19 |
| 22 | 7月3日 | 名張西高校 | 15 |
| 23 | 7月8日 | 津田学園高校 | 35 |

2. その他の講師派遣

担当者：全教員、地域交流センター

【事業要旨】

出前講座等地域交流センターであらかじめ用意している事業の内容に該当しない依頼について、有料で対応する。

【地域貢献のポイント】

地域交流センターの既存の事業にとどまらず、「その他の講師派遣」として広く依頼に応じることで、より広く県民の要望に応えることができる。

I. 活動計画

既存の事業にはない内容の依頼に対して、対応可能な教員を紹介する。実施に向けて調整を進め、依頼者・教員の双方の条件が合致した場合に実施する。

II. 活動の実際および経過

依頼内容が既存のテーマに該当しないものに関して個別に対応した。

依頼者からの申し込みに対し、依頼内容について対応可能な教員を紹介し、日程・内容等の調整を行った。

III. 活動の結果と評価

今年度は14件の依頼に対し、担当教員との日程が調整できなかった1件を除く13件を実施することができ、県内からの要望に応えることができたと考える。実施したその他の講師派遣を表1に示す。

〔表1〕 その他の講師派遣実施状況

| No. | 実施日 | 依頼者 | 内容 | 担当教員 |
|-----|-----------------|----------------------|---------------------------|-------|
| 1 | 5月14日 9月25日 | 県立総合医療センター | 看護倫理（対象：看護師長・副師長） | 中西貴美子 |
| 2 | 8月25日 10月30日 | 県立総合医療センター | 看護倫理（対象：中堅看護師） | 中西貴美子 |
| 3 | 6月1日 | 三重県社会福祉協議会 （津会場） | 気をつけたいシニアの病気 （健康保持・増進） | 大西範和 |
| 4 | 9月4日 | 三重県社会福祉協議会 （伊勢会場） | 気をつけたいシニアの病気 （健康保持・増進） | 大西範和 |
| 5 | 9月17日 | 県立小児心療センター あすなる学園 | プロセスレコード研修 | 北恵都子 |
| 6 | 10月8日 | 三重県社会福祉協議会 （熊野会場） | 気をつけたいシニアの病気 （健康保持・増進） | 大西範和 |

| | | | | |
|----|--------|----------------------|--------------------------------|-------|
| 7 | 10月29日 | 亀山市立医療センター | 倫理研修 | 中西貴美子 |
| 8 | 11月12日 | 亀山市立医療センター | 看護過程研修 | 小松美砂 |
| 9 | 12月 3日 | 松阪市民病院 | 在宅看護学概論 | 大村佳代子 |
| 10 | 12月17日 | 亀山市立医療センター | リーダーシップ研修 | 浦野 茂 |
| 11 | 1月28日 | 松阪市民病院 | 認知症看護 | 小松美砂 |
| 12 | 2月15日 | 松阪市健康ほけん部 健康推進課 | 妊娠・出産・産後うつなど 女性のメンタルヘルスについて | 大平肇子 |
| 13 | 2月16日 | 県立小児心療センター あすなる学園 | モチベーション目標管理 | 北恵都子 |

IV. 今後の課題および今後に向けての計画

派遣する教員の講義内容は教員があらかじめ出前講座として登録した以外のテーマであるが、毎年度依頼のあるものや同年度に複数回依頼のある研修などを教員に登録してもらうなど、出前講座への登録テーマについての検討が必要である。

また、その他の講師派遣においても一部の教員に依頼が集中する傾向にあることから、出前講座と合わせて教員に過度の負担がかからないような工夫が必要である。

VI. 資料

1. 公開講座

平成 27 年度は、本学を会場として 3 件の公開講座を開催した。

1. 第 1 回公開講座

日 時 : 平成 27 年 7 月 11 日 (土) 13:30～15:00

場 所 : 三重県立看護大学講堂

テーマ : 「歩き方を変える」だけで 10 歳若返る！

講 師 : 能勢 博氏 (信州大学大学院教授)

遠隔配信先 : 三重県立総合医療センター

参加人数 : 558 名 (一般 465 名、学生 83 名、
遠隔配信 10 名)

主 催 : 三重県立看護大学

後 援 : 三重県・三重県看護協会

運営担当 : 三重県立看護大学事務局

地域交流センター

メディアコミュニケーションセンター

株式会社ミエデンシステムソリューション



能勢氏の講演の様子

2. 第 2 回公開講座

日 時 : 平成 27 年 10 月 18 日 (日) 14:00～16:00

場 所 : 三重県立看護大学講堂

テーマ : 認知症—我が街で暮らしていくために—

第 1 部 [講演] 「忍法『認知症対策』をひもとく」

講師 : 森藤 豊氏 (社会医療法人厚生会木沢記念病院 精神腫瘍科医長・
伊賀市立上野総合市民病院 緩和ケア非常勤医師)

第 2 部 [事例報告] 「つながれば希望が見えてくる」

報告者 : 下野和子氏 (公益社団法人認知症の人と家族の会 三重支部支部長)

第 3 部 [ディスカッション]

コーディネーター : 小松美砂 (三重県立看護大学教授)



森藤氏の講演の様子



下野氏の報告の様子



ディスカッションの様子

遠隔配信先：三重県立総合医療センター、尾鷲総合病院
参加人数：283名（一般260名、学生3名、遠隔配信20名）
共催：三重県立看護大学・NHK津放送局・NHK厚生文化事業団中部支局
後援：三重県・津市教育委員会・公益社団法人三重県看護協会・
公益社団法人三重県医師会
運営担当：三重県立看護大学事務局
地域交流センター
メディアコミュニケーションセンター
株式会社ミエデンシステムソリューション

3. 第3回公開講座

日時：平成27年12月19日（土）14:10～16:00

場所：三重県立看護大学講堂

第1部【講演】「育成力～メダリストをつくる心と身体のマネジメント～」

講師：小出義男氏（佐倉アスリート倶楽部株式会社代表取締役）

第2部【対談】

小出義男氏 × 村本淳子氏（三重県立看護大学名誉教授）

遠隔配信先：伊賀市立上野総合市民病院、尾鷲総合病院

参加人数：286名（一般257名、学生1名、遠隔配信28名）

共催：三重県立看護大学

公益社団法人三重県体育協会（みえ女性スポーツ指導者の会）

後援：三重県・津市教育委員会・公益社団法人三重県看護協会

運営担当：三重県立看護大学事務局

地域交流センター

メディアコミュニケーションセンター

株式会社ミエデンシステムソリューション



小出氏の講演の様子



対談の様子

2. 情報発信・広報活動

平成 27 年度の地域交流センター事業に関する情報発信と広報活動は以下のとおりである。

1. 年報発行

地域交流センター年報 平成 27 年度 VOL.18

発行日：平成 28 年 3 月

2. 報告会開催

平成 27 年度地域交流センター活動報告会

日時：平成 28 年 3 月 17 日（木）10 時～11 時 30 分

場所：三重県立看護大学大講義室

3. 地域交流センターホームページ トピックス欄における情報発信

- ・各種講師派遣のご案内
- ・看護研究支援のご案内
- ・公開講座開催のご案内
- ・各種研修会のご案内 など

4. パンフレットを作成し、県内関係機関へ送付

①平成 27 年度 地域交流センター事業のご紹介（800 部）

②平成 27 年度 講師派遣のご紹介（2,000 部）

- ・出前講座・その他の講師派遣

③平成 27 年度看護研究支援のご案内（800 部）

5. イベントへの参加

1) 県民の日記念事業でのブース展示

日 時：平成 27 年 4 月 18 日（土）10 時～16 時

場 所：三重県総合文化センター

内 容：①[大学広報]

大学案内、地域交流センター事業紹介

講師派遣案内のブックレット配布

②[健康チェック]

血管年齢・ストレスチェック、体脂肪等測定、骨密度測定、

アルコールパッチテスト、血圧測定、貧血チェック

③[進学相談]

運営担当：三重県立看護大学事務局、本学学部生、地域交流センター、

メディアコミュニケーションセンター、

主 催：三重県



県民の日（ブース展示）の様子

2) フレンテまつり 2015 でのブース展示

日 時 : 平成 27 年 6 月 7 日 (日)
場 所 : 三重県男女共同参画センター
「フレンテみえ」

内 容 : ①[大学広報]
大学案内、
地域交流センター事業紹介
講師派遣案内のブックレット配布

②[健康チェック]

血管年齢・ストレスチェック、体脂肪等測定、骨密度測定、
アルコールパッチテスト、血圧測定、貧血チェック

運営担当 : 三重県立看護大学事務局、教員有志、本学学部生

地域交流センター、メディアコミュニケーションセンター、

主 催 : フレンテまつり実行委員会、三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」



フレンテまつり (健康チェック) の様子

6. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

平成 27 年度の広報を主たる目的としたテレビ・ラジオ・

1) テレビ・ラジオ・新聞等

| 内 容 | 媒 体 |
|----------------|--------------------------|
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ [イブニングコースター] (4/2) |
| 県民の日記念事業参加 | 三重テレビワイドニュース (4/18) |
| 県民の日記念事業参加 | 三重テレビワクドキ (5/1) |
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ [イブニングコースター] (5/7) |
| 第 1 回公開講座 PR | 伊勢新聞 (6/20) |
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ [イブニングコースター] (7/2) |
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ [イブニングコースター] (8/6) |
| 男性看護師ナースマンスクール | 朝日新聞 (8/18) |
| 男性看護師ナースマンスクール | 伊勢新聞 (8/18) |
| 男性看護師ナースマンスクール | 三重タイムズ (8/28) |
| 第 2 回公開講座 PR | 三重テレビデータ放送 (9/1~30) |
| 第 2 回公開講座 PR | FM みえ (9/4) |
| 第 2 回公開講座 PR | CBC ラジオ (9/5) |
| 第 2 回公開講座 PR | 三重テレビ (9/11) |

| | |
|----------------------|--------------------------|
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ〔イブニングコースター〕 (9/29) |
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ〔イブニングコースター〕 (10/1) |
| 第2回公開講座 PR | 中日新聞 (10/16) |
| 第2回公開講座 | 三重テレビワイドニュース (10/18) |
| 不妊に関する講演会 PR | FM みえ (10/23) |
| 看護職を対象とした運動指導実践講座 PR | 県政だより みえ 11月号 |
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ〔イブニングコースター〕 (11/5) |
| 不育症に関する講演会 PR | FM みえ (11/13) |
| 第3回公開講座 PR | 伊勢新聞 (12/2) |
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ〔イブニングコースター〕 (12/3) |
| 第3回公開講座 | 三重テレビワイドニュース (12/19) |
| 第3回公開講座 | 朝日新聞 (12/20) |
| 第3回公開講座 | 中日新聞 (12/20) |
| 第3回公開講座 | 伊勢新聞 (12/20) |
| 第3回公開講座 | 三重タイムズ (12/25) |
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ〔イブニングコースター〕 (1/7) |
| 心と体の健康に役立つ話題 | FM みえ〔イブニングコースター〕 (2/4) |

2) 商業誌

| 誌名 | 発行元 | 内容 |
|------------------------------|--------------------|--|
| 日経グローバル No.281 2015.12.7 | 日本経済新聞社 産業地域研究所 | 全国大学の地域貢献度ランキング(上) 総合ランキング 160位(前年度 148位) |
| 日経グローバル No.282 2015.12.21 | 日本経済新聞社 産業地域研究所 | 大学の地域貢献度ランキング(下) 東海地域ランキング 18位(前年度 19位) |

3. 新聞掲載記事

快眠

最近、眠れていきますか？医者に
かかるほどでもないけれど、
睡眠がうまくとれないという人
は多いと言われています。春は
季節の変わり目、年度の替わり
目で生活が変化し、疲労がたまり
やすい時期です。県内の女性
記者たちが、よりよい睡眠を求
めて取材しました。



大塚 裕子
二村 良子
県立尾鷲女子大教授

生活への誘い

「寝ることはよく意味
があるんですよ」と筆者の
は、睡眠に関する疑問は
「よく寝る」という言葉の二
は自身も経験。睡眠は健康を
まもる、病気を予防する
るだけでなく、記憶を定着させる
役割も果たす。

ふと、人間の体は眠
り、意識の自然なリズム、
体内時計が働いている。体
内時計は一日十五時間と設
定されており、朝は起きて
日光を浴びること二十時
間よりヤットされる。しか
し、なぜか理由からこの

リズムが崩れ、すっきり起き
られない人は多い。
春の朝が眠たく感じる理由
の一つは、気温とそれに伴う
体内の変化が関係している
とされている。
日照時間が短く寒くなる、
自然と体をこわばらせて血流
も悪く、眠りが浅い。日が徐
々に長くなり気温が上がって
くる、体を動かす機会が増
えやすくなり、自然と目覚め
やすくなる。そのため、同じ時
間と寝ても体が寝足りない
と感じる。二つの時差は「
時差」とは異なる。

「睡眠のために自分の生
活を見直してみよう」。三度の
食事の時間を一定にする。適
度に体を動かす。休みの日に
寝だめしないことが大切。ど
れもうまく眠れない人に動
めるのが良い方法だ。深く所
吸する。この体内の血流が良
くなり、リラックスして眠り
につけるという。
最近、不眠や睡眠不足が
生活習慣病に及ぼす影響が明
らかになってきている。「年
齢を問わず、普段から関心を
持つ」と話す。



子育て支援ボランティアを育成する研修会の講演を聴き入る参加者
—名張市鴻之台で



名張 名張市が取り組む結婚・妊娠・出産・育児の切れ目のない子育て支援「名張版ネウボラ」の一環として、子育て支援ボランティアを育成する研修会が8日、同市鴻之台の市防災センターであった。民

月ごろに夜間の睡眠時間は増えるが、家族の生活パターンにも影響を受ける。その子のリズムに合わせながら親が配慮する必要がある」と訴えた。そのほか、同大学の小池敦教授による「心理的発達」と「虐待・障

毎日新聞 6月9日

子育てボランティア育成 研修会に100人

生委員やボランティアら約100人が子どもの発達や障がいの講演に聴き入った。

県立看護大の宮崎つた子教授は「子育て家庭を取り巻く現状と子どもの育ち」と題して講演。睡眠の確保が子どもの成長に重要とした上で、「生後4カ

がい」をテーマにした講演もあった。

2児の母で主婦の三木愛さん(40)＝同市桔梗が丘5＝は「兄弟で歩き始める時期が違い、不安になった。発達には個人差があることを講演で確認できた」と話した。【鶴見泰寿】

看護師や美容師 体験したよ



マネキン髪の毛で美容師の体験をする子どもたち＝松阪市立野町のみえこどもの城で

松阪市立野町の県立みえこどもの城で四日、「キッズ☆おしごと広場」が始まり、子どもたちが看護師やアナウンサーなどの仕事を体験した。五日まで。(大沢悠)

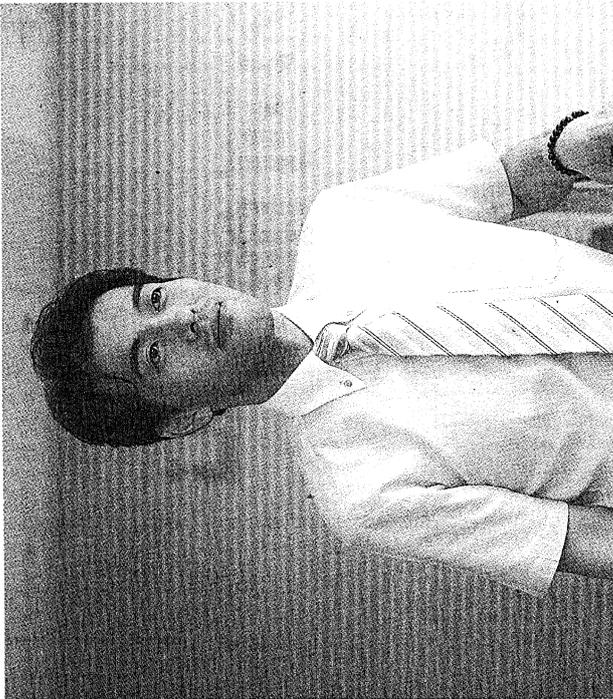
みえこどもの城が主催し、今年で三回目。二日間で県内計三十二の企業と団体が参加する。子どもたちは、県立看護大学のブースで看護師の格好をし、津市の旭美容専門学校ブースでは、マネキンの髪の毛をアレンジするなど美容師の体験をした。午前と午後の部があり、子どもたちは興味のある仕事に次々と挑戦していた。

松阪こどもの城
五日は午前の部は九時四十五分から受け付け、十時から体験が始まる。午後は一時十五分から受け付けが始まる。ブースによっては人数制限がある。①みえこどもの城 059(23)7735

中日新聞 7月5日

思い描いた男性看護師になる

前田 貴彦さん (41) 全国男性看護師会 代表



看護師の誇りを伝えながら、キャリアの広さを取り扱ってきた語り手前田さん
 ■三重県立看護大学 (津市彦根)にて

は 男性看護師の就業状況は厚生労働省の平成24年度の調べでは、男性看護師は全体の6.2%とまだまだ少数派ですが、平成13年保健師助産師看護士の改正により、看護士と看護婦という名称は看護師に統一。男性にとって看護師を目指す門戸が大きく開かれたきっかけの一つかと思えます。私の全国の男性看護師を対象にした調査では、20〜30代からの回答がおよそ8割を超えたことから、男性看護師が若年層に多くみられるかと思えます。

また男性は、多岐な経済的な役割を担うなどの仕事から、看護師として働き続ける傾向にあふれています。男性看護師は、この数

年でその存在を広く知られるようになってきたので、明確なターゲットはあまりありませんが、寄せられる期待は大きなものかと思えます。

— キャリアアップのイメージが不透明

キャリアは、医療で専門性を高める認定看護師や専門看護師などのスペシャリスト、病院科で経験を積みゼネラリスト、管理職、教職と大きく4つに分けられます。地域や病院によって理由はさまざまですが、イメージが不透明なのは、身近にロールモデルがないから。看護師という仕事は、有資格者であり、経済的に安定している仕事として周知されていますが、特に男性看護師は、その先でどのような仕事をしていく

のかイメージされにくいことが指摘されています。

そもそも男女間わずキャリアアップしなくても資格があれば継続できる仕事。女性の仕事という印象に押されている現状こそ、少数派ならではの悩みかと思っています。そのため男性は、自尊心や周囲からの期待などで、スペシャリストや管理職を目標とするものになるのではないのでしょうか。男性でもゼネラリストとして働ける仕事として認められたい。

— よりよい看護への期待

黄色と青白が調子よく緑色になるように、現職に男女の看護師が入れ替わればバリエーションは増えるはず。増えることで、対応できる患者さんも増えるので、女性だけの環境に男性がいらさず、よりよい看護につながると思います。男性も看護師の存在を認めた看護師が活躍できるかと思っています。

現在は「男性看護師」「女性看護師」として認識されている期待ですが、男女による違いや差はなにより、別

は 男性看護師の数を増えることが大切ですが、キャリアアップが不明な中で「女性の仕事」「男性の仕事」として認識しただけでは、やはり現実を打破しなればなりません。

高校生を看護学生は、看護師という仕事を受験者が分らないので、よい面を強調して、知られたら嫌いな職業の参考にしてほしい。今年も日に昨年に引き継ぎ、看護学生対象としたイベントを実施する予定です。今年も日に名古屋で開催したイベントが、男性同士で話そうと、自分たちが家になら、どうもが多数で話せられました。現職では、声として、少数派として働きにくい雰囲気があることは、まだまだ改善されていないのもおもしろい。

— 同僚の協力やメリット

は 最近、職場が150人規模のなかで、誇りを十分に伝えられたいと思っています。男性看護師が多数に集まっている病院は、単身でネットワークを形成していると思います。そうした男性看護師には、同僚は協力と敬意を払ってほしいです。一方で、活動範囲を広げようとして、病院を離れたら、単身で参加しただけの例もありません。男性看護師が求めていることを理解し、それに応えることができるような環境を目標としています。

単市に事務局を置く全国男性看護師会が、病院や地域を超えたネットワークで男性看護師に関わる情報や悩みなどを共有し、解決につながるよう活動している。代表の前田貴彦さんに理解してもらう男性看護師に近づくための思いを聞いた。

ゼネラリストとして働ける環境を

解されることではないかと思えます。だから、いっしょに全国男性看護師会は、ただ現職に、少数派だからといって、自分たちが頑張っていることを、少数派だから、不慣れなキャリアを明確にすることを意識した活動や、これ以上、くぐまんと考えたいです。

— 男女が互いに働くためには

男性看護師の数を増えることが大切ですが、キャリアアップが不明な中で「女性の仕事」「男性の仕事」として認識しただけでは、やはり現実を打破しなればなりません。

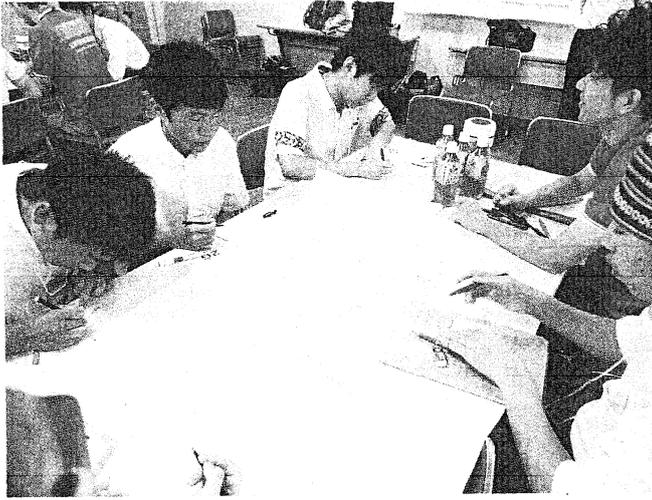
高校生を看護学生は、看護師という仕事を受験者が分らないので、よい面を強調して、知られたら嫌いな職業の参考にしてほしい。今年も日に昨年に引き継ぎ、看護学生対象としたイベントを実施する予定です。今年も日に名古屋で開催したイベントが、男性同士で話そうと、自分たちが家になら、どうもが多数で話せられました。現職では、声として、少数派として働きにくい雰囲気があることは、まだまだ改善されていないのもおもしろい。

— 同僚の協力やメリット

は 最近、職場が150人規模のなかで、誇りを十分に伝えられたいと思っています。男性看護師が多数に集まっている病院は、単身でネットワークを形成していると思います。そうした男性看護師には、同僚は協力と敬意を払ってほしいです。一方で、活動範囲を広げようとして、病院を離れたら、単身で参加しただけの例もありません。男性看護師が求めていることを理解し、それに応えることができるような環境を目標としています。

男性看護師に聞こう！ 第1回ナースマン・スクール

全国男性看護師会は17日（月）、津市羽所町のアスト津で看護師をめぐり男子高校生を対象にした「第1回ナースマン・スクール」を開催した。



男子高校生12人が参加し、現役の男性看護師らから話を聞いた。

全国男性看護師会は昨年4月に発足、県立看護大学内に事務局を

置く。平成26年で看護師全体の約百万人のうち、男性看護師は約7万人と、まだ極めて少数だが年々増加しているという。

スクールでは、参加者が3つのグループに分かれ、男性看護師に対して持っているイメージや疑問を集約。「女性看護師に比べ不利ではないか」「力仕事を任せられるか」「看護学校での勉強はどうか」「女性の多い仕事場に溶け込めるか」「給与や勤務形態はどうなっているのか」などの声が上がった。

現役看護学生や看護師が、男性看護師についての仕事内容や勤務形態、看護大学の学生生活などを話した。希望者には個別相談もあった。

三重タイムズ 8月28日

「世界一になる」信じて

県立看護大 小出義雄さん講演

女子マラソン五輪メダリストの高橋尚子さんや有森裕子さんや育てた、佐倉アスリート倶楽部代表の小出義雄さんが19日、津市夢が丘の県立看護大学で講演した。約三百人の聴衆を前に、自身の具体的なエピソードを交え、世界で勝てる人材を育てるヒントを示した。

講演は同大の公開講座の一環。小出さんは、マラソンの日本と世界の競技レベルについて「同じ人間なのに、日本人が世界に勝てないことはない。世界に通用する選手になるためには、それに



「信じて未来が開ける」と訴える小出義雄さん
＝津市の県立看護大で

中日新聞 12月20日

「『必ず勝つ』が大事」

小出義雄氏が講演

マラソン
指導者 心の持ち方方の重要性語る

県立看護大



メダリストを育てた体験を話す小出氏。津市夢が丘の県立看護大で

【津】津市夢が丘の県立看護大で十九日、女子マラソン五輪メダリストの有森裕子さん、高橋尚子さんの指導で知られる小出義雄氏（せむ）の講演会「育成功力メダリストをつくる心と体のマネジメント」があった。小出氏は「『必ず勝つ』とすることが大事」と心の持ち方の重要性を語った。小出氏は有森さんの指導を振り返り、「有森はきちょうめんで私にも怒ってくるので『今日から有森が先生だ』と皆に言った。欠点を言うよりいい所を褒め、気持ちよく過ごした方がいい

高橋さんの練習環境を整えるため家を一軒購入し、その借金を高橋さんの指導法をつづった著書の印税で返した経緯を笑いを交えて紹介し、「できないのは自分が決めているから。自分でいい方に思っているかどうかと前向きな姿勢の大切さを述べた。また、「お年寄りも夢を持ってほしい」と激励し、自身の夢を「五年後の東京オリンピックで選手にメダルを狙わせる」と宣言した。講演会は同大の公開講座で県体育協会「みえ女性ス

に小出氏と同大の村本淳子名誉教授との対談があった。

伊勢新聞 12月20日

小出義雄さんが「育成功力」語る

「人生の成功法則」を伝授



た。地域貢献事業の一環。小出さんはオリピック女子マラソンにおいて

その経験に基づいて打ち立てた人生の成功法則「良い方へ考えると、物事は良い方へ動いていく」を紹介し、「3歳までは溺愛し、物心がつく5歳ごろからしつけをしかり」と子育て論を展開した。

県立看護大学（早川和夫学長）は19日（土）、津市夢が丘の同大で佐倉アスリート倶楽部（株）代表取締役で、女子マラソン選手育ての親である小出義雄さんを講師に迎え第3回公開講座を開いた。約300人が参加し

世界で唯一「3大会連続メダル獲得」の指導実績を持つ。有森裕子選手、鈴木博美選手、高橋尚子選手を育てた。小出さんは「育成功力メダリストをつくる心と身体のマネジメント」と題して講演。3人をトッ

参加者はカリスマ性があり、常に気持が前向きで、幸福を呼び寄せ人生の達人の話に聞き入った。

三重タイムズ 12月25日

看護の歴史などを解説

第3回シップサロンで講演

人が健康で長生きできる環境を整えるためのサービ

スをトータルで仲介・斡旋する新企業として今年3月に設立された㈱Ship (シップ)は津市広明町、井ノ口輔胖社長が9日、ホテルグリーンパーク津で、三重県立看護大学名誉教授の村本淳子氏を講師に招き、「第3回シップサ



講演する村本氏
看護学教授として
同大学学長、同21
年から理事長を兼
務、同27年3月に
任期満了で退職し

ロン」を開いた。同社の会員向けに1月に1回ペースで開催しているもので、毎回、幅広い分野から専門家を招き、知識を深めている。

村本氏は聖路加看護大学(現在の聖路加国際大学)を卒業後、N T T 東日本関東病院で助産師として勤務。平成10年から三重県立看護大学に母性看護学教授として

現職に就く。

当日は「看護の源泉をたずね、看護職を知る」看護職をもっと活用しよう」をテーマに講演。

「看護は『母親という母性』があった時からすでに存在していた。2500年前のギリシャ時代、ローマ時代の看護は、身内の者、同国の者に限られていたが、中世ヨーロッパ、キリスト教世界の看護(紀元500年〜1500年)で現在のように見知らぬ人にも援助の手を差し伸べる『愛の技』として定着し、キリスト教の教えとが一緒にになり、修道院を中心に人々の間に広がっていき」と看護の歴史を解説。

また、看護学による病気の回復過程である『病気とは回復に相応しい環境を整える事が看護の目的であり、病む人間の自力での回復を援助すること』と説明。手術後のケアでその後の回復に大きく差が出ることから、「医学と看護学は同時に発展していかななくてはならない」と述べた。

三重ふるさと新聞 12月25日

「看護」をテーマにShipサロン やむ人間の自力回復を援助



マに3回目のサロンを開いた。企業経営者、医療従事者ら約30人が参加した。

サロンは10月に開講、1回は「健康長寿」、2回目は「薬膳」がテーマとなった。続いて「洋菓子歴史」メニューアップ」などの演題で実施予定。

村本さんは「看護の源泉をたずね、看護職を知る」と題して講演。「看護職には看護師と保健師、助産師の3つ仕事の領域があり、このうち患者とその家族に接するのが看護師」と位置付け、「医療用の世話」と「診療の補助業務」が含まれる看護師の仕事について語った。

況判断して医療行為を施すことができる。ドクターの誤った医療行為に対し異議を唱えるのは当然のことで、看護師は患者に対して行うすべての行為を判断している」と述べた。

フロアレスナイチンゲールを創始者とする近代看護学では「病気とは回復過程。根源的治療は自然に任せ、回復にふさわしい環境を整えることが看護の目的である」と紹介し、「病む人間の自力での回復を援助することが看護学の考え方。自然を生かすのが看護」と話した。「回復にふさわしい環境を整えるためには、病人が抱えている問題、家庭上の悩みであったりすることが多いが、これに立ち入る必要も出てくる。その人の心を声を聞きとり、共感と理解を通してあるべき方向へ内側から動かしていく感性が重要になってくる。それは、アトに近いかも

しれない」と説き、ナイチンゲールは「看護を構成する3つの要素」として、「知識」「技能」「精神」を挙げて話を結んだ。問合せは同社「電話059(2)773 6428。

三重タイムズ 12月18日

4. 各種事業の要項・申込書

- ① 施設単位看護研究支援
- ② テーマ別看護研究支援
- ③ 初学者のための看護研究
- ④ 看護研究ワンポイントレッスン
- ⑤ 看護研究発表会支援
- ⑥ 出前講座
- ⑦ その他の講師派遣

① 平成 27 年度 「施設単位看護研究支援」のご案内

■ 施設単位看護研究支援事業とは

看護研究に取り組んでおられる施設単位で、看護研究を行う看護職の複数のグループ（または個人）に対し、本学の教員が看護研究のプロセスに沿った指導を行います。

■ 研究指導期間

契約の成立～平成 28 年 3 月 31 日

■ 指導料金：有料

1 回 3 時間、4 回指導を基準とし、追加の場合は追加料金をいただきます。なお担当教員の都合によっては追加に対応できない場合があります。指導料金については、下記までお問合せください。

※料金には消費税が含まれます。

※研究発表会にかかる審査・講評は含みません。（研究発表会支援は別途案内させていただきます）。

※講師の交通費（三重県立看護大学から依頼者施設まで）は別途、依頼者側にご負担いただきます。

やむをえざる交通事情により現地宿泊が必要となる場合は、依頼者側宿が泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いいただきます。

■ 指導の方法

原則年 4 回、1 回につき 3 時間を目安とし、指導教員が施設に出向きます（指導のできる場所をご用意ください）。個別指導の場合は 1 テーマ 30 分×6 テーマを目安とします。

上記時間内で、施設内で行われている看護研究への指導を順番に行います。研究の進捗状況により、当該日に参加可能なグループ（あるいは個人）がご参加ください（研究グループ（あるいは個人）により進度が異なると思われるので、毎回、全グループ（あるいは個人）の参加を指導教員から強制するものではありません。ただし、契約期間は 1 年間になりますので、計画的に進められることをお勧めします。）

■ ご了解いただきたいこと

- ・指導する教員は、ある特定の領域に所属しておりますので、すべての領域の研究に通じているわけではありません。研究方法の指導は行いますが、専門領域でない場合には具体的な看護の内容まではお答えしかねる場合があります。
- ・テーマ数が多い場合、あるいは、研究方法が異なる場合（例：質的研究と量的研究）は、複数教員が指導する場合があります（その場合の料金は、×指導教員数となります）。

■ お申し込み方法

所定の申込用紙により三重県立看護大学地域交流センターまで、FAX、E-mail、郵送のいずれかでお申し込みください。

申し込み締め切りは、平成 27 年 2 月 27 日（金）とさせていただきます。

■ お申し込みから施設単位看護研究支援終了までの流れ

- ① 申込書に記載のうえ、三重県立看護大学地域交流センターまでお申し込みください。
- ② 地域交流センターより指導教員決定通知書をお送りします。
- ③ 指導教員との間で指導日程の調整後、研究指導開始となります。
- ④ 指導終了後、本学より指導料金の請求をさせていただきます。

■ 問い合わせ先・申し込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地の 1

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/FAX 059-233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

① 平成 27 年度 「施設単位看護研究支援」 申込書

申込〆切 : 平成 27 年 2 月 27 日

| | | | | | |
|--------|-----|---|-----|--|--------|
| 代表者氏名 | | | | | |
| 代表者連絡先 | 施設名 | | | | |
| | 住所 | 〒 | | | |
| | 電話 | | FAX | | E-mail |

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、施設単位看護研究支援決定通知書の送付や指導実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

| | |
|--|---|
| 指導を希望する 研究テーマ数 | 件 |
| 研究内容 (決まっていれば各テーマ名をお書きください。 別途、資料添付可) | |
| *指導希望教員名 (あればご記入ください) | |

*指導希望教員については、ご希望に添えない場合がありますので、ご了承ください。

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」決定通知書

ご依頼いただきました施設単位看護研究支援の指導教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

| | | | | |
|------|---------|-----|-----|--------|
| 決定事項 | 施設名 | | | |
| | 指導教員名 | | | |
| | 指導教員連絡先 | TEL | FAX | E-mail |

上記の指導教員にご連絡のうえ、日程、内容、方法等、詳細な打ち合わせを行ってください。
 ご不明な点がありましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター
 TEL/ FAX (059)233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

② 平成 27 年度 「テーマ別看護研究支援」のご案内

■ 看護研究支援事業とは

看護研究を行う看護職の方に対し、本学の教員が看護研究のプロセスに沿った個別指導を行います。

■ 研究支援対象

三重県内に在住もしくは県内の医療機関等に勤務する看護師で、看護研究に関する研修（本学が実施している「看護研究の基本ステップ」等）を修了した者、もしくは研究経験のある者

■ 研究指導期間

契約の成立～平成 28 年 3 月 31 日

■ 指導料金：有料

① 依頼者が本学に来られる場合と②本学教員が依頼者側に出向く場合とで異なります。

1 テーマにつき 4 回指導が基準で、追加の場合は追加料金をいただきます。なお担当教員の都合によっては追加に対応できない場合があります。

指導料金については下記までお問い合わせください。

※料金には消費税が含まれます。

※②の場合、交通費（三重県立看護大学から依頼者施設まで）は別途、依頼者側にご負担いただきます。

やむをえざる交通事情により現地宿泊が必要となる場合は、依頼者側宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いいただきます。

※研究発表会にかかる審査・講評は含みません（研究発表会支援は別途案内させていただきます）。

■ お申し込み方法

所定の申込用紙により三重県立看護大学地域交流センターまで、FAX、E-mail、郵送のいずれかでお申し込みください。

申し込み締め切りは、平成 27 年 2 月 27 日（金）とさせていただきます。

■ お申し込みから研究指導終了までの流れ

① 申込書に記載のうえ、三重県立看護大学地域交流センターまでお申し込みください。

② 地域交流センターより指導教員決定通知書をお送りします。

③ 依頼者と指導教員の間で指導日程の調整後、研究指導開始となります。

④ 研究指導の終了後、本学より料金の請求をさせていただきます。

■ 問い合わせ先・申し込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地の 1

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

TEL / FAX 059-233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

② 平成 27 年度 「テーマ別看護研究支援」 申込書

申込〆切：平成 27 年 2 月 27 日

| | | | |
|-------------|-----|--------------|--------|
| 研究代表者 氏名 | | 勤務先 (病棟名) | |
| 連絡先 | 住所 | 〒 | |
| | TEL | FAX | E-mail |

連絡先は、必ずご本人に連絡の取れるところをご記入ください。申込書にご記入いただいた個人情報、看護研究支援決定通知書の送付や看護研究指導実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

| | |
|--|---|
| 研究テーマ名 (未定の場合は、テーマとしたい内容を具体的、かつ簡潔にご記入ください) | |
| 指導を受けたい内容 (具体的にお書きください。何について指導を受けたいのか内容が不明確な場合は、お受けできません。別紙添付も可) | |
| 指導希望教員名 (あればご記入ください) | |
| 指導希望の領域名*1 (特定の教員を希望されない場合、希望領域の有無、希望領域がある場合は領域名をお書きください) | 希望領域あり (希望する領域名：) 希望領域なし |
| 指導方法の希望*2 (〇をつけてください) | 来学指導 (依頼者が来学) • 出張指導 (教員が出向く) |

*1 <研究テーマ名>、および<指導を受けたい内容>の項に書かれた内容により、指導に適すると思われる教員へお取次ぎいたします。内容によってはご希望に添えない場合がありますので、ご了承ください。

*2 指導教員との調整により決定します。ご希望に添えない場合がありますので、ご了承ください。

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「テーマ別看護研究支援」決定通知書

ご依頼いただきました施設単位看護研究支援の指導教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

| | | | | |
|------|------------|-----|-----|--------|
| 決定事項 | 依頼者名 (施設名) | | | |
| | 指導教員名 | | | |
| | 指導教員連絡先 | TEL | FAX | E-mail |

上記の指導教員にご連絡のうえ、日程、内容、方法等、詳細な打ち合わせを行ってください。

ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

TEL/ FAX (059) 233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

③ 平成 27 年度「初学者のための看護研究」のご案内

■ 「初学者のための看護研究」とは

看護研究の基礎講座をシリーズで遠隔配信します。地理的条件から本学にお越しいただきにくい地域の看護職の皆さまを対象とし、テレビ会議システムを使用して配信するため、受講者の皆さまは、モニター画面を通して通常の講義と変わらない講師とのやりとりができます。

■ 研修プログラム

| | 講義内容 | 日程 | 時間 | 担当講師 |
|---|-------------------------|----------|-------------|-------|
| | センター長挨拶・オリエンテーション | 6月16日(火) | 18:00~18:15 | |
| 1 | 看護研究の意義と文献検索 | | 18:15~19:45 | 岡本恵里 |
| 2 | 研究計画の立て方と書き方 | 6月26日(金) | 18:00~19:30 | 竹本三重子 |
| 3 | 質的研究 | 7月10日(金) | 18:00~19:30 | 浦野 茂 |
| 4 | 量的研究 | 8月 4日(火) | 18:00~19:30 | 長谷川智之 |
| 5 | 統計解析(演習含む) | 8月18日(火) | 18:00~20:00 | 齋藤 真 |
| 6 | プレゼンテーション (PPT 演習含む) | 9月 2日(水) | 18:00~20:00 | 白石葉子 |
| 7 | 研究論文作成 | 9月11日(水) | 18:00~19:30 | 脇坂 浩 |

■ 遠隔配信先

- ・ 県立総合医療センター 様
- ・ 伊賀市立上野総合市民病院 様
- ・ 尾鷲総合病院 様

* 上記会場のいずれかで研修を受けていただきます。

■ 料金

受信施設：10,800 円

参加施設：16,200 円 (消費税込・7回シリーズ料金)

- * シリーズ終了後に本学事務局より請求書を送付いたします。
- * 料金は1名以上何名でも同じです(1名でも参加の場合は、ご所属の施設単位で上記料金をいただきます)。

■ 受講届について

平成 27 年度「初学者のための看護研究」受講届用紙に記入し、FAX でお送りください。

■ その他

第5回、第6回はパソコン使用予定です(不要の場合は事前にご連絡いたします)。受講者の方々は、各自ノートパソコンのご準備をお願いします。

■ 問合せ先

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地の1

三重県立看護大学地域交流センター

TEL/FAX : (059) 233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

③ 平成 27 年度「初学者のための看護研究」受講申込書

【施設名】 _____

【おおよその参加希望人数】 _____ 名

【ご連絡先】

ご住所 : 〒 _____

お電話番号 : _____

FAX 番号 : _____

E-mail アドレス : _____

ご担当者の役職・お名前 : _____

◎上記①②についてご記入いただき、6月1日（月）までに下記まで FAX していただきますようお願いいたします。

FAX : (059) 233-5610

④ 平成27年度 「看護研究ワンポイントレッスン」のご案内

■ 看護研究ワンポイントレッスンとは

看護研究を行う看護職の方（依頼者）が、すでに行っている研究に対し、支援を受けたい研究のプロセスの一部を本学の教員（指導教員）が個別指導するものです。依頼者には来学していただき、1回90分の指導を基準とします。初回の指導で指導教員が継続指導の必要性があると判断した場合には、2回目以降の指導も受けられます。

■ 研究指導申込み期間

〆切：平成27年11月30日（月）

■ 指導料金：有料

指導料金は1回につき10,000円＋消費税となります。

■ 申し込み方法

所定の申込用紙により三重県立看護大学地域交流センターまで、FAX、E-mail、郵送のいずれかでお申し込みください。

■ お申し込みから研究指導終了までの流れ

- ①申込書に記載のうえ、三重県立看護大学地域交流センターまでお申し込みください。
- ②地域交流センターにて、申込書に記入された内容をもとに指導教員を決定します。
- ③地域交流センターが指導教員と依頼者の初回指導の日程を調整します。決定した日時に来学し、指導を受けてください。
- ⑤2回目以降の継続指導（継続の有無、日程、指導内容等）については、指導教員と依頼者との相談で決めていただきます。
- ⑦指導終了後、本学より指導料金の請求をさせていただきます。

■ あらかじめご了解いただきたいこと

- ・ご希望の指導内容について該当する教員がない場合は、研究指導をお断りする場合があります。
- ・研究の内容、進捗状況により、指導をご希望の部分の解決のみでは研究として成立が困難と判断された場合は、ご希望内容とは異なる対応となる場合があります（依頼者が1回のみ指導でよいと思われていても、指導教員側はあくまでも研究として成り立つかという視点にたって指導をさせていただくためです）。
- ・研究の内容、進捗状況によっては、本学の大学院受験、科目等履修、各種看護研究に関する研修コースをお勧めする場合があります。
- ・看護研究ワンポイントレッスンにて指導を受けた場合に、論文において指導教員の氏名を記載するか否かについては、直接、指導教員の了解を得ていただきます（指導の内容、程度により、指導教員は氏名掲載をお断りする場合があります）。

■ 問い合わせ先・申し込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地の1

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/FAX 059-233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

④ 平成27年度 「看護研究ワンポイントレッスン」 申込書

申込書記入日 平成 年 月 日

| | | | | | |
|-------------|-----|-------------------------------|--------|--|--|
| 研究代表者 氏名 | | 勤務先 (病棟名) | | | |
| 連絡先 | 住所 | < 自宅 ・ 勤務先 > (いずれかに○をつけてください) | | | |
| | TEL | FAX | E-mail | | |

連絡先は、必ずご本人に連絡の取れるところをご記入ください。申込書にご記入いただいた個人情報は、看護研究ワンポイントレッスンに関する関係書類の送付、実施に向けての打ち合わせに使用させていただくほか、大学からの各種講座のご案内に使用させていただく場合があります。

| | |
|--|--|
| 研究テーマ名 | |
| <p>指導を受けたい内容 (具体的にお書きください。 <u>何について指導を受けたいのか</u> 内容が不明確な場合は、<u>お受けできません</u>。別紙添付も可)</p> | |

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「看護研究ワンポイントレッスン」決定通知書

ご依頼いただきました施設単位看護研究支援の指導教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

| | | | | | |
|------|------------|-----|-----|--------|--|
| 決定事項 | 依頼者名 (施設名) | | | | |
| | 指導教員名 | | | | |
| | 指導教員連絡先 | TEL | FAX | E-mail | |

上記の指導教員にご連絡のうえ、日程、内容、方法等、詳細な打ち合わせを行ってください。
ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター
TEL/ FAX (059)233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

⑤ 平成 27 年度「看護研究発表会支援」のご案内

■ 看護研究発表会支援とは

院内看護研究発表会等における講評・審査を担当します。県内の医療機関の皆さまからのお申込みに対し、本学教員がお伺いします。

■ 目的

三重県内の看護職の皆さまの研究的思考の育成、向上をはかることを目的とします。

■ 申込み期間

〆切：平成 27 年 11 月 30 日（月） ＊開催希望日の 60 日前までにお申し込みください。

■ 指導料金：有料

詳しくは下記までお問い合わせください。

■ 支援対象

三重県内にある医療機関で、5 題以上の研究発表がある院内看護研究発表会等

■ 申し込み方法

所定の申込用紙により三重県立看護大学地域交流センターまで、FAX、E-mail、郵送のいずれかでお申し込みください。

■ ご理解いただきたいこと

- ・講師料および交通費（三重県立看護大学から発表会会場まで）をいただきます。現地宿泊が必要となる場合は、依頼者側が宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いいただきます。
- ・会場の手配、参加者への開催の周知は依頼者側でお願いします。大学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・当日の講師の役割は院内看護研究発表会の発表に関する講評・審査のみとさせていただきます。

■ お申し込みから実施までの流れ

- ①申込書に記載のうえ、三重県立看護大学地域交流センターまでお申し込みください。
- ②地域交流センターより決定通知书をお送りします。
- ③開催 1 ヶ月前までに、講師本人、地域交流センター長宛に講師派遣依頼文書を送付してください。
- ④詳細は、担当講師と直接打ち合わせてください（参加人数など、お申し込み内容に大きな変更があった場合もご連絡ください）。
- ⑤研究抄録は、開催 1 週間前までに講師までお送りください。
- ⑥院内研究発表会の実施
- ⑦終了後に、本学より講師料の請求をさせていただきます。

■ 問い合わせ先・申し込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地の 1

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/FAX 059-233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

⑤ 平成27年度 「看護研究発表会支援」申込書

申込書記入日 平成 年 月 日

| | | | | | |
|---------|-------|---|-----|--|--------|
| 医療機関の名称 | | | | | |
| 連絡先 | 所在地 | 〒 | | | |
| | 担当者氏名 | | | | |
| | 電話 | | FAX | | E-mail |

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、看護研究発表会支援決定通知書の送付や看護研究発表会実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

| | | | |
|-------------------------|------------------------|--------|------------------------------------|
| 開催希望日時 | 平成 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 | | |
| 発表会の名称 | | | |
| 開催会場名 | | 参加予定人数 | 人 |
| 会場所在地 | | 会場電話番号 | |
| 予定発表演題数 | □演 () 題、示説 () 題 | | *その他希望がありましたらご記入下さい。 (例：講師2名希望) |
| 発表演題の分野 *わかればご記入下さい。 | | | |

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「看護研究発表会支援」決定通知書

ご依頼いただきました院内看護研究発表会の講師は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

| | | | | |
|------|--------|------------------------|-------|--|
| 決定事項 | 発表会の名称 | | | |
| | 開催日時 | 平成 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 | | |
| | 講師氏名 | | 講師連絡先 | |

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。

⑥ 平成27年度 「出前講座」のご案内

三重県立看護大学の教員は、自身の研究や社会的活動の成果をもとにした県民の皆さま対象の出前講座を行っております。皆さまからのお申し込みにより、集会・学習会などにお伺いして講演を行います。本冊子掲載の講座一覧からご希望のテーマをお選びください。

● 目的

より多くの県民の皆さまに、看護や医療、健康などに関心をもっていただくことを目的としています。

● 申込受付

平成27年度の申し込みは平成27年11月30日（月）まで受け付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

● 対象とする集会等

県内に在住・在勤・在学の5名以上の参加者が見込めるグループ・団体などが対象です。場合によっては、公開講座としての開催をお願いすることがあります。

● 申し込み方法

折り込みの申込書により三重県立看護大学地域交流センターまで、FAX、E-mail、郵送のいずれかでお申し込みください。なお、申込書は三重県立看護大学ホームページ (<http://www.mcn.ac.jp/>) にてダウンロードできます。

● ご理解いただきたいこと

- ・ 原則として講師料は無料で交通費（三重県立看護大学から会場までの公共交通機関利用往復料金、自家用車使用の場合は30円/1km）のみいただきます。*交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、依頼者側が宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いいただきます。
- ・ 一施設からのお申し込み件数は、2件以内とさせていただきます。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 会場の手配、参加者への開催の周知は利用者側でお願いします。大学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じます。時間は1講座90分以内の開催となります。
- ・ 本学は、看護職を養成する単科大学であり、時期によって（特に5～6月、10～1月）は臨地実習のため教員の大半が学外で学生教育にあたるため不在になることから、ご希望に添えない場合もあります。教員個々に予定が異なるため、まずはお問い合わせください。
- ・ 申し込みご依頼後1か月を過ぎても、地域交流センターからの返事がない場合は、お電話にてご確認くださいませようお願いいたします。

● お申し込みから実施までの流れ

1. 三重県立看護大学地域交流センター「平成27年度講師派遣のご紹介」の『出前講座』より、ご希望のテーマをお選びください。
2. 申込書に記載のうえ、三重県立看護大学地域交流センターまでお申し込みください（申し込みの前にお問い合わせいただくことも可能です）。
3. 担当講師との日程の調整後、地域交流センターより決定通知書をお送りします。
4. 講座開催日までに講師派遣依頼文書を県立看護大学地域交流センターまでお送りください。
5. 講座の詳細については、担当講師と直接打ち合わせを行ってください。

● お問い合わせ先

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地1
公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター
TEL/FAX (059) 233-5610
E-mail : rc@mcn.ac.jp

⑥ 平成27年度 「出前講座」 申込書

申込書記入日 平成 年 月 日

| | | | | | | | |
|-----------|-------|---|-----|--|--------|--|--|
| 機関・団体等の名称 | | | | | | | |
| 連絡先 | 住所 | 〒 | | | | | |
| | 担当者氏名 | | | | | | |
| | 電話 | | FAX | | E-mail | | |

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、出前講座決定通知書の送付や出前講座実施に向けての打ち合わせに使用させていただきますものであり、その他の用途に使用することはありません。

| | | | | | |
|--|---------|---|------|---|------------------------|
| 出前講座の希望内容 | 開催希望日時 | 平成 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 | | | |
| | 開催会場名 | | | 参加予定人数 | 名 |
| | 会場所在地 | | | 参加者の内訳 (例：看護師 30名、 保護者 30名、高校 2年生 30名など) | |
| | 番号/テーマ名 | No. | テーマ名 | | |
| 出前講座資料 *資料の有無は講座によります。 必要部数の印刷は依頼者側で行っていただきます。 | | <input type="checkbox"/> 事前に必要 <input type="checkbox"/> 当日でよい | | | *その他ご希望がありましたらご記入ください。 |

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「出前講座」決定通知書

ご依頼いただきました出前講座は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

| | | | | | | |
|------|-------|------------------------|------|-------|--|--|
| 決定事項 | テーマ番号 | No. | テーマ名 | | | |
| | 開催日時 | 平成 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 | | | | |
| | 講師氏名 | | | 講師連絡先 | | |

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がありましたら下記の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

⑦ 平成27年度「その他の講師派遣」のご案内

三重県立看護大学地域交流センターでは、看護研究に関する講座や出前講座等を実施しておりますが、いずれの講座にも含まれない場合、例えば「出前講座にはない〇〇に関する講演をしてほしい」のようなご要望がありましたら、所定の申込用紙にご記入の上、地域交流センターまでお送りください。

本学にすでに準備がある講座以外の場合、有料となりますのであらかじめご了承ください（料金はお問い合わせください）。

【問い合わせ先】

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地1
公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター
TEL/ FAX (059) 233-5610
E-mail : rc@mcn.ac.jp

⑦ 平成27年度「その他の講師派遣」申込書

※ 該当する様式がない依頼の場合にご使用ください。有料でお受けします。

申込書記入日 平成 年 月 日

| | | | | | | | |
|-----|-------|---|-----|--|--------|--|--|
| 団体名 | | | | | | | |
| 連絡先 | 所在地 | 〒 | | | | | |
| | 担当者氏名 | | | | | | |
| | 電話 | | FAX | | E-mail | | |

| | |
|---------------------|--|
| 具体的内容 *別紙添付可 | |
| 希望時期（日時） | |
| 希望の教員名等、 その他希望内容 | |

以下は地域交流センター使用欄

決定通知書

ご依頼いただきました事業の担当教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

| | | | | | | | | | | |
|------|------|----|---|-----------|------|---|---|---|---|---|
| 決定事項 | 依頼内容 | | | | | | | | | |
| | 開催日時 | 平成 | 年 | 月 | 日（ ） | 時 | 分 | ～ | 時 | 分 |
| | 教員氏名 | | | 教員 連絡先 | | | | | | |

上記の教員にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】三重県立看護大学地域交流センター

電話/FAX (059)233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

編集後記

三重県立看護大学地域交流センター平成 27 年度年報が完成いたしました。

ご協力いただきましたみなさまに感謝いたします。

今年度も看護の質の向上を目指す教育活動に取り組み、また各教員から提案された様々な事業が実施されました。活動を進めるにあたり関係者の皆様、地域の皆様に多大なご理解ご協力いただきましたことを、感謝申し上げます。

それぞれの事業内容を「県民の健康増進事業」「みえ看護力向上支援事業」「卒業生支援事業」「地域住民ふれあい推進事業」「講師派遣事業」の 5 項目にまとめ、資料と共に収録いたしました。

本年報を通じて、より多くの皆様に当地域交流センターの活動と地域貢献についてご理解いただければ幸いです。

三重県立看護大学
地域交流センター
平成 27 年度
Vol.18

| | |
|------|--------------------------------|
| 編 集 | 丹生かづ |
| 発 行 | 三重県立看護大学地域交流センター |
| 住 所 | 〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1 |
| 発行年月 | 平成 28 年 3 月 |
